

資料

ドイツ語読解の戦略と戦術 (4)

—— 語彙力の拡充 ——

2017年3月

早稲田大学商学部

原 口 厚

目次

0. はじめに	38
1. 語彙に対する基本戦略	40
1.1. 応急的対策	42
1.2. 長期的対策	44
1.3. 語彙力拡充の戦術的支援策	45
2. 英語語彙の戦力化	47
2.1. ドイツ語と英語の歴史的関係	47
2.2. ドイツ語語彙と英語語彙の対応	49
2.3. 英語語彙利用にあたっての注意	53
3. 造語法の活用	54
3.1. 変母音 (Umlaut) について	54
3.2. 合成 (Zusammensetzung)	57
3.2.1. 合成語における接合素 -(e)s- と -(e)n-	58
3.3. 派生 (Ableitung)	59

3.3.1. 接辞による派生	59
3.3.1.1. 名詞を作る接尾辞	61
3.3.1.2. 形容詞を作る接尾辞	62
3.3.1.3. 形容詞を接尾語として新たな形容詞をつくる場合	63
3.3.1.4. 形容詞と名詞を作る接頭辞	65
3.3.2. 接辞によらない派生	67
3.3.2.1. 逆成 (Rückbildung)	67
3.3.2.2. 音変異 (Mutation) による派生	67
3.3.2.2.1. 幹母音造語 (Ablautbildung)	68
3.3.2.2.2. 母音交替 (Ablaut) + 変母音 (Umlaut)	68
3.3.2.2.3. 文法的交替 (Grammatischer Wechsel)	69
3.4. 共成 (Zusammenbildung)	69
3.5. 品詞転換 (Konversion)	70
3.6. 統語的転換 (Syntaktische Konversion)	71
3.7. 合接 (Zusammenrückung/Amalgamierung)	72
3.8. 複合動詞	72
3.8.1. 非分離動詞	72
3.8.2. 分離動詞	74
3.8.3. 分離・非分離動詞	74
3.9. 造語法活用にあたっての注意	75
4. 語彙の分類と基本語彙	77
4.1. 語彙の分類	77
4.2. 語の数え方とコーパス, カバー率	80
4.3. 英語のテキスト理解に必要なカバー率と語数	83
4.4. ドイツ語基本語彙の研究と成果	88
4.5. ドイツ語基本語彙とテキスト理解	92
5. 機能語	95
5.1. 前置詞	96
5.1.1. 前置詞の表す諸関係	97
5.1.2. 前置詞と副詞	99
5.2. 接続語	101

5. 2. 1.	読解における接続語の効用	101
5. 2. 2.	接続語の種類	103
5. 2. 3.	機能別に見た接続語	106
5. 2. 3. 1.	並列	109
5. 2. 3. 2.	反対・対立	111
5. 2. 3. 3.	選択・代替	113
5. 2. 3. 4.	原因・理由	114
5. 2. 3. 5.	結果・帰結	116
5. 2. 3. 6.	条件	119
5. 2. 3. 7.	譲歩・認容	121
5. 2. 3. 8.	目的	121
5. 2. 3. 9.	陳述内容	122
5. 2. 3. 10.	様態	122
5. 2. 3. 10. 1.	手段	122
5. 2. 3. 10. 2.	比較・比例	123
5. 2. 3. 11.	時間	124
5. 2. 3. 11. 1.	前時性	124
5. 2. 3. 11. 2.	同時性	125
5. 2. 3. 11. 3.	後時性	127
6.	内容語	127
6. 1.	分野固有語彙	128
6. 2.	準分野固有語彙	129
6. 3.	特定領域集中型読解法	131
6. 4.	特殊化語彙の整理と習得	133
6. 5.	特殊化語彙の一般的語彙への還元	136
6. 6.	一般内容語	137
6. 7.	低頻度語	139
7.	実例	139
7. 1.	独検3級・〈ハンブルク〉	141
7. 1. 1.	Okamura et al. による場合	142
7. 1. 2.	Okamura et al. と Tschirner による場合	144

7.2. 独検2級・〈ドイツ人と旅行〉	145
7.2.1. Okamura et al. による場合	146
7.2.2. Okamura et al. と Tschirner による場合	149
7.3. 「ドイツ語Ⅱ総合」統一教材・〈ドイツ人の食生活〉	152
7.3.1. Okamura et al. による場合	153
7.3.2. Okamura et al. と Tschirner による場合	156
7.4. 「ドイツ語読解法」教材・〈人口問題〉	159
7.4.1. Okamura et al. による場合	160
7.4.2. Okamura et al. と Tschirner による場合	163
7.5. 捕捉率のまとめ	166
8. 語彙習得に際しての注意点と提案	167
9. おわりに	171
10. 註	174
11. 文献一覧	175
11.1. 引用文献	175
11.2. 辞書類	177
11.3. 本稿で言及した文献	178

0. はじめに

本稿は筆者がこれまで文化論集に掲載してきた「ドイツ語読解の戦略と戦術 (1)~(3)」(以下では「戦略と戦術 (1)~(3)」と略記)の続編である。したがって作成の趣旨やドイツ語教育に対する考え方などは今回も基本的に同じである。これまでの拙稿では、テキストの概要を巨視的に把握することから始めて(「戦略と戦術 (1)」)、複合文を部分文に切り分け、さらにこれを文成分に分解し(「戦略と戦術 (2)」)、そのうえで個々の文法的問題に対処する(「戦略と戦術 (3)」)という〈全体から部分へ〉と進む方向で解説を進めてきた。今回はそ

の延長線上で、文成分を構成する〈語彙〉を取り上げる。

これに際して読む対象として想定するのは、筆者が早大商学部で担当する〈ドイツ語Ⅱ選択(上級)「ドイツ語読解法」〉(旧称は〈ドイツ語Ⅲ「ドイツ語読解法」〉)で扱う教材のようなテキスト、すなわち人口問題や食糧問題などをはじめとする新聞・雑誌記事、あるいはウェブサイトなどのテキストである。そして読み手としては、中学校から英語を学び、大学でドイツ語を始め、一回90分で週に二回、一年間で30週間の授業を一年半から二年程度履修し、ある程度ドイツ語が理解でき、さらに読解力の向上を望む一方で、文法が十分に定着しているとはいえ、語彙もまだ不足しているといった大学生などを想定する。こうした前提に基づいて今回目標とするのは、これらの学習者が、上記のようなテキストをあまり辞書に頼らずに読みこなせる読解力を形成しようとした場合に、これを支える語彙力の強化・拡大をどのように図るかについての作戦計画を立案し、戦略と戦術の両面にわたって具体的助言を行うことである。

外国語は時間をかけて体で習得するという色彩が強い。そして日本には〈ガンバリズム〉の伝統が根強い。しかし何でもひたすら頑張ればよいというものではない。重要なのは、まず目標を明確にし、これに適合した方法を使っただけでの頑張りである。こうした意味において、外国語の学習もまた目標と手段によって構成される一つの作戦行動(Operation)である。また小学生ならともかく、大人の場合は、教員の指示に従っているだけでは不十分であり、自分に合った学び方を積極的に立案・工夫する自立／自律的勉強が不可欠である。学校や教室を離ればその必要性はさらに高まる。こうした場合に依拠すべきなのが、言語学や外国語教育研究の知見や成果である。本稿は読解の〈手引き〉としては長く、理屈が多い。それは「戦略と戦術(1)」(p.233)でも述べたように、学習者、あるいはドイツ語学やドイツ語教育を専門とするわけではないドイツ語教員、教員を目指す大学院生諸氏などは言語や言語習得の仕組みなどの概要をまず理解しておく必要があると考えるからである。

語彙はその使用という観点から、〈受容的語彙〉と〈発表語彙〉の二種類に分けられる。前者は「聞いたり読んだりして、単語の形のインプットを受けたときに、その意味がわかる語彙」(望月(他), p.35)であるのに対して、後者は「伝えたい意味を適切な語形にして、言ったり書いたりできる語彙のこと」(望月(他), p.35)を指す。本稿では読解力の育成という観点から、原則として受容的語彙を対象とする。

文献からの引用にあたっては、〈⇒ ○○頁を参照〉といった文献内部での参照指示は省略した。また1998年に正書法が改正されたことにより、引用文献によっては綴りなどが今日とは異なる場合がある。

それぞれの語には長い歴史がある。また語彙力と読解力の関係も単純ではない。そこで今回は、これまで以上に精密な調査と研究を要する箇所が多い。しかし筆者が活着している間にこれを完了することは不可能である。そこで今回も見切り発車を行った。不備については、後を引き継ぐ諸氏にとっての反面教師となることを祈る。

本稿の作成にあたって、基礎語彙等に関して本学国際教養学部の岡村三郎氏、元商学部同僚の Dr. Willi Lange 氏, Technische Universität Dresden の Prof. Dr. Joachim Scharloth 氏に、英語の対応語については本学商学部の山田茂氏に、校正作業に際しては本学商学研究科院生の稲川翠氏に多くの助言と協力をいただいた。この場を借りて深く感謝の意を表したい。これらなしに本稿は成立しなかったであろう。

1. 語彙に対する基本戦略

Laufer and Sim は、「外国語のテキストを読む者にとって最も差し迫って必要なのは語彙、次に主題についての内容的知識、そして段落や文の組み立てに

についての知識である」(Laufer and Sim, p. 409) としている。文構造などの文法はその名の通り〈決まり〉であり、規則性である。とりわけ初歩的学習者にとって重要な項目の数はある程度限られる。そこで目標は比較的明確であり、一定の枠内を何度も反復などすれば習得もそれほど困難ではない。これに対して、語彙についてこのような量的限定は困難である。読むに際して語彙が最重要であると同時に最大の困難でもある理由はこの点にある。

現代ドイツ語の語彙の規模は、見積もりによって著しく異なるものの、標準語では30万語から50万語の間を上下する。これに専門用語を加えると、その数はおそらくさらに数倍に上るであろう。これに毎年約4000の新しい語ないしは語意味が加わる。医学だけでも50万の専門用語を有している。(Bohn, p. 9)

もとより母語話者といえどもこれをすべて身につけているわけではない。しかしBohnは、発表語彙が僅かに1万2000語であるのに対して、受容語彙は約10万語に及ぶとしている(Bohn, p. 9)⁽¹⁾。こうした母語話者が書いたテキストを非母語話者が読もうとするならば、中学・高校の英語学習や受験英語などの場で時折耳にする〈まず語彙を完璧に仕上げる〉などということは不可能であり、ドイツ語にかなり習熟した段階に至っても次々と未知の語彙に遭遇するのが常態である。したがって実戦的な読解力とは、未知の語彙の存在をあらかじめ考慮に入れたうえでテキスト内容の理解に力を発揮するものでなければならない。水泳に例えるならば、目標とすべきは教室というプールの中できれいな型で速く泳ぐことではない。重要なのは、風波や潮流、日射などの困難がある海中で遠くの目標に泳ぎ着く能力、あるいは救助が来るまで持ちこたえる力である。読むことそして学ぶことを学校課題的⁽²⁾な教室内儀式や得点競技に矮小化してはならない。

上に見たように、すべての語彙を覚えることはできず、母語話者並の語彙力を獲得することもきわめて困難である一方、少しでも多くの語彙が分かるほうが有利であることもまた確かである。そして後に見るように、語によってテキスト中での出現頻度には差があり、テキスト理解にとって各語が果たす重要度も異なる。そこで第一に目標とすべきは、当然のことながら、自分が読もうとする分野のテキストに頻出し、重要度の高い語の習得を優先することである。そして第二に、仮に1000語習得するとしても、1000語にしか対応しない硬直的な語彙力ではなく、実際のテキストの中で2000語、3000語にも対応できるような柔軟かつ創造的、発展的な語彙力を形成することである。

外国語の運用能力形成にとって重要なのは、積極的に使うことであり、使用の現場から学び、学んだことを今度は使用するという循環構造の中で少しずつ習熟度を高めてゆくことである。そして読解力形成にとって何よりも必要なのは、大量に読むことである。一定時間内に大量に読むためには速く読む必要がある。また勉強や仕事の場では、重要な箇所とそうでないところを見分けるためにも、まずは速く大量に読めなければ外国語は使い物にならない。これらのことを考え合わせるならば、実戦的な読解力と語彙力形成の基本戦略は、未知語（未知の語彙）を何らかの方法で克服しつつ速く大量に読む中で語彙の獲得と蓄積を図ることである。そのために必要なのは応急的対策と長期的対策であり、問題は両者をいかに統合して行うかの具体的方法である。

1. 1. 応急的対策

未知語に対処するにはおおよそ次の四通りの方法が考えられる。1)～3)はテキストを読んでいる時の応急的対策であり、4)は長期的対策である。

1) 無視する

2) 語意味を推測する

3) 辞書を引く

4) 既知語（既知の語彙）を増やす

読むこと目標はテキスト内容の理解であり、一字一句を日本語に〈訳す〉ことではない。そこで1)のように、未知語の意味内容が分からずともテキストが理解できればそれにこしたことはない。しかしこれが常に可能であるとは限らない。そこで推奨されるのが2)である。筆者も「戦略と戦術 (1)」でこれを勧めた。これは理にかなった有益な戦術である。1)と2)で読めれば理想的である。しかし1)のみならず、2)もまた常に成功するとは限らない。なぜならば、未知語の意味内容を推測するためには、手掛りとなる周囲の前提語 (Prämisse) (Röhr, p. 12) の意味内容がわかっている必要があるからである。そこで皮肉なことに、手持ちの語彙がまだ乏しく、こうした戦術をとりわけ必要とする初心者の場合、残念ながらこれを行うことは一般に容易ではない。また前提語などが分かっても、未知語の意味内容が判然としない場合も少なくない。

そこで現実問題として3)は不可避である。しかしこれは「戦略と戦術 (1)」の266-271頁でも述べたように、1)と2)によって未知語を漸減させた上での手段である。未知語を片端から辞書で引いてはならない。読解は勤勉性の涵養という道徳教育の場ではない（「戦略と戦術 (1)」, p. 271）。目標はテキスト内容をなるべく少ない時間と労力で手際よく（英語の“smart”）把握することである。こうした観点から読解力育成にとって重要なのは、1)と2)を積極的に援用しつつ、内容理解や他の語の意味内容の推測にとって不可欠な語に絞って一つでも少なく辞書を引く努力である。いわば狙撃手の射撃である（「戦略と戦術 (1)」, p. 272）。未知語をすべて辞書で引くことは小学生でもできる。しかし目標を少数の重要語に絞ることはそれほど容易ではない。そのためにはまず前後関係や文構造などから重要な語を見定める能力が求められる。最初は辞

書を多く引くよりもかえって時間がかかるかもしれない。しかし慣れるにしたがって重要語の見分けも容易になり、速く大量に読めるようになるはずである。こうした努力の中から読解力が形成される。

1. 2. 長期的対策

語彙は巨大な学習対象であることから、その攻略は一筋縄ではゆかず、さまざまな経路から複合的、多面的な取り組みが必要である。そこで1)~3)と並行して不可欠なのが長期的な観点からの4)である。両者は相互補完的に機能する。なぜならば、1), 2)の能力向上を図ることにより、3), 4)にかかる負担が減少する一方、4)の効果によって1), 2), 3)がさらに有効に機能するという相乗効果が生まれるからである。これによってより速く、大量に読むことが可能となる。

Stanovich は、新しい情報の獲得に際して既存の知識基盤が重要であるという認知的発達に関する最近の知見から次のように述べている。

[...] 教育の領域においてマシユー効果⁽³⁾をもたらすメカニズムの一つは、豊富かつ精巧に作り上げられた既存の知識基盤が更に学習を促進することである。専門的的技能知識を身につけている者はより大きな知識基盤を持っており、この知識基盤はより大きな専門的的技能知識をより速やかに獲得することを可能にする。(Stanovich, p. 381)

こうした観点から Stanovich は、教育におけるマシユー効果の考え方を読解能力の問題に転用する。そして「読解におけるこれと相似的なマシユー効果は、より発達した語彙力を持つ者がよりよい読み手であるという事実から生まれる」(Stanovich, p. 381) とし、このような語彙知識と読解能力の相互作用の間には『『豊かな者がより豊かになる (“rich-get-richer”)』』、ないしは累加的有利

性の現象 (cumulative advantage phenomenon) (Stanovich, p. 381), すなわち「読解におけるマシュー効果 (Matthew Effects in Reading) (Stanovich, p. 380) が存在するとしている。そして「この関係 (注 語彙力と読解能力の間に展開する相互促進作用) を読解技能の発達において大きな個人差を引き起こす強力な自転的仕組み (bootstrapping mechanism) に転化させる重要な媒介変数は読解経験の量である」(Stanovich, p. 380) としている。

外国語の読解にとって語彙や文法は戦略目標ではなく、戦術的手段にすぎない。そして語彙を十分に増やしてから読み始めようなどと考えていたら人生はいくつあっても足りない。これらのことを考えるならば、必要なのはテキストを手にとってまず読み始めることであり、1)~3)によって未知語に対処しながら、これを4)につなげることによって語彙力と読解力の拡大・強化を図ることである。

1. 3. 語彙力拡充の戦術的支援策

語彙力の拡充を図るにあたっての出発点は、まず手持ちの言語資源を十分に活用することである。具体的には、ドイツ語学習者の多くにとって既習外国語である英語の語彙の戦力化と、既に知っているドイツ語語彙の〈使いまわし〉を図ることである。そのために必要なのが、ドイツ語と英語の関係や造語法についての理解といった戦術的支援策である。これによってあらたに習得すべき語彙を縮減することができる。

歴史的にドイツ語は英語と親戚関係にある。そこで両者の間には文法のみならず語彙にも一定の共通性や類似、対応関係が存在する。このことはドイツ語語彙を理解し習得するうえで大きな助けとなる。少なくとも既存の英語語彙の一部は、僅かな労力でドイツ語語彙としても利用が可能である。

またドイツ語には Zweigenerationenhaushalt (二世代同居世帯) のように長い語が頻出する。これはいくつかの語や接辞 (接頭辞 = 前つづり・接尾辞 = 後

つづり)の組合せなどによる造語が活発に行われるからである。これは厄介である一方、比較的少数の〈部品の使いまわし〉によって多くの語彙に対処できるという点で経済的かつ便利であり、手持ちの語彙も造語法の活用によって実質的に何倍かに拡大が可能である。また未知語をいくつかの構成要素に分解できれば、そこに既知語や接辞などを見いだし、これを突破口として語意味の見当をつけられる場合も少なくない。Zweigerationenhaushalt を例とすれば、その中に埋まっている zwei (two), Generationen (generations), Haus (house), Halt (hold) という既知語やドイツ語に対応する英語語彙が見つけられれば、内容理解にとって大きな力となる。要は「戦略と戦術 (2)」の216頁で述べたように、分断と個別撃破である。このことは文のみならず、語についても該当する。

英語語彙や造語法の活用は、ドイツ語語彙の組織的、量的拡大にとって有益であるのみならず、語彙習得と記憶の構造化という質的側面においてもこれを支援する。なぜならば、学習・記憶とは新しい情報をいわば白紙の上に書き記すようなものではなく、これを既有知識で受け止め、両者の間に有機的な関係をつくり出すものだからである。そこで語彙の学習や記憶に際しても、新しい語に関する情報を受け止めて記憶に係留し、そして想起に際してはその手掛かりとなる副次的知識を介在させることが重要である。その簡単な例証は、電話番号や年号などの記憶に際しての語呂合わせである。これによって無意味な数字の羅列は有意味化され、記憶と想起が容易となる。語彙の習得も基本的に同じである。むやみに丸暗記を図るよりも、英語語彙との関連や造語上の知識などを介在させることは記憶と想起に際しての〈取っ掛かり〉を増し、その容易化と安定に大きく寄与する。

語彙の学習・習得に際して特に問題となるのは、「忘却との戦い」(Bohn, p. 35)である。そこで急急、長期のいずれの対策においても「『効果的に』、『自立して』、『脳に対して適切に』、すなわち脳における情報処理に対応して学ぶ

こと」(Bohn, p. 35)を何よりも心がけなければならない。既知語を増やすことが語彙力拡充における正攻法だとすれば、未知語の推測はいわば側面からの戦術的支援であり、英語語彙の戦力化や造語法の活用は後方支援にもたとえることができる。

2. 英語語彙の戦力化

上に述べたように、英語語彙についての既有知識や能力は、ドイツ語を使う／学ぶ上での手持ちの貴重な潜在的言語資源であり、その戦力化は未知語の意味内容に見当をつけ、語彙力の拡大・強化を図るうえで有力な戦術的支援策である。

2.1. ドイツ語と英語の歴史的関係

ハンガリー語、フィンランド語、トルコ語、バスク語などを除いて、インドからヨーロッパにかけての多くの言語は互いに〈親戚関係〉にある。

東はインドから西は大西洋沿岸、北はスカンジナビアから南は地中海におよぶ広い地域で話されている言葉には、どこか似た点がある。このためこれらの諸地域に住む民族の先祖は有史以前の大昔には同じ言葉を話していた一つの民族であったのだらうと推定されている。

こういう一つの共通原語から分れ出て発展した言葉を印欧語と呼んでいる。印欧語は次の8つに分けられる。

1. *Germanic* (ゲルマン語；ドイツ語、英語、オランダ語、スウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語、アイスランド語)
2. *Celtic* (ケルト語)
3. *Italic* (フランス語、イタリア語、スペイン語等)

4. *Hellenic* (ギリシア語)
5. *Albanian* (アルバニア語等)
6. *Armenian* (アルメニア語)
7. *Balto-Slavonic* (スラブ語; ロシア語, ポーランド語, チェコ語, ブルガリア語等)
8. *Indo-Iranian* (サンスクリットその他) (佐々木, p. 14)

1. ~ 8. のそれぞれの中では, これに属する諸言語の関係はより密接であり, ドイツ語と英語は〈姉妹語〉とも言われる。両者の関係の概要は次のとおりである。

イギリスの先住民はケルト族であったが, 5世紀の半ば頃, ドイツのエルベ河の下流に住んでいた, アンゲル族, サクソン族およびデンマークのユトランド半島に住んでいたジユート族がイギリスを占領した。これらのゲルマン民族が話していた言葉がいわゆるアングロ・サクソン語 (*Old English* 古代英語, 6~12世紀) でこれが今日の英語の土台となっている。

このように, 古代英語を話していたアングロ・サクソン族は, ヨーロッパ大陸から移住したゲルマン民族なので, 古代英語はゲルマン語の一方言であったわけである。ところが1066年にフランスのノルマンディー公ウイリアム征服王 (*William the Conqueror*) がイギリスを征服し, その後約300年間英語はフランスの一方言であるノルマンディー語 (*Norman French*) の強い影響をうけた。このため, 約3万語のフランス語が英語に入り, 文法も大きく変化した。

古代英語は, 現在のドイツ語と同じように名詞は男性, 女性, 中性の区別があり, 格も4つあって語尾変化し, 冠詞, 形容詞も名詞の性・数・格に応じて変化した。しかしこういう複雑な語形変化は, ノルマン人の征服

以来、次第に簡素化され、その後近代英語に見られるような形態を整えるようになった。

近代英語の語彙の半数はロマン [ス] 語（前頁の3. *Italic* においてあげた、ラテン語に由来する近代諸語の総称）系で、ゲルマン語系は英語の約3分の1を占めているにすぎない。しかし、実際に日常使われている英語の約80%はゲルマン語系の言葉である。従って、本質的には英語はやはりゲルマン語系の言葉である。このように、英語はゲルマン語とロマン [ス] 語の混血児であるが、これに対して、ドイツ語は、昔のままの形態を整えているたいへん保守的な言葉である。（佐々木, pp. 14-15）

一方ドイツでは、5-7世紀にかけて南部の山岳地帯から始まって中部ドイツにかけての地域で子音が変化した。これを高地ドイツ語子音推移と呼ぶ。これによって今日のドイツの共通語である高地ドイツ語がゲルマン語から分立した。その結果ドイツ語の発音は、高地ドイツ語子音推移の影響の有無によって、高地ドイツ語と北ドイツの低地ドイツ語で違いが生ずるとともに、後者と英語の間には一定の共通性が残存することとなった。

高地ドイツ語

Was ist das? Das ist ein Apfel.

低地ドイツ語

Wat is dat? Dat is en Appel.

英語

What is that? That is an apple. (三好, p. 4)

2. 2. ドイツ語語彙と英語語彙の対応

野入・太城は「ドイツ語と、高地ドイツ語子音推移とは無関係の英語との間

に見られる対応の語例」(野入・太城, p. 31) を次のように挙げている。なお本章の太字と斜体, < : > ニヶ所と < , > 一ヶ所の補足は筆者による。

p → pf の推移に関して :

Pfanne, Pfeffer, Pfeife, Pfennig, Pfund, Pflaster
pan, pepper, pipe, penny, pound, plaster
 平鍋 こしょう パイプ ペニヒ ポンド 舗装

p → f の推移に関して :

Schiff, Schaf, hoffen, schlafen, helfen, Affe, offen, tief
ship, sheep, hope, sleep, help, ape, open, deep
 船 羊 望む 眠る 助ける 猿 開いた 深い

t → z の推移に関して :

zehn, zu, zwei, Katze, Herz, Salz, Zahn, Zunge, Zeit
ten, to, two, cat, heart, salt, tooth, tongue, tide
 十 …へ 二 猫 心臓 塩 歯 舌 (潮) 時

t → ss (音としては [s]) の推移に関して :

Wasser, Fuß, groß, essen, grüßen, hassen, besser, heiß
water, foot great, eat, greet, hate, better, hot
 水 足 大きい 食べる 挨拶する 憎む よりよい 熱い

k → h の推移 (後にこの音は現代ドイツ語の中では ch[x/ç] と表記される) :

Buch, Milch, Eiche, Woche, Lerche, machen, Kuchen, kochen
book, milk, oak, week, lark, make, cake, cook

本 ミルク オーク 週 雲雀 作る ケーキ 料理する

d → t の推移に関して :

Gott, Bett, gut, alt, unter, Brot, Garten, rot, selten
god, bed, good, old, under, bread, garden, red, seldom
 神 ベッド 良い 古い 下に パン 庭 赤い 稀に

(野入・太城, p. 32)

また野入・太城は「高地ドイツ語子音推移と関わりのない音の対応」(野入・太城, p. 32) として次のような例を挙げている。

ドイツ語の **d** と英語の **th** :

drei, du, denken, danken, Feder, Donner, Nord, Erde
three, thou, think, thank, feather, thunder, north, earth
 三 君 考える 感謝する 羽毛 雷 北 地

ドイツ語の **b** と英語の **f/v** :

Leib, Kalb, halb, ob, lieben, leben, haben, Leber
life, calf, half, if, love, live, have, liver
 肉体 子牛 半分 …かどうか 愛する 生きる 持つ 肝臓

◇ ドイツ語 Herbst 秋と英語 *harvest* 収穫, ドイツ語 Weib と英語 *wife* もこの対応を示している。

母音に関してドイツ語で **ei [ai]** が英語で **o [oo]** の場合 :

allein, Stein, Seife, Eiche, beide, schneien, heilig

alone, stone, soap, oak, both, snow, holy
 孤独な 石 石鹸 オーク 両者の 雪が降る 聖なる

breit, Heim, eigen
broad, home, own
 幅が広い わが家 独自の

◇ ドイツ語 *Bein* 足と英語 *bone* 骨もこの対応を示している。(野入・太城, pp. 32-33)

またドイツ語と英語に共通するものとして野入・太城は次のような例を挙げている。

b の音に関して：Bruder, *brother* 兄弟；bringen, *bring* 持つてくる
f の音に関して：Feld, *field* 野原；Finger, *finger* 指
g の音に関して：Gras, *grass* 草；gut, *good* 良い
h の音に関して：Haus, *house* 家；hart, *hard* 固い (野入・太城, p. 33)

このようなドイツ語と英語の対応についてさらに詳しく知りたければ、巻末の文献一覧に挙げた関口存男所収の「英語と獨逸語」、英語側の変化については寺澤盾、寺澤芳雄、中島文雄、勝又永朗などを参照されたい。また福田幸夫(1994)『英語から覚えるドイツ語単語』は、第1部が英語との比較、第2部は次章の「造語法の活用」で説明する〈派生〉に基づいて構成されており、多くの実例を見ることができる。

2. 3. 英語語彙利用にあたっての注意

上の一覧表を見るとドイツ語と英語の対応は一目瞭然のように見える。また英語に多量のフランス語をはじめラテン語、ギリシャ語などの語彙が含まれているように、ドイツ語にもまたラテン語やギリシア語、フランス語などに由来する語彙は少なくない。したがって、両言語での語彙の重なりはさらに大きい。しかし特に初心者の場合、上の対応表などを頭に入れたとしても、実際のテキストの中で遭遇する語について独英の対応を見抜くことはそれほど容易ではないであろう。また両者に語源的関係があり、発音や綴りが似ていても、Herbst (秋) と *harvest* (収穫), Zeit (時, 時間) と *tide* (潮時), Bein (脚) と *bone* (骨),あるいは Meinung (意見) と *meaning* (意味) などのようにその意味内容を異にする場合も少なくない。そこで重要なのは、問題となる語だけを取り出して発音や綴りを比較検討するのではなく、常にテキスト内容や前後関係といった脈絡の中で語の意味内容や英語との対応を考えることである。読むということは、一般常識やテキストに関する内容的知識と文法、語彙などとの間の整合性の追求、すなわち〈つじつま合わせ〉である。

場合によっては辞書を引いた結果、英語の対応語を思いつくこともあろう。そうした場合にはドイツ語の語彙を英語との対応と共に記憶するとよいであろう。前にも述べたように、これが記憶を係留し、想起する上での手がかりとなる。そこで英語が好き、よくできるといった場合には独英辞典の利用を推奨する。kalt は cold, identifizieren は identify, genug は enough であり、〈寒い〉や〈同定する〉、〈十分に〉といった日本語を介在させるよりも話が手取り早いこともしばしばである。Langenscheidt や Oxford などの出版社から大小さまざまなものが出ている。独英と英独が一冊に合本されているものもある。

いずれにせよ手をこまねいて傍観しては何も始まらない。上の対応表を暗記して対応関係をきれいに見抜こうとするよりも、語意味推測の一助として、積極果敢にまずは想像をたくましくして試みることである。互いに外国語な

ので〈違ってもともと、関係する語に思い当れば幸運〉くらいに思って取り組むとよいであろう。但し上に述べたように、似ていても異なる場合もあるので、辞書で確かめる必要がある。しかし間違っただとしても、そうした経験もまた一つのエピソードとして正しい記憶の助けとなるはずである。〈失敗は成功のもと〉である。こうした試行錯誤をしばらく繰り返すうちに、なんとなく嗅ぎ分けられるようになるものである。諦めてはいけない。要は気長に継続することである。千里の道も一歩からである。

3. 造語法の活用

語を一つずつバラバラに獲得し、覚えることを漁業の〈一本釣り〉とするならば、造語法の活用は〈延繩^{はえなわ}〉や〈漁網〉の利用にも例えられよう。これによって語彙は組織的に拡大が可能であるのみならず、その質においても安定する。以下では読解にとって重要と思われる〈合成〉と〈派生〉、〈共成〉、〈品詞転換〉、〈統語的転換〉、〈合接〉、〈複合動詞〉についてとりあげる。なおこれらに際して変母音（ウムラウト Umlaut）という現象が付随することがある。そこで最初にこれについて説明しておきたい。

3.1. 変母音（Umlaut）について

この現象は次のような発音上の理由によるものである。

次に挙げる変母音現象についての若干の説明を、これから発音する際の予備知識として参考にしていただきたいと思います。この発音上の現象は、我々の日本語にもたまたま見られるもので、それは次のような場合です。

いけない (*ikenai*), とろい (*toroi*), すごい (*sugoi*) がときに, いけねエ,
とれエ, すげエ

と発音される場合がありますが、これと似たような現象がドイツ語でも起こるのです。

では、こうした現象は、どうして起こるのかと言いますと、人は発話の際には常に、次に来る音の発音準備の構えをとりつつ、発音の態勢をとりますから、後続する音の影響を受けるのです。

上記の3つの場合には、後続する音が (i) 音です。まず、*ikenai* → *ikene* の例から説明します。[a] を発音するときの舌の位置は下顎にペタンとついたままですが、[i] の音を発音する間には舌はかなり前に出され、しかも、口の中の上の方で発音されることから、人間というのは、ここでエネルギーの節約をして、[a] と [i] の中間のところですましてしまうのです。つまり [a] の発音態勢をとりつつも、なかば [i] の構えに入っているのであって、ここでは、[a] の口をして [e] と発音し、同様に *toroi*, *sugoi* の例では [o] の発音態勢で [e] と発音するのです。さらに [u] の口をして [i] と発音すれば [y] の音になり、この音は日本語の「ゆ」の音にかなり近い音になります。

[a], [o], [u] の母音を後舌母音^{こうぜつ}といて、口の中では、舌は比較的后ろの方に引かれた位置で発音されます。これに対し、[i] 音は前舌母音^{ぜんぜつ}といて、口の中では、舌は比較的前面に出された位置で発音されます。このように [a], [o], [u] の後舌母音と、[i] の前舌母音とでは、発音する際の舌の位置が異なっており、連続して発音するときには、そこに、かなりの距離があります。それゆえに、労力と時間の節約の上から、歩み寄りが起こり、上述のような音声上の現象が起こるのです。

このようにして生じる変母音 (Umlaut) は、ドイツ語の母音 a, o, u にも起こります。これらは、それぞれ ä, ö, ü, Ä, Ö, Ü のように、こ

これらの母音の上に Umlaut (ウムラウト) 記号 ¨ をつけて表示します。(手嶋, pp. 14-15)

ドイツ語についてさらに詳しくは次のとおりである。

元来, a, o, u などの母音が後続の i-音の影響を受けて音質が変化したことを指し, 現代語の文字表記の上では a → ä, o → ö, u → ü, au → äu の四通りがある […]

古期高地ドイツ語においては, gast「客」(現代語の Gast) の複数形は gastī であった。この語末の i 音が先行の a 音に影響を与え, a 音が e 音に変わる (a 音の i 音への不完全同化)。次いで, 語末母音の弱化が生じて, gastī は gesti を経て geste となった。後にこの変化した e 音は ä と表記されるようになって (ä は ae の簡略化), 現代の Gast の複数形は Gäste と表記される。ここに見るように「変母音」は「後続の i 音への不完全同化」と定義できる。言語学上, これを i-Umlaut という。ウムラウトというのは本来, このように音韻が変質する現象のことであって, ä, ö, ü などの字母・文字の名称ではない (名称は, それぞれ [ɛ:], [ø:], [y:] である)。後になって類推 (→ Analogie 類推現象) により, 古語においてはあとに i 音が続いていなかったところにも, ウムラウトが現れることがある (Nagel (釘, 爪) の複数形の Nägel, Kranz (輪, 冠) の複数形の Kränze, Hals (首) の複数形の Hälse など)。(浜崎 (他), p. 72, 訳語筆者)

造語に際して変母音が見られるのは次のような場合である。

- (i) 語尾 -el, -chen, -lein を付した縮小形: Knochen (骨) > Knöchel (くるぶし), Mutter (母) > Mütterchen (おかあちゃん), Buch (本)

- > Büchlein (小さな本)。
- (ii) 形容詞から造った抽象名詞: hoch (高い) > Höhe (高さ), gut (良い) > Güte (善意), lang (長い) > Länge (長さ)。
- (iii) 語尾 -er を付して行為者を示す名詞: Garten (庭) > Gärtner (庭師), Schaf (羊) > Schäfer (羊飼), jagen (狩猟する) > Jäger (猟師)。
- (iv) 形容詞の比較形: hoch (高い) > höher (より高い), kalt (寒い) > kälter (より寒い)。
- (v) 語尾 -ig, -lich, -ischなどを付して造った形容詞: Macht (権力) > mächtig (権勢のある), loben (ほめる) > loblich (賞賛に値する), Hof (宮廷) > höfisch (宮廷風の, 典雅な)。
- (vi) 派生動詞: glatt (滑らかな) > glätten (滑らかにする), genug (十分な) > genügen (足りる), Trost (慰安) > trösten (慰める), fallen (落ちる) > fällen (切り倒す)。

(相良, p. 36, 太字と訳語筆者)

3. 2. 合成 (Zusammensetzung)

合成とは二つ以上の独立した語を結合することである。こうして作られた語は合成語と呼ばれる (ミッヒェル (他), p. 286)。

das Schlafzimmer	←	der Schlaf	+	das Zimmer
寝室		睡眠		部屋
		(規定語)		(基礎語)

〈部屋〉とはいっても世の中にはいろいろな部屋がある。こうした観点から、〈部屋〉を表す Zimmer を〈基礎語〉と呼び、語の最後に置く。そしてこれが

どのような Zimmer であるかを示す語はその前に置き、〈規定語〉と呼ぶ。Schlafzimmer とは要するに〈寝る部屋〉ということである。なお合成語の性は最後に置かれる語の性を引き継ぐ。このことは、最後に来るのが基礎語であることを考えれば納得できよう。この場合で言えば、意味内容の基幹は〈Schlaf〉ではなく、あくまでも〈Zimmer〉にあるからである。規定語は一つとは限らず、また形容詞と名詞、形容詞と形容詞など名詞以外の語が組み合わせられる場合もある。

das Zweibettzimmer ← zwei + das Bett + das Zimmer
 二人室(二寝台部屋) 二 寝台 部屋

süßsauer ← süß + sauer
 甘ずっぱい 甘い すっぱい

3. 2. 1. 合成語における接合素 -(e)s- と -(e)n-

上で見た Schlafzimmer では、独立した二語がそのまま結合されている。これに対して、-(e)s- ないしは -(e)n- を介して結合する合成語も存在する。まず -(e)s- の場合である。

die Tageskarte 当日に限り通用する(入場・乗車などの)券
 das Arbeitszimmer 仕事部屋(書斎)

これは、本来は強変化の男性名詞ないしは中性名詞の単数 2 格の語尾である(ミツヒエル(他), p.287)。したがって、Tageskarte とは die Karte des Tages ということである。しかし Arbeit は女性名詞なので、本来は 2 格に -es ないしは -s は付かないはずである。それにもかかわらず女性名詞や複数名詞

にもこのように -es-, -s- が使用される場合がある。それは、これらがもはや 2 格の語尾というよりも、語と語をつなぐ接合素、即ち一種の〈接着剤〉と化しているからである。

また -(e)n- が接合素となる場合もある。これは本来は男性弱変化名詞の単数 2 格、女性名詞の複数語尾だったものである (ミツヒエル (他), pp. 287-288)。

das Studentenheim 学生寮

die Frauenklinik 婦人科病院

接合素 -(e)s- と -(e)n- については、語意味の推測という観点からは、その歴史的由来などはともかくとして、語の分解に際してこれを除去できることが重要である。また逆に、語中に -(e)s-, -(e)n- がある場合には、これが切れ目を見破る手掛かりともなる。

3. 3. 派生 (Ableitung)

合成と並んで、もう一つの重要な造語手段は派生である。これは「現存する語に接辞を結合させるなどして新たに語を形成する過程、またはそのようにして形成された語」(ドイツ言語学辞典, p. 5) である。これには〈接辞による派生〉と〈接辞によらない派生〉がある。

3. 3. 1. 接辞による派生

接辞による派生とは「ある独立した語に、それ自体は独立した単語ではない接尾辞や接頭辞がついて新しい単語ができる」(ミツヒエル (他), p. 288) 場合であり、接合素 -(e)s-, -(e)n- は用いられない (ミツヒエル (他), p. 288)。

gesund → die Gesundheit freigebig → die Freigebigkeit

健康な 健康 気前のよい 気前のよさ
 (ミツヒエル (他), p. 288)

上の例は gesund, freigebig という形容詞に -heit, -keit という接尾辞が付加されて名詞が形成された場合である。gesund, freigebig の意味内容と、-heit, -keit の機能がいずれも抽象名詞化であることを知っていれば、その意味内容は容易に推測が可能である。逆に Gesundheit, Freigebigkeit を知っていれば、今度は引き算によって gesund, freigebig の意味内容を割り出すことができる。

さらに freigebig は frei|geb|ig から構成されている。frei は英語の free に対応し、〈自由な〉、〈制約されない〉といった意味であり、geb は geben, すなわち英語の give であり、ig は形容詞を作るときに用いられる接尾辞である。freigebig は分からなくとも、このように分解できれば、テキストの内容やコンテキストなどとの関係の中で、どこかに〈つけいる隙〉ができるはずである。そこを突破し、他の部分の理解に進むことが本章の大きな目標の一つである。

ミツヒエル (他) には接頭辞と接尾辞についての詳しい一覧表が掲載されている。3.3.1.1. から 3.3.1.4. にこれを転記する。この中には、anti- (antiauthority 反権威主義的な) や -ist (egoist 利己主義者) spezial- (specialeffects 特殊効果), mikro- (microscope 顕微鏡) などのように英語やカタカナ語と同じないしは類似のものも少なくない。既知のものは除去し、未知のものについてはテキストを読む際に参照するなどして少しずつ意識的にその意味内容や機能を習得してゆくのがよいであろう。

3.3.1.1. 名詞を作る接尾辞

接尾辞の種類	性別	接合する品詞	接尾辞の意味と機能	派 生 語 の 例		意 味
-age	f.	ラ・ギ 動		blamieren	Blamage	恥(さらし)
-ant	m.	ラ・ギ 動	男性を意味する名詞化	sympathisieren	Sympathisant	同調者
-ation	f.	ラ・ギ 動		konzentrieren	Konzentration	集中, 濃縮
-chen	n.	名	縮小化	Haus	Häuschen	小さな家
-eur (-ör)	m.	ラ・ギ 動	男性を意味する名詞化	frisieren	Friseur	理髪師
-euse (-öse)	f.	ラ・ギ 動	女性を意味する名詞化	frisieren	Friseur	美容師
Ge...e	n.		集合名詞化	tun	Getue	から騒ぎ
-heit	f.	形	抽象名詞化	schön	Schönheit	美しさ
-in	f.	名	女性を意味する名詞化	Student	Studentin	女子学生
-ion	f.	ラ・ギ 動		rebellieren	Rebellion	反逆
-ismus	m.	名 形	主義・制度を表わす	Marx feudal	Marxismus Feudalismus	マルクス主義 封建主義
-ist	m.		男性を意味する名詞化	Horn	Hornist	ホルン奏者
-keit	f.	形	抽象名詞化	heiter	Heiterkeit	朗らかさ
-lein	n.	名	縮小化	Vogel	Vöglein	小鳥
-ling	m.	動 形 名	蔑視「へば 〜」「三文 〜」	gesäugt werden roh Dichter	Säugling Rohling Dichtering	乳のみ児 粗暴な人 へボ詩人
-nis	n. f.	動		erkennen	Erkenntnis	認識
-sal	n. f.	動		mühen	Mühsal	苦労
-schaft	f.	名	人間の集合体を表わす	Mann (人員) Wissen	Mannschaft Wissenschaft	チーム 科学
-(t)or	m.	ラ・ギ 動		organisieren	Organisator	組織者
-tum	n. m.	名	人間の階級・制度・思潮を表わす	Studenten Luther	Studententum Luthertum	学生気質 ルター主義

-ung	f.	動		untersuchen ordnen	Untersuchung Ordnung	調査, 検査 秩序
------	----	---	--	-----------------------	-------------------------	--------------

(ミッヒエル (他), p. 289)

-heit, -keit, -schaft, -ung, -tät, -ur, -ion, -ei に終わる名詞は女性である (橋本, p. 31)。なお最後の -ung は本来動作名詞 (～すること) を, また本表には挙げられていない -er は〈～する人/物〉(besuchen → Besucher 訪問者) を形成し, きわめてよく用いられる。

3. 3. 1. 2. 形容詞を作る接尾辞

接尾辞の種類	接合する品詞	接尾辞の意味	派 生 語 の 例		意 味
-abel	ラ 動	可能 ～することができる	akzeptieren	akzeptabel	引き受けられうる
-al	ラ 名	比較 ～のような状況 ～に関して	Genie Form	genial formal	天才的な 形式上の
-ant	ラ 名	～で満ちた	Charme	charmant	魅力的な
-bar	名 形 副 動	可能 ～することができる	Dank offen tragen	dankbar offenbar tragbar	感謝している 公然たる 運搬可能な
-ent	ラ 名	～で満ちた	Intelligenz	intelligent	知的な
-iv	ラ 名	比較 ～的な	Demonstration Instinkt	demonstrativ instinktiv	指示(示威)の 本能的な
-lich	形	～を帯びた	blau	bläulich	青味を帯びた
-los	名	～のない	Arbeit	arbeitslos	無職の
-ös	名	比較 ～的な	Mysterium	mysteriös	神秘的な
-sam	名	感情 ～を好む ～を感じる	Frieden Furcht	friedsam furchtsam	平和的な 小心の

(ミッヒエル (他), p. 290)

3. 3. 1. 3. 形容詞を接尾語として新たな形容詞をつくる場合

接尾語	接合する品詞	接尾語の意味	派生語の例	意味
-abhängig	名	依存している	markt <i>abhängig</i>	市場依存の
-adäquat	名	適した	problem <i>adäquat</i>	問題に適した
-ähnlich	名	似ている	gott <i>ähnlich</i>	神にも似た
-arm	名	～の乏しい	ergebnis <i>arm</i>	成果の少ない
-artig	名	～のような	orkan <i>artig</i>	あらしのような (拍手など)
-bedingt	名	制限された	alters <i>bedingt</i>	年齢の制限がある
-bedürftig	名	必要な	ruhe <i>bedürftig</i>	安静に必要な
-bereit	名	用意がある	kampf <i>bereit</i>	戦闘準備ができた
-eigen	名	特有の	volkseigen	市民所有の
-fähig	名	能力がある	arbeits <i>fähig</i>	仕事の能力がある
-feindlich	名	敵対的な	kultur <i>feindlich</i>	反文化的な
-fertig	動	準備ができている	koch <i>fertig</i>	即席の(食品)
-förmig	名	～の形をした	eiförmig	卵型の
-frei	名	～の無い	nikotin <i>frei</i>	脱ニコチンの
-freundlich	名	好意的な	regierungs <i>freundlich</i>	政府寄りの
-gefärbt	名	着色された	schwarzge <i>färbt</i>	黒く着色された
-gemäß	名	応じた	wunsch <i>gemäß</i>	希望に応じて
-gerecht	名	適合した	kunst <i>gerecht</i>	芸術的な
-geschädigt	名	損われた	bomben <i>geschädigt</i>	爆撃でこわれた
-günstig	名	有利な	preis <i>günstig</i>	買い得の
-haltig	名	含有している	koffein <i>haltig</i>	カフェインを含んだ
-intensiv	名	集中的な	arbeits <i>intensiv</i>	精力的な
-intern	名	内部の	kliniken <i>intern</i>	病院内での
-krank	名	病気の	zucker <i>krank</i>	糖尿病の
-kritisch	名	批判的な	sozial <i>kritisch</i>	社会批判的な
-kundig	名	詳しい	ortskun <i>dig</i>	その地方のことに 詳しい
-leer	名	からっぽの	inhalts <i>leer</i>	内容の無い

-mäßig	名	中くらいの	verhältnismäßig	比較的
-neutral	名	中立の	wertneutral	価値を抜きにした
-offiziell	名	公式の	regierungsamtlich	政府公表の
-orientiert	名	～を指向した	profitorientiert	利潤指向の
-pflichtig	名	義務のある	steuerpflichtig	納税義務がある
-politisch	名	政治的な	kulturpolitisch	文化政策的な
-reich	名	豊かな	ideenreich	想像力ゆたかな
-reif	名	熟している	druckreif	印刷の用意ができた
-sparend	名	節約の	zeitsparend	時間の節約になる
-spezifisch	名	特有の	altersspezifisch	年齢特有の
-trächtig	名	内に含んだ	gewinnträchtig	利益を含む
-verdächtig	名	疑わしい	fluchtverdächtig	逃亡のおそれがある
-voll	名	いっぱい	hoffnungsvoll	希望に満ちた
-weise	名	(方法)	probeweise	ために
-wert	動	価値のある	sehenswert	一見の価値がある
-willig	名	喜んでする	arbeitswillig	仕事をいやがらない
-wissenschaftlich	名	科学的な	naturwissenschaftlich	自然科学の

(ミツヒエル (他), pp. 290-292)

ここに掲げられている接尾辞は、そもそもが独立した形容詞・副詞としてよく使われる語であり、そうした面からも習得に値する。またこれらの語を構成要素に分解し、造語面で互に関連する語を整理・習得することによってその有用性はさらに高まる。いくつか例を挙げておく。

ab|häng|ig ⇔ ab|hängen (依存する), Ab|häng|ig|keit (依存)

ähn|lich ⇔ ähneln (似る), Ähn|lich|keit (近似性, 類似性)

art|ig ⇔ Art (種類)

bedingt ⇔ bedingen (条件とする), Beding|ung (条件)

bereit ⇔ bereiten (準備する), Bereit|schaft (準備, 用意)

fähig ⇔ Fähigkeit (能力)

feindlich ⇔ Feind (敵)

freundlich ⇔ Freund (友人), Freundschaft (友好)

ge|färb|t ⇔ färben (着色する), Farbe (色)

ge|schädig|t ⇔ schädigen (損なう), Be|schädig|ung (損傷)

kritisch ⇔ kriti|sieren (批評する), Kritik (批判)

orientiert ⇔ orientieren (方向付ける), Orientierung (方向付け)

sparen|d ⇔ sparen (節約する), Er|spar|nis|se (貯金, 貯え)

spezifisch ⇔ Spezifik (特殊性)

verdächtig ⇔ verdächtig|en (嫌疑をかける), Verdacht (疑い)

3. 3. 1. 4. 形容詞と名詞を作る接頭辞

形容詞と名詞を作る接頭辞には次のようなものがある。これ以外の be-, emp-, ent-, er-, ver-, zer-, miss- については、3. 8. 1. の非分離動詞を参照のこと。

形容詞をつくる接頭辞 (接合する品詞は形容詞)				
接頭辞の種類	接頭辞の意味	派 生 語 の 例		意 味
a-	(否定)～でない	typisch	atypisch	典型的でない
erz-	非常に	faul	erzfaul	すごく怠惰な
il-	(否定)～でない	legitim	illegitim	非合法の
in-	(否定)～でない	tolerant	intolerant	狭量な
miß-	間違った, 逆の	vergnügt	mißvergnügt	不満な
un-	(否定)～でない	klar	unklar	不明瞭な
ur-	古い	alt	uralt	ものすごく古い

(ミツヒエル (他), p. 292)

名詞・形容詞をつくる接頭辞（接合する品詞は名詞または形容詞）			
接頭辞の種類	接頭辞の意味	派生語の例	意味
anti-	反	<i>Anti</i> alkoholiker	禁酒論者
auto-	自動, 自己の	<i>Auto</i> suggestion	自己暗示
bundes-	ドイツ連邦	<i>Bundes</i> behörde	連邦政府当局
contra- (kontra-)	対立する	<i>Kontra</i> diktion	矛盾
extra-	特別	<i>Extra</i> blatt	付録
gegen-	反	<i>Gegen</i> spieler	相手選手
grund-	基本的	<i>Grund</i> betrag	基本価格
haupt-	主な, 中央の	<i>Haupt</i> postamt	中央郵便局
hyper-	過度の, 極地の	<i>hyper</i> sensibel	過敏症の
hypo-	下の	<i>Hypo</i> taxis	従属文
inner-	内部の	<i>inner</i> deutsch	両ドイツ間の
landes-	州の	<i>Landes</i> regierung	州政府
luxus-	豪華(デラックス)	<i>Luxus</i> auto	デラックス・カー
makro-	巨視的	<i>makro</i> ökonomisch	マクロ経済的な
mikro-	微視的, 微量	<i>Mikro</i> chemie	微量化学
militär-	軍の	<i>Militär</i> polizei	憲兵
mini-	ミニ	<i>Mini</i> rock	ミニスカート
neben-	副	<i>Neben</i> rberuf	副業
para-	} 疑似	<i>para</i> militärisch	一見軍隊ふうの
pseudo-		<i>pseudo</i> liberal	えせ自由主義的
quasi-		<i>quasi</i> liberal	準自由主義的
riesen-	巨大	<i>Riesen</i> packung	大箱
selbst-	自己の	<i>selbst</i> gemacht	手製の
sonder-	特別	<i>Sonder</i> zug	特別列車
spezial-	特殊	<i>Spezial</i> anzug	特殊服
super-	超, スーパー	<i>super</i> schlau	超狡猾の
über-	超えた	<i>über</i> besetzt	定員過剰の
ultra-	超	<i>ultra</i> modern	超近代的な
unter-	少い	<i>unter</i> privilegiert	権利の少い
vize-	副	<i>Vize</i> präsident	副大統領

zivil-	市民の	Zivilcourage	市民としての勇氣
--------	-----	--------------	----------

(ミツヒエル (他), pp. 292-293)

3. 3. 2. 接辞によらない派生

派生には「接辞を付加することなく新たに語が形成される」(野入・太城, p. 86) 場合もある。これはさらに〈逆成〉と〈音変異による派生〉に分けられる。

3. 3. 2. 1. 逆成 (Rückbildung)

逆性とは「接頭辞や接尾辞の付加による明示的派生とは逆に、接尾辞を消去し、元の語より短い語が新たに形成される造語過程」(野入・太城, p. 86) である。

なお本項から 3.7. において、「下点 (.) はアクセントのある短母音を、下線 () はアクセントのある長母音あるいは二重母音を示す」(野入・太城, p. 83) ものとする。

eigensinnig → Eigensinn m. 強情, vorsichtig → Vorsicht f. 注意,
wehklagen 嘆き悲しむ → Wehklage f. 悲嘆, 愁嘆, Notlandung f. 緊急着
陸 → notlanden 緊急着陸する, Staubsauger m. 掃除機 → staubsaugen
電気掃除機をかける (野入・太城, p. 87 から抜粋)

3. 3. 2. 2. 音変異 (Mutation) による派生

音変異とは「造語において語幹の母音または子音が変化することによって新たに語が形成されること、またそのようにして形成された語」(ドイツ言語学辞典, p. 634) のことである。これには母音が変化する〈幹母音造語〉, 母音交替に変母音が加わった場合, そして子音が変化する〈文法的交替〉がある。

3. 3. 2. 2. 1. 幹母音造語 (Ablautbildung)

幹母音造語とは「動詞の母音交替／アブラウトを利用し形成された一連の造語」(野入・太城, p. 86)であり, 母音交替とは次のような現象である。

[...] , インド・ヨーロッパ (印欧) 語の中で語源的に関連のある語根に生じる母音の規則的交替のことをいう。具体的には動詞の強変化 (starke Konjugation) , または品詞転換の際に一定の母音の交替が生じることをいう。(ドイツ言語学辞典, p. 4)

幹母音造語の例としては次のような語が挙げられる。

geben 与える — Gabe f. 贈り物, springen はねる — Sprung f. 跳躍
(ドイツ言語学辞典, p. 634, 性の表示と斜体, 訳語筆者)

binden — band — gebunden → Band m. 巻 n. リボン Bund m. 同盟
trinken — trank — getrunken → Trank m. [雅] 飲み物 Trunk m. 一飲み
treten 歩む — tritt (3 人称単数現在形) → Tritt m. 歩み
(野入・太城, p. 86, 斜体筆者)

3. 3. 2. 2. 2. 母音交替 (Ablaut) + 変母音 (Umlaut)

いくつかの作為動詞は母音交替にさらに変母音が加わって形成されている。これも幹母音造語の一種である。(野入・太城, p. 86)

trinken — trank → tränken 飲ませる fahren — fuhr → führen 導く
liegen — lag → legen 置く sitzen — saß → setzen 座らせる
(野入・太城, p. 86, 斜体筆者)

3. 3. 2. 2. 3. 文法的交替 (Grammatischer Wechsel)

母音交替や変母音では母音が変化するのに対して、子音が変化する場合が文法的交替である (ドイツ言語学辞典, p. 634)。

schneiden 切る → Schnitt 切断 (ドイツ言語学辞典, p. 5, 訳語筆者)

3. 4. 共成 (Zusammenbildung)

共成とは「合成と派生の中間的現象」(浜崎 (他), p. 97) であり、「派生語のように独立語に接尾辞が結合するのではなく、語群に接尾辞などを付加して新語を形成する造語手段」(ドイツ言語学辞典, p. 1146) である。野入・太城は「それらの関係を (a + b) + c と示すことができる」(野入・太城, p. 87) とし、「第二構成素が接尾辞であるか名詞であるかによって二つのグループに分ける」(野入・太城, p. 87) としている。

1) 第二構成素が接尾辞の場合

Gesetzgebung f. < Gesetze geben + -ung 立法

grünäugig < grüne Augen + -ig 緑の眼の

überjährig < über Jahre + -ig 長年にわたる

(野入・太城, p. 87 から抜粋)

2) 第二構成素が名詞の場合

Freilichtmuseum n. < freies Licht + Museum 屋外美術館

Heißwasserspeicher m. < heißes Wasser + Speicher ボイラー

(野入・太城, pp. 87-88 から抜粋)

3. 5. 品詞転換 (Konversion)

品詞転換とは「形態の変化を伴わずに品詞を転換すること」(ドイツ言語学辞典, p. 508) である。これにはさまざまな場合がある。野入・太城は次のような例を挙げている。

(1) 名詞から動詞への品詞転換

Fisch m. 魚 → fischen 魚をとる, Wasser n. 水 → wassern (飛行機, 宇宙船などが) 着水する (野入・太城, p. 89 から抜粋)

動詞化に際して付される語尾の -en, -n は, 定動詞として -e, -t, -te などに変化することから, 派生の接辞ではなく, 文法的な語尾である(野入・太城, p. 89)。

(2) 形容詞から動詞への品詞転換

gleich 同じ → gleichen 似ている, kühl 冷たい → kühlen 冷やす (野入・太城, p. 90)

(3) 名詞から形容詞への品詞転換

Schuld f. 責任 → schuld 責任がある, Angst f. 不安 → angst 不安な (野入・太城, p. 90)

(4) 動詞から名詞への品詞転換

ab|waschen 洗淨する → Abwasch m. 皿洗い, treffen 会う → Treff m. 会合, fallen 落ちる → Fall m. 落下, beginnen 始まる → Beginn m. 開始 (野入・太城, p. 90)

(4)のように動詞の語幹から造られた名詞の大部分は男性名詞である。(橋

本, p. 30)

(5) 形容詞から名詞への品詞転換

deutsch ドイツの → Deutsch ドイツ語 (野入・太城, p. 90)

3. 6. 統語的転換 (Syntaktische Konversion)

統語的転換とは「文法的語尾を保持したまま他の品詞に転換すること」(野入・太城, p. 90) である。

(1) 不定詞の中性名詞化 (不定詞語尾 -en/-n を含む)

Essen 食事, Treffen 会合, Können 能力, Dasein 存在

(野入・太城, p. 90)

(1)のように動詞の不定形を名詞化した場合は中性である。(橋本, p. 32)

(2) 形容詞／代名詞などの名詞化 (形容詞および代名詞の格語尾を含む):

der/die/das Schöne きれいな人／物 die Meinen 身内, 部下

alles Mögliche 可能なことすべて Verschiedenes いろいろな事

(3) 現在分詞 (動詞語幹 + -end) ・ 過去分詞 (ge- + ~ + -t/-en) の形容詞化:

lachend 笑っている geschlagen 殴られた behindert 障害のある

(野入・太城, pp. 90-91)

なお (2) については「戦略と戦術 (3)」の 113-119 頁で、(3) については同じく 107-111 頁で詳しく扱った。

3. 7. 合接 (Zusammenrückung/Amalgamierung)

野入・太城は合接を「複数の語が、語順や屈折語尾などの統語的特徴を保持したまま、一語化 Univerbierung することである。合接語は文や、名詞句、前置詞句、動詞句などから形成される」(野入・太城, p. 88) としている。

Vergissmeinnicht n. < Vergiss mein nicht! 忘れな草

Habenichts m. < (ich) habe nichts 一文無し

(野入・太城, p. 88 から抜粋)

* Vergissmeinnicht の mein は, meiner (ich の 2 格) の古形である。

最後に、ミツヒエル (他) は DIE ZEIT 紙の記事に基づき、合成語と派生語について実例に沿った詳細かつ具体的な解説を行っている (ミツヒエル (他), pp. 293-297)。

3. 8. 複合動詞

何らかの前つづりのついた動詞をここでは複合動詞と呼ぶ。複合動詞にはいわゆる分離動詞、非分離動詞、分離・非分離動詞の三種類がある。

3. 8. 1. 非分離動詞

造語という観点からは、非分離動詞とは接頭辞による派生語である。その接頭辞は be-, emp-, ent-, er-, ge-, ver-, zer-, miss- の八つのみである。f で始まる語の前では ent- が emp- になることを考慮すれば七つである。ミツヒエルはその意味と機能を次のようにまとめている。

非分離の前つづり	意味と機能	動詞の例
be-	自動詞を他動詞化する	bemalen (彩色する) (< malen 絵を描く) bedrohen (脅迫する) (< drohen 脅かす)
ent-	分離・除去 新しい状態の始まり	entweichen (漏れ出る, 逃亡する) entdecken (発見する) entspringen (源を発する) entzünden (発火する)
er-	新しい状態の開始 目的の達成・獲得	erblühen (開花する), eröffnen (開く) erreichen (到達する, 達成する) erleben (体験する)
miß-	不良・過誤・悪	mißachten (無視する), mißhandeln (虐待する)
ver-	自動詞や形容詞の他動詞化 誤り・阻止 完了・結果	verstärken (強くする) versteinern (石になる/する) verführen (惑わして~させる) (sich) verlaufen (道に迷う) verbrennen (焼却する) vergehen (時が過ぎ去る)
zer-	分離・解体	zerreißen (引き裂く) zerspalten (二つに, 細かく割る)

* 上の表では非分離の前つづり ge- は、本文の中で述べたように、今日ではその意味機能が明確でない場合が多いという理由から省略しています。また emp- は、ent- がf音の前で変形したものです。empfangen (受け取る, 迎える), empfehlen (推薦する), empfinden (感じる) の3つを覚えておけば十分です。

(ミツヒエル (他), p. 149, 訳語筆者)

しかし実際には、非分離の前つづりと動詞の組み合わせからその意味内容を推察することは必ずしも容易ではない。ミツヒエル自身も「非分離動詞を覚えるときの基本的な姿勢」(ミツヒエル (他), p. 146) について、次のように述べている。

一言で言えば、非分離動詞が出てきても、あまり前つづりの意味にこだわらずに、1個の新しい動詞として覚え込んでしまう方が得策だということです。例えば、先に挙げた fahren 「乗物で行く」に er- のついてできた

erfahren「聞き知る，経験する」という動詞を，前つづり er- と fahren とに分けて，いくらその意味派生の過程を調べてみても今となつては「乗り物で行く」から「聞き知る」という意味が出てきた語源を突き止めることはなかなか容易ではありません。(ミツヒエル (他), p.146)

しかしその一方で，「とは言っても，非分離の前つづりの意味や機能を大体知っておくと，それがついている動詞の意味もおおよそ見当がつくようになって，覚えるのに大変便利です」(ミツヒエル, pp.146-147)ということもまた確かである。読むという観点からは，上の表の versteinern であれば，その中に Stein (石) を見出し，これが ver- と -ern によって動詞化されて〈石になる／する〉といった意味ではないかと類推できれば大成功である。後はテキストの内容や前後関係の脈絡に合致するような方向性で考えることである。

3. 8. 2. 分離動詞

分離動詞は造語という観点からは，独立した語を組み合わせた合成語である。そこでそれぞれの部分の組み合わせから意味内容の類推が可能である場合も少なくない。なお分離動詞の前つづりには，前置詞に由来するものが少なくない。この点については本稿の〈5.1.2. 前置詞と副詞〉の項でも触れる。また分離動詞への対処については「戦略と戦術 (3)」30-36 頁にも述べた。

しかし statt|finden〈開催される〉が〈場 (Statt) を見出す (finden)〉に由来することを見抜くことは今日では困難であり，またその必要もない。そこでよく目にする分離動詞については，非分離動詞の場合と同様，そうしたものとして覚えてしまうのが妥当である。

3. 8. 3. 分離・非分離動詞

durch-, hinter-, über-, um-, unter-, voll-, wider-, wieder- の八つの前

つづりは分離動詞にも非分離動詞にも用いられる。その使い分けについては、「前つづりが本来の空間的・具体的意味な意味を持っているときは分離動詞になり、前つづりが比喩的・抽象的な意味に用いられるときは非分離動詞になります」(常木, p. 158) というのが一般的な説明である。

Er setzte uns über.

彼は私たちを船で渡してくれた。

Sie übersetzte einen Roman.

彼女はある小説を翻訳した。 (常木, p. 159)

上例の場合は確かに *übersetzen* (越えて・置く) が空間的・具体的な動きか、比喩的・抽象的な動きかに基づいて使い分けられている。しかし使い分けは必ずしも常にこのように明確であるわけではない。読むに際しての未知の語彙への対処という観点からは、この場合もテキストの内容や前後関係などの脈絡を下敷きとして、その上で空間的・具体的な意味内容を手がかりにいろいろとつじつま合わせを図る必要がある。

巻末の文献一覧に挙げた石川光庸／サスキア石川＝フランケ (2009) 『効率よく覚える ドイツ重要単語 2200』には「同じ語源の英語対応語」, 「派生語」, 「類語」, 「同系統の単語」, 「語源」などが記載されている。18頁で挙げた福田幸夫と合わせて、語をさまざまな角度から関連付ける一助となろう。

3. 9. 造語法活用にあたっての注意

ドイツ語学の専攻者などは別として、ドイツ語を何らかの目的のために学ぶ／使うためには、上で述べたような造語法の分類や名称は重要ではない。要は

合成語や派生語を分解し、既知語や接辞についての知識などから未知語の意味内容を推測する手段として活用できればよいのである。

Verbesserungsvorschlag (改善提案) という語の場合、おおよそ次のように切り分けられる。その上でどこかに一つでも自分が知っていることばがないか探してみればよい。

Ver|besser|ung|s|vorschlag ないしは Ver|besser|ung|s|vor|schlag

ver = 非分離動詞の前つづり

besser = gut の比較級

ung = 動作名詞の接尾辞

s = 合成語の接合素

Vorschlag = 〈提案〉を意味する名詞。動詞は vor|schlagen。vor は〈前に〉という副詞。schlagen は〈打つ〉、〈向ける、転ずる〉などを意味する動詞（名詞は Schlag）。

また未知語の意味内容を推測するにあたっての一つの方策は、既知語の中で語源的、造語的に関係のありそうなことばを探ることである。これに際して、未知の語彙に a, o, u, au ないしは ä, ö, ü, äü が含まれている時には、上で述べたような歴史的経緯はともかくとして、これらを相互に入れ換えて探してみるとよいであろう。

そして名詞、動詞、形容詞などの品詞の別は絶対的なものではない。品詞転換や統語的転換などに見られるように、一つの語が品詞を変えてさまざまに用いられる場合もある。そこで語同士の垣根を低くし、〈手を替え、品を替え〉して互いの関係を探る積極的姿勢が何よりも必要である。

これらのことから語彙を記憶するに際しては、各語をバラバラにではなく、

〈lang (長い), lange (長い間 [副詞]), länger (より長い), Länge (長さ), verlängern (より長くする), Verlängerung (延長)〉のように、語源や造語面から互に関連付けて理解し記憶する必要がある。これによって語親族 (ワード・ファミリー) という感覚が育成される。最初は容易ではないと思う。しかし継続していれば少しずつ慣れて、〈勘〉が働くようになるものである。何も考えずに最初から未知語を辞書で一語一語引いていたのではこうした進歩は得られない。

4. 語彙の分類と基本語彙

〈重要な語を優先して習得すべし〉とはいえ、そもそも重要な語とは何であろうか。また一つの目安として、まずどのくらいの語数を目標に習得を進めればよいのだろうか。そのためにはテキストに一体どのような語がどれくらい使用され、読むためにはそのどの程度が分かればよいのかを知る必要がある。

4.1. 語彙の分類

本稿では語彙をその働きの面からまず〈機能語 (Funktionswort)〉と〈内容語 (Inhaltswort)〉に大別する。そしてこの両者の中で相対的に使用頻度が高く重要な語を〈基本語彙 (Grundwortschatz)〉とする。

機能語とは「もっぱら文法機能を表し、文の中の語句の結び付きや並び方などに関与する」(清野, p.183) 一群の語である。これには代名詞, 冠詞, 前置詞, 接続詞などが含まれる。機能語の数は比較的少なく, その多くは**基本語彙**に含まれる。

これに対して**内容語**とは「[...] 名詞, 形容詞 (数詞), 副詞, 動詞など, 現実界に存在するもの, あるいはその存在のあり方を指し示す語」(浜崎 (他), pp.48-49) である。これはテキストの中身を担い, 内容理解にとって重要であ

る一方、その数は膨大である。そこで本稿では基本語彙と、低頻度語（後述）に含まれる以外の内容語を**一般内容語**とする。

一方 Nation は、「アカデミックなリーディング教科書」（吉田・三根, p.10）に用いられている語彙を①**高頻度語 (High-frequency words)**, ②**アカデミック用語 (Academic words)**, ③**専門用語 (Technical words)**, ④**低頻度語 (Low-frequency words)** の四種類に分けている（吉田・三根, pp.10-15）。**高頻度語**とは使用頻度の高い語であり、上の〈基本語彙〉に相当する。**低頻度語**とは、稀にしか使われず、テキストの中で遭遇する可能性が低い語である。これらに対して、**アカデミック用語**とは次のようなことばである。

テキスト（註 調査に用いたテキスト）はアカデミックな教科書からのもので、異なる科目のテキストにも共通する *policy*（政策, 方針）, *phase*（曲面, 段階）, *adjusted*（調整された, 適応した）, *sustained*（持続した, 一様の）などのような^多^く単語を含んでいる。典型的にはこれらの単語は、テキストの総語数の約9%を占める。最良のリストは *Academic Word List* (Coxhead, 1998)⁽⁴⁾である。Appendix 1 には、このリストの570語の見出し語が掲載されている。アカデミックな目的で英語を使用する全ての人にとって、この小さな単語リストは非常に重要である。（吉田・三根, p.12, 訳語筆者）

また Nation はアカデミック用語について「専門語彙というよりは、むしろフォーマルな語彙を含んでいるので、時々サブ専門語彙と呼ばれてきた」（吉田・三根, p.18）としている。本稿が読解の対象として想定するのは必ずしも教科書や学術的テキストではない。しかしそこにもいくつかの分野にまたがって使用され、〈専門語彙というよりは、むしろフォーマルな語彙を含む〉という点でアカデミック用語とも共通する〈**サブ専門語彙**〉ともいべき一群の語

が存在する。本稿ではいくつかの分野で共通して用いられるこのような語を〈準分野固有語彙〉とする。

専門用語について Nation は次のように説明している。

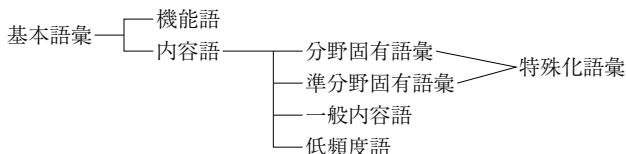
テキストは、その主題および対象分野と非常に密接な関係がある単語を含んでいる。これらの単語には *indigenous* (在来の, 原産の), *regeneration* (再生, 復活), *podocarp* (マキ属の熱帯常緑樹), *beech* (ブナ), *rimu* (ニュージーランドの木), *timber* (用材, 森林) のような単語が含まれる。これらの単語は、この主題領域において、かなりありふれているが、それ以外の分野ではあまり出現しない。その単語を見るとすぐに、どのような主題が扱われているのか知ることができる。(吉田・三根, p. 12, 〈ニュージーランドの木〉以外の訳語筆者)

本稿ではこれまでの拙稿での用語との一貫性という点から、「専門用語」を〈分野固有語彙〉とする。そして分野固有語彙と準分野固有語彙は、いずれも使用範囲が何らかの形で制限されるという共通点から**特殊化語彙**と総称することとする。

Nation は**特殊化語彙**について次のように説明している。

特殊化語彙は調査の対象となる主題の範囲または言語用法を体系的に制限することにより作られる。スピーキングのための、アカデミックなテキストを読むための、新聞を読むための、子供向けの本を読むための、手紙を書くための、特殊化語彙集を得ることが可能である。専門語彙は特殊化語彙でもある。(吉田・三根, p. 18)

以上のような分類に基づき、本稿ではまず**基本語彙**、引き続き**機能語**、**分野固有語彙**、**準分野固有語彙**、**一般内容語**、**低頻度語**の順に対処の方策を述べたい。全体の図式は次のとおりである。



4.2. 語の数え方とコーパス、カバー率

具体的な説明に先立ち、いくつかの用語などについて説明しておきたい。

最初に明確にしておかなければならないのがテキスト中の**語の数え方**である。これには四種類がある。卯城は次のように説明している。

以下の英文の語数はいくつでしょうか。

President Obama's statement "What is required of us now is a new era of responsibility" requires us to think of how we should be responsible for our behavior. (「いま私たちに求められているのは、新しい責任の時代なのです」というオバマ大統領の発言とは、私たちが自分たちの行動にどのように責任を持つべきなのかを考えよ、ということなのである)

まず、単語を1つずつ数えると、この文の総語数は28語になります。これを「**延べ語数 (token)**」といいます。次に、まったく同じ語を1回しか数えなければ、is と us が2回ずつ、of が3回ずつ出てきていますので

28-4で24語となり、これは「異なり語数 (type)」とよばれます。さらに require は required と requires の2つの活用語で使われており、また be 動詞も be と is の2つの形で出てきていますので、それぞれを同じ語と考えると24-2で22語になります。これが「見出し語 (lemma)」換算です。つまり、辞書の見出し語のように活用形をまとめて1語として数える方法です。最後に、見出し語とその派生語を同じ語として数える方法を「ワード・ファミリー (word family)」換算といいます。たとえば、responsibility は responsible の派生語であるため、これらは辞書で別々の見出しに掲載されていても1語として数えます。この「ワード・ファミリー」換算で数えれば、上の文は22-1で21語になります。このような短い英文でも、数え方によって28語になったり21語になったりするのです。長い英文だと、より単語の重複が多くなるため数え方によってその結果が大きく異なってきます。たとえば、見出し語換算の5,000語はワード・ファミリー換算での3,000語であるとも言われています。(卯城, p.18, 太字筆者)

次に〈コーパス (英: corpus, 独: Korpus)〉とは、「ある目的のために組織的に集められた大量のテキストをコンピューター処理できるように電子化・整備したもの」(望月 (他), p.145) である。コーパスは後に説明するように基本語彙集の作成にも利用される。

〈カバー率 (word token coverage)〉とは、テキスト中に高頻度で出現する一定数の語集団が、テキストを構成するすべての語に対して占める割合を表す概念である (Jones, p.116)。したがってこれはあくまでも数量的なものであり、使用にあたっては次のような点に注意が必要である。

しかしこうした結果は、外国語の授業において狭く限定された語彙を

得すれば、それでも非常に高度なコミュニケーション能力が獲得できるという誤った印象をしばしば引き起こすということをはっきりさせておかなければならない。ある言語の中で最も出現頻度の高い1000語が通常のテキストの語彙の約80%を形成しているという広く流布している命題から、こうした語彙だけを知ってさえいれば、すべてのテキストの80%は理解できる、あるいはすべてのテキストを80%理解できるという結論を引き出してはならない。(Schumacher, p. 46)

この統計は(註:省略)、比較的少数の語を習得することによって—英語語彙の総数と比較すれば少なくとも少数ではあるが—人々は英語の平均的なテキストを読んで理解できるということを伝えるかもしれない。用心すべきはその順序である。私たちは語彙学習の認知的プロセスをまだ理解しているわけではなく、ある語を知っているということが何を意味するかを定義することは困難である。さらに付け加えるならば、ある読み手があるテキストの総語彙の87%が分かるということは、すなわち13%が分からないということでもある。そしてこの13%が意味内容を十分に理解する上で最高度に重要な語かもしれないのである。(Jones, p. 117)

これらは原理的に正しい指摘である。しかしあるテキストの語彙の半分しか分からないよりも、87%が既知語であるほうが内容理解にとって一般に有利であるとは言えるであろう。したがって上の引用に続けてJonesが述べている「それにもかかわらず、**閾値の語彙レベル (threshold vocabulary level)**⁽⁵⁾という考え方は有用であり、学習を続けてゆくうえでの出発点として適切である」(Jones, p. 117, 太字筆者)という意見もまた正当である。

4.3. 英語のテキスト理解に必要なカバー率と語数

語彙と読解力の関係について研究の蓄積が大きいのは英語教育の分野においてである。まずその知見について見ておきたい。読解に必要な語彙数や既知語によるカバー率をめぐる近年の議論の発端となったのは、Laufer の〈閾値 3000 語説〉(Laufer, 1989, 1992) である。

Laufer は、見出し語に換算しておおよそ 5000 語を分岐点として学習者によるテキスト内容の理解度に有意の差があることから、学術的テキストの理解に必要な 95% のカバー率のためには 3000 ワード・ファミリー、見出し語換算で 4800 語が必要であるとしている (Laufer 1992, pp. 126-130)。また Hirsch and Nation は、楽しく読むためには 98-99% のカバー率が望ましく (Hirsch and Nation, p. 690)、それには約 5000 ワード・ファミリーが必要であろうとしている (Hirsch and Nation, p. 693)。そして Nation は「閾値を定義するために用いる最も安全な基準は、Laufer が見出したカバー率約 95% (述べ語数) の基準である」(吉田・三根, p. 168) とした上で、次のように述べている。

確率的な閾値は約 98% である。このカバー率で、ほとんどすべての学習者は適切な理解を得る可能性を持つ。適切な理解の代わりに、最少限許容できる理解という基準が適用されるならば (Laufer の研究にあるように)、カバー率 95% が確率的な閾値のようである。(吉田・三根, p. 169)

これらのカバー率を実際のテキストにあてはめると、未知語の出現状況は次の表のとおりである。

% text coverage	Density of unfamiliar and familiar tokens	number of text lines per 1 unfamiliar word
99	1 in 100	10
98	1 in 50	5
97	1 in 33	3.3
96	1 in 25	2.5
95	1 in 20	2
90	1 in 10	1
80	1 in 5	0.5

Table 1 : The number of unfamiliar tokens per 100 tokens and the number of lines of text containing one unfamiliar word.

(Hu and Nation, p. 405)

高頻度語について Nation は次のように述べている。

高頻度語は小さなグループであるが、話し言葉や書き言葉のテキストにおいて総語数の非常に多くの部分を占め、言語の全ての用途で生じるので非常に重要である。

この単語グループはどれくらいの大きさなのだろうか？ いくつかの単語を高頻度語とみなすかを定める通常の方法は、頻度順にグループ分けしてテキストのカバー率を調べることである。その後、教師やコースデザイナーは、これらの単語にもはや授業時間を費やす価値が無くなる箇所を決定しなければならない。Table 1.5 は、様々な 2,000 語のアメリカ英語テキストをトータルで 100 万語収集した *Brown Corpus* から見出し語の 1,000 語ごとにカバー率を示している。

通常、2,000 語レベルが高頻度語として最も適切な境界線と設定される。Nation and Hwang (1995) は、最も頻度の高い英単語 2,000 語を高頻度語とすることは、やはり学習者が大学に進むのに、最善であるという証拠を示している。

Table 1.5. *The percentage text coverage of each successive 1000 lemmas in the Brown Corpus*

1000 word (lemma) level	% coverage of text (tokens)
1000	72
2000	79.7
3000	84
4000	86.7
5000	88.6
6000	89.9

(吉田・三根, pp. 15-16)

卯城は読解に必要な語数とカバー率について次のように述べている。

Grabe (2009) によると、語彙の難易度を学習者用に調整していない自然な (authentic) 英文では、もっとも使われる頻度が高い約 10,000 見出し語 (4,000 ワード・ファミリー) を知っていれば、英文の約 95% の語がわかることとなります (表 1.1 参照)。

表 1.1. 単語数と英文のカバー率の関係 (Grabe, 2009 に基づく)

単語数——概算	英文のカバー率
40,000 見出し語 (9,000 ワード・ファミリー)	98%
10,000 見出し語 (4,000 ワード・ファミリー)	95%
5,000 見出し語 (3,000 ワード・ファミリー)	86%
3,400 見出し語 (2,000 ワード・ファミリー)	76%
1,700 見出し語 (1,000 ワード・ファミリー)	71%

これだけの語彙を知っていれば、辞書や先生の助けを借りながら自然な英文を読むことができます。しかし、流暢に読むためにはその 4 倍にあたる約 40,000 見出し語 (9,000 ワード・ファミリー) が必要です。英文で使用されている約 98% の語彙知識があることとなります。一方、約 1,700 見

出し語 (1,000 ワード・ファミリー) を知っているだけでも英文の 71% の語を知っていることとなります。7 割以上となると、かなり高い割合の語を知っているように思われるかもしれません。しかし、次の 2 つの英文を見てください。

72%の単語を知っている場合

Peter had not () anything, but he was () () of () in a department () because a woman said that she had seen him () an () watch () his ().

97%の単語を知っている場合

Peter had not stolen anything, but he was falsely accused of () in a department store because a woman said that she had seen him hiding an expensive watch under his clothes.

この 2 つはまったく同じ英文ですが、上は 72% の単語を知っている場合で、下は 97% の単語を知っている場合です。これを見ると、72% の単語を知っていても、空所が多く英文の意味を理解するのが難しく、決してすらすらと読むことはできないことがわかるでしょう。一方、97% の語彙を知っていれば、英文のだいたいの意味を理解するのは難しくありません。おおよそ、95% 以上の単語を理解できればスムーズに読み進めることができると考えられます。カバー率 95% を達成するためには 10,000 見出し語 (4,000 ワード・ファミリー) を習得させることを目標に設定する必要があるでしょう。

これらの語数は、学習指導要領や英検の級の目安からするとどのくらいの語数なのでしょう。平成 25 年度から実施される学習指導要領では、

中学校卒業までに約 1,200 語, 高校卒業までに約 3,000 語 (+ a) を扱うことになっています。また英検の各級で必要とされる語数は, 4 級で約 1,300 語, 3 級で約 2,100 語, 準 2 級で約 3,600 語, 2 級で約 5,100 語, 準 1 級で約 7,500 語, 1 級で約 10,000~15,000 語です (日本英語検定協会, 2007)。ここでの語の数え方を見出し語換算として大まかに考えると, 71%の語をカバーする「約 1,700 見出し語 (1,000 ワード・ファミリー)」が中学校卒業程度, 英検では 3~4 級ぐらいで, 76%の語をカバーする「約 3,400 見出し語 (2,000 ワード・ファミリー)」が高校卒業程度, 英検では 準 2 級程度ぐらいに相当します。(卯城, pp. 18-20)

一方 Nation and Hwang は一般的語彙と特殊化語彙の関係に関する研究の中で次のように述べている。

この研究は 2000 語近い一般的語彙 (general service vocabulary) が, 大学で特定の専門分野に進もうとする学習者にとって適切であることを示している。この 2000 語の水準を学び終わった後には, 出現頻度一覧表でそれに続く語を学ぶよりも, 特殊化語彙を学ぶ方がより大きなテキストカバー率が得られる。表 1 (註 省略) はこの 1945 語の一般的語彙から得られるカバー率が約 83.4%であることを示している。これに学術的テキストのために UWL (University Word List)⁽⁶⁾から得られるテキストカバー率の 8.5%を加えると学習者は, テキストの適切な理解 (Laufer, 1989) と文脈からの推測を成功させるために必要な (Liu and Nation, 1985) 最低水準である 95%のテキストカバー率に近づく。(Nation and Hwang, p. 40)

これらのことから Nation は次のように結論付けている。

アカデミックなテキストのカバー率95%に達するのに、高頻度の基本語2,000語、一般的なアカデミック単語 (*Academic Word List*) 570語、専門用語や固有名詞や低頻度語1,000語から成る、およそ4,000ワード・ファミリーの語彙サイズが必要であろう。(吉田・三根, p.168)

数値の適否はともかくとしても、カバー率の引き上げは高頻度語のみに頼らず、さまざまな種類の語彙の複合的な組み合わせによって図る必要があるという意見は、ドイツ語の語彙力について考える上でも重要である。

4. 4. ドイツ語基本語彙の研究と成果

基本語彙についてドイツ言語学辞典には次のように記載されている⁽⁷⁾。

ある言語の中核的な語を1000~2000語程度統計的に抽出し、表にまとめたもの。選定の基準となるのは頻度や使用頻度のほかに語の生産性、意味の一般性、機能の重要性などである。一般的なドイツ語話者は6000語から10000語を使うとされるが、ドイツ語では使用頻度の上位1000語でふつうのテキストの約80パーセント、2000語では約90パーセント、4000語では約95パーセントをカバーする。(ドイツ言語学辞典, p.343)

授業でどの語をいくつ学ぶべきかという問題は、ドイツにおいても数十年間にわたって言語学と教授法の関心の対象であり、その結果として30以上もの学習-, 基本語彙集が作成されている(Bohn, p.16)。しかしその作業には大きな困難が伴う。方法としては、(日常生活上の)場面や状況で必要とされる語や表現を集める、既刊の辞書や語彙集などから重要語を拾い出すなどがある(Okamura et al., 2012, p.31)。その一つとして、コーパスの中で各語の出現頻度を測定するという手法を取るとしても、そこにどのようなテキストが含ま

れ、総語数がいくつであるかなどによって結果は左右される。さらに詳しくいえば、仮に新聞を調査対象とするとしても、大衆紙と高級紙、あるいは文化面と経済面では使用される語彙に違いがあろうし、そこには世の中の出来事や流行などが反映されることから、過去何年分を調査するかによっても結果は異なるであろう。さらにこれに雑誌や専門書、小説、インターネットの各種サイト、さらには話しことばなども加えることによって語彙使用の実態を均衡のとれた形で捕捉しようとしても、調査対象として具体的に何をどのくらい取り上げるのかといった〈さじ加減〉によって結果は影響を受ける。

もとより上記したような原理的問題、あるいは語形に基づく機械的処理では同音同形異義語 (Homonym, Schloss = 宮殿/錠) や同一語の異なる用法 (da = そこ (場所)/~なので (理由)) の識別が困難であることなど (Lange et al., p. 218, 例は筆者) の難点は今後も残るであろう。しかしその一方で、研究の蓄積に加えて情報処理技術やコンピュータ言語学などの進歩によって、以前に比べて幅広く膨大なテキストを対象とする複雑な作業も行われるようになってきている。これらのことを考えるならば、コーパスを利用した基本語彙集は語彙学習を支援する有力な道具の一つであると筆者は考える。

出現頻度調査に基づいて近年作成された基本語彙集には次のようなものがある。

1. Jones, R. L. and Tschirner, E., (2006). *A Frequency Dictionary of German Core vocabulary for learners*. Routledge.

本書は総語数 420 万からなる Herder/BY-Korpus という「ドイツ語圏で唯一と言っても良い自称『均衡コーパス』⁽⁸⁾」(岩崎, p. 48) を利用した出現頻度調査に基づいている。その内訳は、ドイツ、オーストリア、スイスにわたって集められた話しことばと文学、新聞、学術的テキストがそれぞれ 100 万語、使用説明書、広告、商品説明などが合計 20 万語である。100 万語あたり 16 回以

上出現する語を頻度順に4034語採録し (Jones and Tschirner, pp. 2-4), 品詞, 英語の対応語, 例文, 100万語あたりの出現回数と共に掲載されている。巻末にはアルファベット順の索引, 品詞別の上位100語の一覧なども付されている。

2. Tschirner, E., (2010). *Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch als Fremdsprache nach Themen*. Cornelsen.

本書は上の1.に採録されている語彙を〈環境〉, 〈教育〉などの分野別に分類して再編成したものである。そして上位2000語までの語を〈基本語彙 (Grundwortschatz)〉, 残りを〈うわのせ語彙 (Aufbauwortschatz)〉に分け, 出現順位, 例文とともに掲載している。巻末にはアルファベット順の索引も付されている。なお1.と同様に, 英語の対応語が挙げられていることから, ドイツ語の基本的語彙と英語語彙との関連付けを図るという点からも有用である。

また本書の基本語彙に対応する練習問題集も出版されている :

Tschirner, E., (2008). *Grundwortschatz Deutsch als Fremdsprache nach Themen — Übungsbuch*. Cornelsen.

3. Okamura, S., Lange, W., Scharloth, J., Bubenhofer, N., *Datengeleiteter Kernwortschatz Deutsch*. <http://japanisch.basic-german.com/> (2017年2月12日採録)

このサイトのもとになっているのは, 科研費による下記の研究である。

研究代表者 : 岡村三郎

研究分担者 : Willi Lange

研究協力者 : Joachim Scharloth, Noah Bubenhofer

2011-2014年度基盤研究 (B), 課題番号 : 23320120

研究課題名 : 「コーパス駆動型研究に基づく学習用ドイツ語語彙」

この研究では、書きことばの代表として新聞一紙と雑誌三種類の約3億7000万語のみならず、話しことば的な要素も考慮するために、三つのインターネットフォーラムからの約4億7000万語を加えた合計8億4000万語を対象として調査を行っている。出現頻度は必ずしも当該の語の重要度と比例するとは限らないことも考慮し (Lange et al., p. 207), 基礎語彙⁽⁹⁾の選択と順位づけは「出現の頻度のみならず、長期間にわたる出現の安定性, 分野を超えた出現の安定性, 生産性 (造語能力)」(岡村 (他), 2 頁目) によって行われている。こうした作業の結果をもとに, 2017 年 2 月の時点では使用頻度上位の 2084 語が品詞の区別, 例文, 日本語の対応語とともに電子的に公開されている。出現頻度順一覧のみならず, 勉学の便を図ってフラッシュカードも用意されている。また例文については「[...] 言語的に比較的簡単でありしかも典型的な例文を選び出すために, 共起および例文の困難度 (例文の中にこれまで得られた基本語彙が現れる度合い) を基準とし, 基本語彙にふさわしい例文をネットから選出」(岡村 (他), 2015, 2 頁目) するという配慮も行われている。

なおこの研究は下記に発展的に継承されており, そこからさらに新しい成果も期待される。

研究代表者：岡村三郎

研究分担者：原口厚

研究協力者：Joachim Scharloth, Willi Lange, Noah Bubenhofer

2015-2017 年度基盤研究 (C), 課題番号：15K02734

研究課題名：「語彙習得と言語使用：ドイツ語基本語彙の認知的習得モデルの実証的な基盤研究」

4. 5. ドイツ語基本語彙とテキスト理解

Jones は上で紹介した Herder/BYU-Korpus の約 10%にあたる 4 万語を使用して、会話、文学、新聞、学術文献という四つの使用域についてカバー率調査を行っている (Jones, 2006)。Table 3 は、出現頻度上位 3000 語までの結果である。

Table 3: Text type and text coverage (tokens) by the most frequent 3000 Words of German in four different text registers

Levels	Conversation	Literature	Newspaper	Academic
1 st 1000	82.6%	72.0%	64.0%	65.4%
2 nd 1000	4.4%	5.4%	6.5%	7.8%
3 rd 1000	2.5%	3.4%	4.2%	4.6%
Total	89.5%	80.8%	74.7%	77.8%

(Jones, 2006, p. 119)

この結果に基づいて Jones は、「高頻度で使用される 3000 の基本語彙が、使用域に応じて、テキストの 75%から 90%を占める」(Jones, 2006, p. 115) とし、「ドイツ語においては、英語の場合と同様に、約 3000 を閾値の語彙数とするのが大学での標準的な勉強にとってふさわしいように思われる」(Jones, 2006, p. 120) と結論付けている。

Jones and Tschirner によれば、彼らが基本語彙集に採録した出現頻度上位の 4034 語は、調査に使用したコーパスの中で、使用域に応じて 80 から 90%の間を占めている (Jones and Tschirner, p. 4)。そして Tschirner は実証的研究によって次のようなことが示唆されているとしている。

以前の読解教育の想定に反して、テキストを理解するためには、そこで使用されている延べ語数の約 95–97%が理解できなければならないとい

うことを実証的研究は示唆している。ある言語における使用頻度上位 2000 語で日常会話と比較的簡単な文学作品で使用されている語彙の平均約 90% がカバーされる。延べ 4000 語でカバー率は約 95% に到達する。(Tschirner, 2010, p. 3)

さらに Tschirner は、語彙を適切に使用するためには、その語はどのようなコンテキストの中で使うのか、あるいは他のどのような語と共に用いられるかなどといった単なる語意味を超えた理解が必要であるとしている (Tschirner, p. 3)。そして各自がことばを〈読む・聞く・話す・書く〉などで使用する個人的経験の中からこれを得るための前提を約 2000 語、ことばをさらに専門的に使用するためには約 4000 語が前提条件であるとしている (Tschirner, p. 3)。

一方、岡村 (他) の行った研究の結果はこれとは対照的である。

高頻度の機能語はとりあえず度外視するならば、辞書編纂上の試みのために本章で行った分析は、コミュニケーション上の目的 (註 使用域) から独立した中心的語彙 (Kernwortschatz) は存在しないことを示唆している。むしろ反対に、出現頻度と生産性、そして安定性が高い領域において早くも語彙は多様化している。語彙は、幹 (中心的語彙) の上に樹冠 (特殊語彙 *Spezielle Wortschätze*) を戴く木ではなく、地面に近いところで枝分かれしているむしろ灌木 (*Busch*) なのである。(Scharloth et al., p. 282)

中心的語彙についての問いにとってこの事実は (註 まさに出現頻度と生産性、安定性が高い語において使用域による違いが大きいこと)、少なくとも出現頻度の見地からは、その存在を肯定するよりもむしろ否定する

ことを意味している。しかしこのことはもちろん、他の語と比較してより頻繁かつ生産的、安定的に使用される語彙素 (Lexeme)⁽¹⁰⁾が確認できないということではない。これらの語彙素は、語彙全体の中で、使用目的に対して中立的な部分をはっきりとした輪郭を伴って形成していないだけなのである。このことはまた、外国語学習者のために基本語彙を定めることとも矛盾しない：語彙の選択という観点からは、コミュニケーション上の目的に照準を合わせてこれを行うことが有意義であり、基本語彙の範囲は教授法上の基準によって定めることが可能なのである。(Scharloth et al., p. 283)

Jones と Jones and Tschirner の結論は、前者が約 4 万語、後者が 420 万語の調査結果に基づくものである。また Jones, Jones and Tschirner が出現頻度に絞って調査しているのに対して、岡村 (他) の研究は 8 億 4000 万語という膨大な語数に加えて、安定性と生産性という要素も加味している。さらにコーパスを構成するテキストの分野にも異なりがある。三者の結論にはこれらの違いが反映していると考えられ、読解に必要な語彙の習得という観点からこれをどう評価するかは難しい問題である。

しかし「比較的少量の適切な語彙が学習者に多くの成果をもたらす」(吉田・三根, p. 10) ということと、使用域によって中心的語彙は著しく異なる (Scharloth et al., p. 283) という研究結果は矛盾せず、基本語彙について考えるうえできわめて示唆的である。上でも見たように、Jones は会話、文学、新聞、学術文献の間でカバー率に違いがあることを指摘している。Nation は、テキストのカバー率を上げるためには特殊化語彙が有益であるとし (吉田・三根, p. 19), また Krashen は外国語学習の早い段階から分野を絞ってテキストを読ませる “narrow reading” を推奨している (Krashen, p. 23)。これらに共通するのは、〈使用域に応じて使われる語に違いはあるものの、各分野の中では比

較的少数の語が頻用されている」という認識である。このことを勘案するならば、すべての分野に共通する中心的語彙の数とその顔ぶれについての探求は一応措くとして、語彙力の拡大・強化という実的要請の点からは、なるべく早い段階から使用域を分けてテキストを読み、そこで頻用される語彙の習得を図ることが実質的な〈基本語彙〉の獲得にとって有益であると考えられる。

5. 機能語

いつの時代のどのようなテキストにも常に用いられる〈基本語中の基本語〉ともいえる一群の語がある。それは〈機能語〉である。上に見た岡村(他)の研究でも、機能語は各使用域に共通して高頻度で出現し(Scharloth et al., p. 282), Scharloth の譬にならえば、これは〈灌木の地面に近いまだ枝分かれしていない部分〉(Scharloth et al., p. 282) に相当すると言えよう。

Nation は、古典的な高頻度語彙集である Michael West の *A General Service List of English Words* では、収載されている約 2000 ワード・ファミリーの中で機能語は約 165 ワード・ファミリーを占めるとしている(吉田・三根, p. 16)。また Jones and Tschirner は、英語の場合わずかに 50 の機能語が発話の 60% を占めているとしている(Jones and Tschirner, Series Preface)。ドイツ語については、Tschirner の〈基本語彙〉約 2000 語の中には、筆者が数えたところでは前置詞が 44 語収載されており、基本語彙中の前置詞の割合は約 2.1% である。ちなみにうわのせ語彙での採録はわずかに 9 語である。また接続詞は 26、接続詞としても用いられる副詞が約 25 採録されている。同書では接続語⁽¹⁾が他の品詞として採録されている場合もありうることを考慮すると、接続語は基本語彙中のおおよそ 2.4% であり、前置詞と接続語が基本語彙に占める割合は約 4.6% である。このように機能語の数は比較的少ない。しかしこれが分かることによって語と語、文成分と文成分、文と文などの関係を把

握ることができ、他の未知語の意味内容を推測したりなどするうえで往々にして重要な手がかりが得られることから、習得の見返りは大きい。

5.1. 前置詞

前置詞を学ぶに際して、出発点として次のことを頭に入れておくとよいであろう。

前置詞はふつう名詞や代名詞などと結びついて、それらと他の語（動詞・形容詞・名詞）との関係を示す品詞です。[…]

前置詞は古くは位置を表わす副詞に由来します。位置の副詞がその発達段階において名詞と結びつくようになり、an, auf, aus, bei, durch, hinter, in, mit, nach, über, um, unter, von, vor, zu などの前置詞ができたのです。これらの前置詞の多くは、のちに時間を示す前置詞としても用いられるようになり、さらには論理的な関係や抽象的な関係を表わすためにも用いられるようになったのです。これらの副詞が動詞と結びついて複合動詞を作っている場合もあります。

前置詞のなかには、名詞・形容詞・副詞を転用したものや、分詞をそのまま前置詞として用いたものもあります。

名詞に由来するもの

dank ~のおかげで wegen ~のために trotz ~にもかかわらず *usw.*

形容詞に由来するもの

voll ~でいっぱい nächst ~の次に südlich ~の南に
usw.

副詞に由来するもの

links ～の左に rechts ～の右に längs ～に沿って usw.

分詞に由来するもの

betreffend ～に関して entsprechend ～に相応して usw.

また前置詞と名詞が結びついた形が1つの前置詞として固定しているものもあります。

infolge (<in+Folge)

～の結果として

zufolge (<zu+Folge)

～に従って

anstatt (<an+Statt)

～の代わりに

anhand (<an+Hand)

～により

aufgrund (<auf+Grund)

～に基づき

anstelle (<an+Stelle)

～の代わりに

(ミツヒエル (他), pp. 120-121)

一般的に、前置詞はその後に続く名詞や代名詞などとともに〈前置詞句〉という文成分を形成する。したがって文中の前置詞がそれとわかることは、文成分に基づく文の切り分けにも役立つ。これについては「戦略と戦術 (2)」236-238 頁に述べた。

5. 1. 1. 前置詞の表す諸関係

前置詞の意味内容や用法は往々にして多岐にわたり、複雑である。しかし上にも見たように、「大きく分ければ前置詞によって表される関係は、a) 場所

(lokal), b) 時間 (temporal), c) 様態・方法 (modal), d) 原因・結果 (kausal) など」(ミツヒエル (他), p. 121) であると理解しておくといよい。

a) 場所 (lokal)

Frische Gemüse kauft man besser **auf** dem Markt.

新鮮な野菜は市場で買った方がよい。

b) 時間 (temporal)

Ich miete ein Zimmer **auf** sechs Monate

私はこの部屋を6か月の約束(期限)で借りる。

c) 様態・方法 (modal)

Wie heißt das **auf** deutsch?

それはドイツ語でどう言いますか。

d) 原因・結果 (kausal)

Er las das Buch **auf** Anregung einer Zeitungsrezension.

彼はその本を新聞の書評にひかれて読んだ。

(b) は独和大辞典, p. 181, その他はミツヒエル (他), p. 122, 太字筆者)

ミツヒエル (他) は同書 124-136 頁でこうした図式にもとづいた各前置詞の用法について詳しく説明している。

場所が時間などへ転用される「前置詞の用法の拡張」(清野, p. 190) について清野は次のように述べている。

なかでも3・4格支配の前置詞である an, auf, hinter, in, neben, über, unter, vor, zwischen はとくにさまざまな用法を持っています。これらはすべて空間の位置関係を表す前置詞だということに注意してください。私たちがいろいろな物事を理解するとき、その認知的な基盤としてこの空間の位置関係が使われることが非常に多いのです。

代表的なものが「時間」です。時間というのは抽象的なもので目には見えません。そこで、「空間」の概念を当てはめて考えるわけです。「1時間前」とか「2時間後」という「前」「後」の関係は本来「空間の位置関係」を表すものです。それをそっくり当てはめているわけです。[…]

ともかく、空間の概念は時間に拡張されていくわけですが、それだけではなく、他のさまざまな概念にも拡張されていきます。なかにはとても抽象的で、「前置詞格目的語」として覚えたほうがいいものもあります。たとえば、Er wartet auf seine Freundin. 「彼はガールフレンドを待っている」の「auf + 人⁴」も、auf の持つ「... に対して、... を期待して」という意味から来ているにちがいはありませんが、そういうことをあまり言い過ぎると、こじつけと思われる危険もあります。以下では、いくつかの重要な前置詞の意味の拡張を、こじつけにならないよう、「空間的イメージ」を手がかりにして説明していきます。(清野, pp.190-191)

これに続いて清野は同書の192-199頁で an, auf, in, aus の用法について解説している。

5. 1. 2. 前置詞と副詞

前置詞の多くはかつて副詞であったことから、今日でも副詞的に用いられることがよくある。相良は次のように述べている。

本来の前置詞が更に古い時代には副詞であったことを考えれば、現今もこれらがしばしば副詞的に用いられることがあるのは異とするに足りない。その最も普通の場合は動詞と合成した場合である：aufstehen（立ち上がる，起床する），ausgehen（外出する），durchkommen（通り抜ける），mitnehmen（携行する），vorlesen（読んで聞かせる，朗読する）等々。例えば ich lese das Gedicht vor ihm（私は詩を彼の前で読む）といえは vor は前置詞であるが，ich lese das Gedicht ihm vor（私は詩を彼に読んで聞かせる）といえは vor は副詞である。また独立的に用いて von Jugend auf（子供の時から），von Haus auf（生来）などの auf, aus は前置詞 von の意味をさらに補う副詞であり，die Flasche ist aus（瓶は空である），あるいは Licht aus!（明かりを消せ）などの aus も副詞である。なお nach wie vor（相変わらず），nach und nach（しだいに），durch und durch（どこまでも），um und um（四方八方から，全く）等々も副詞である。

ある前置詞は名詞又は代名詞のほかにも副詞と関係することがある：von früh bis spät（朝早くから夜遅くまで），nach oben（上へ），für jetzt（今のところ，さしあたって），von heute auf morgen verschieben（今日から明日に延期する）など。（相良，pp. 303-304，〈生来〉，〈四方八方から，全く〉以外の訳語筆者）

なお前置詞が副詞として使われる重要な用法である分離動詞については「戦略と戦術 (3)」の 30-36 頁及び本稿の 3.8.2. でも扱った。

したがって前置詞の意味内容を把握しておくことは、分離動詞をはじめとして、副詞として用いられた場合にも応用がきく。語彙力の拡充と読解という観点から重要なのは、語を厳密に各品詞に分断することではなく、むしろ逆に品

詞の枠を超えたゆるやかなつながりの中で理解することである。これによって語の汎用性が高まる。

5.2. 接続語

接続語とは「単語 (Haus *und* Hof 家屋敷), 語群 (im Garten *und* auf der Straße 庭と通りで), 文 (Er spielt, *und* sie lernt. 彼は遊び, 彼女は学ぶ) などを連結する働きをもつ」(ドイツ言語学辞典, p.487) ことばである。機能語の中で前置詞と並んで、あるいは読解にとってそれ以上に重要なのが接続語である。

5.2.1. 読解における接続語の効用

Heute bleibt er zu Hause. Die Unibibliothek ist zu.

今日彼は家にいる。大学図書館は閉まっている。

彼が自宅に留まるということと、大学の図書館が閉まっているということは本来全く別の事象である。しかし人間には、いくつかのことばが目に入ると、それらを互いに関係づけて整序しようとする性癖がある。そこでこの二つの文についても、しばしば後ろの文は次のような形で前文の理由として理解される。

Heute bleibt er zu Hause, **weil** die Unibibliothek zu ist.

今日彼は家にいる、**なぜならば**大学図書館が閉まっているので。

(← 彼は大学図書館をよく利用している。しかし今日は開いていないので、行っても入れない。したがって自宅に留まる。)

このように考えるならば、weilのような接続語は、話の筋道をあえてことばによって明示したもの、すなわち〈論理関係の方向指示器〉のようなもので

あるといえよう。そこで逆に、次の文の … の部分が分からない場合でも、weil という語を知っていれば、そこに述べられているのは、少なくとも主文に対する何らかの理由であると推察することができる。

Heute bleibt er zu Hause, **weil** … .

今日彼は家にいる、**なぜならば** … 。

人が自宅に留まる理由としてはさまざまなことが考えられる：単に外に出たくない／誰かに姿を見られたくない／乗車券やガソリンを買う金がない／荒天である／暑い／寒い／訪問客がある／疲れている／具合が悪い／自宅の方が仕事がしやすい等々。しかしこの場合、コンテキストが欠けていることによって、さらに推測を絞ることはできない。それでは次のような場合はどうであろうか。

Gestern hatte er keinen Regenschirm bei sich. Er musste im kalten Regen 20 Minuten zum Bahnhof laufen. Er war ganz nass. Heute bleibt er zu Hause, **weil** … .

昨日彼は傘を持っていなかった。彼は冷たい雨の中を駅まで20分歩かなければならなかった。彼はずぶぬれになった。今日彼は家にいる、**なぜならば** … 。

冷たい雨に濡れるということは不快であるのみならず、時として風邪を引くなどの健康上の問題を引き起こすことをわれわれは知識として、あるいは体験から知っている。そこでこうした背景的知識やコンテキストとの関係の中で、… の部分の内容がはっきりとは分からなくとも、そこに何らかの健康上の問題が挙げられているのではないかと考えるのは妥当なことである。これによって推測の範囲を大きく限定することができる。そしてこのテキストがさらに次

のように続いたとする。

Heute bleibt er zu Hause, **weil** er sich erkältet hat.

今日彼は家にいる。なぜならば sich erkältet したので。

ここで sich erkältet の意味内容がわからなかったとする。しかし〈冷たい雨の中を歩いて体が濡れた→自宅にいる〉という脈絡の中で考えれば、これが冷たい雨に打たれたことに起因する何らかの問題を表していることに思いが及ぶはずである。そしてその中で医学的な不具合に焦点を当てた場合、雨との関係から骨折や腰痛、歯痛などは排除され、〈風邪を引く〉の周辺に推測を絞り込むことは自然な流れであろう。

まさにこうした点に接続語習得の効用が存在する。〈論理関係の方向指示器〉としての接続語が分かることによって、文の互いの筋道上の関係が分かり、そこからテキスト内容や未知語の意味内容推測の大きな手がかりが得られる。テキストを構成する語彙が膨大であるのに対して、「ドイツ語では接続語は比較的少なく、その意味内容もかなりはっきりしている」(Jones and Tschirner, p. 5) ことを考慮するならば、接続語はテキスト理解への貢献度が高く、習得に要する時間と労力に対してそこから得られる便益が大きい。

5. 2. 2. 接続語の種類

ドイツ語の接続語には次の四種類があり、語順と関係する。並列接続詞、従属接続詞、接続詞的副詞については、「戦略と戦術 (2)」の 200-203 頁でも取り上げた。文構造を見破る手掛かりともなるので、簡単に繰り返しておく。

1) 並列接続詞

これは二つの主文を対等につなぐ接続詞であり、語順に影響を与えない。す

なわち、語順の上では〈0番目〉と数えられる。__は並列接続詞、太字は定動詞、斜体は主語、○数字は語順を表す。

Er ist sehr groß. Aber *sein Vater* **ist** nicht so groß.

① ① ②

彼はとても背が高い。しかし彼の父はそれほど大きくない。

2) 従属接続詞

これは副文を主文につなぐ役割を果たし、定動詞は後置される。__は従属接続詞を表す。

Wir bleiben heute zu Hause, weil *das Wetter* schlecht **ist**.

┌────────── 主文 ─────────┐ ┌────────── 副文 ─────────┐

私たちは今日家にいる、なぜならば天気が悪いので。

3) 接続詞的副詞

本来は副詞でありながら、接続語としての機能も果たす語をここでは接続詞的副詞と呼ぶ。接続詞的副詞は主語以外の文成分であることから、これが文頭に来る場合、定動詞はその次位に置かれる。...は接続詞的副詞を表す。

Er muss morgen das Referat abgeben. Deshalb **kommt** *er* heute nicht zur Party.

① ② ③

彼は明日レポートを提出しなければならない。だから、彼は今日パーティーに来ない。

接続詞的副詞は、本来が副詞なので文頭のみならず文中に置かれることもあ

り、接続詞的副詞と〈純粋な〉副詞の区別は難しい。

Er muss morgen das Referat abgeben. Er kommt deshalb heute nicht zur Party.

① ②

彼は明日レポートを提出しなければならない。彼はだから今日はパーティーに来ない。

4) 複合の接続詞

これは次のような接続詞である。

複合の接続詞は、その名のとおり、複数の語が相関的に用いられることによって接続詞としての機能を果たす。従属接続詞にも als ob, so dass, wenn ... auch などのように複数の語から構成されるものがあるが、それらは隣接しているか、あるいは離れていても片方の語が副文にしか現れないという点で異なっている。複合の接続詞は、基本的には、文肢と文肢どうし、文肢文と文肢文どうし、そして文と文どうしを対等につなぐ。

構成要素となる語はおもに接続詞的副詞あるいは純粋な副詞であり、基本的には接続詞的副詞に準ずる語順をとる。

複合の接続詞は、意味から言うと、基本的に連結的・付加的なつなぎ方をする。ただし、entweder ... oder ... だけは二者択一的なつなぎ方をする。

複合の接続詞でつながれる文では基本的には接続詞的副詞に準ずる語順となる。複合の接続詞 entweder ... oder と nicht nur ... , sondern auch に含まれる oder と sondern の二つだけは本来並列接続詞であるので、これらの後では、通常定動詞正置となる。(村上, p.60)

Aber eine andere Alternative sehe ich nicht, entweder **bleibt** *alles* so wie es

① ② ③

ist oder *man ändert* was. (Okamura et al.)

④ ① ②

しかし私には他の可能性が見えない。全てが現状のままにとどまるかそれとも何かを変えるかだ。

5. 2. 3. 機能別に見た接続語

Okamura et al. の基礎語彙と Tschirner の基本語彙の双方ないしはいずれかに採録されている接続語を紹介する。各機能への分類については、三瓶と村上、ミツヒエル（他）を参考とした。この程度の数なので、集中的に覚えるのも一法である。しかしまずはテキストを読みながら〈チェックリスト〉として活用するのがよいであろう。これによって自分が読むテキストに類出する接続語を選別することも可能となる。

利用にあたっての注意

1) 機能の解釈

同じ接続語でも見方によって機能が異なることがある。

Er kann bei uns wohnen, **solange** er Miete bezahlt. (Tschirner, p. 206, 太字筆者)

彼は私たちのところに住むことができる。彼が家賃を払う限りは。

solange は「副文で述べられる出来事が継続している限り主文の陳述内容が妥当する」(村上, p. 127) ことを表す。そこで時間という観点から〈同時性〉とも、あるいは〈条件〉とも解釈することができる。こうした背後には当該の

語の歴史的な変化などがあり (村上, p.177), 問題は複雑である。しかしここでは一覽性という観点から, ある一つの機能のみを挙げることにする。

2) 接続語の種類

接続語を各機能に分けたのち, これをさらに並列接続詞, 従属接続詞, 接続詞的副詞, 複合の接続詞に分類した。上にも見たように, 接続詞的副詞と〈本来の〉副詞の間に明確な一線を引くことは困難である。また doch は並列接続詞としてのみならず, 接続詞的副詞としても用いられるなど, 〈揺れ〉が見られる場合もある。〈前置詞と副詞〉の項でも述べたように, 読むという観点から重要なのは, 語の厳密な区別よりも, 垣根を低くして相互乗り入れを図ることである。

3) 語彙集の略記

Okamura et al. と Tschirner による語彙集は次のように略記した。脇の小数字はそれぞれにおける順位を表す。複合の接続詞については, 当該の用例が採録されている語の順位を記載した。双方の語に採録されている場合は順位の高い方を挙げた。なお Okamura et al. の順位は, 2017年2月9日における同サイトの „Database“ (= Gesamtkorpus) に基づく。

(O_{○○}) : Okamura et al., *Datengeleiteter Kernwortschatz Deutsch*. の基礎語彙 (Grundwortschatz).

(T_{○○}) : Tschirner, E. (2010). *Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch als Fremdsprache nach Themen*. の基本語彙 (Grundwortschatz).

(-) : 採録なし。多義語などで, 当該の機能や意味内容に該当するものが収載

されていない場合も（-）とした。

4) 日本語による〈訳語 (Wiedergabe)〉

それぞれの語にはさまざまな日本語が対応する。ここに付した訳語は一例に過ぎない。それよりも〈反対・対立〉, 〈理由〉といった機能の理解・習得が重要である。

5) 英語の対応語

[] 内の英語の対応語は基本的に Tschirner から採録した。これにない語については基本的に下記を参考とした。

James, C. L. and James, C. J., (1991). *Basic German vocabulary*. Langenscheidt

Brough, S., (1991). *Langenscheidts Handwörterbuch Deutsch-Englisch Neubearbeitung 1991*. Langenscheidt.

Forst, G. und Crellin M., (1995). *Thematischer Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch-English*. Klett Edition Deutsch.

なお接続語とは異なる品詞の語として採録されている場合には対応語は挙げなかった。適切な語が見当たらない場合も（-）とした。

6) 例文と出典

例文は当該の〈機能〉と〈種類〉になるべく適合するものを選んだ。原文に付されている〈訳 (Wiedergabe)〉は、引用元に挙げられている場合には原則としてこれを使用し、一部は筆者が書き改めた。それ以外については筆者が作

成した。

例文の出典は Okamura et al. と Tschirner の場合は (O), (T) とした。なお Okamura et al. から以外の例文における接続語の太字と非斜体は筆者による。

5. 2. 3. 1. 並列

【並列接続詞】

1) **und** (O₅₀, T₂) : **そして** [and]

Er lernt ständig hinzu **und** nimmt Rat an. (O)

彼は常に学び続け、そして人の忠告を聞く。

【接続詞的副詞】

2) **auch** (O₆, T₁₆) : **～もまた** [also, too]

Vor Schrecken sagte niemand ein Wort, **auch** waren alle wie versteinert.
(村上, p. 35)

驚いて誰も一言も発することなく、みんなが石のように固まりもした。

3) **weiterhin** (O₁₈₁₇, T₉₁₇) : **さらに, そのうえ** [furthermore]

Sie verlangen mehr Urlaub, **weiterhin** fordern sie eine bessere Belohnung.
(独和大辞典, p. 2520)

彼らは休暇の増加を望み、そのうえ給与の改善を要求する。

4) **sogar** (O₅₂₅, T₂₇₁) : **そのうえ, それどころか～さえも** [even]

sogar der beste Schüler der Klasse bestand den Test nicht. (T, p. 131)

それどころか組で一番よくできる生徒さえも試験に合格しなかった。

- 5) **außerdem** (O₁₁₈₄, T₄₅₅) : **それに加えて, そのうえさらに** [besides, in addition]

Wir haben zwei Kuchen gebacken, **außerdem** hat mein Vater auch einen guten Wein vorbereitet. (村上, p.38)

私たちは二つケーキを焼いた。それに加えて私の父は上等のぶどう酒も用意した。

- 6) **sowie** (O₁₄₉₇, T₂₁₅) : **及び, さらに** [as well as]

Er besitzt Hotels in Malaysia **sowie** Fabriken in China. (O)

彼はマレーシアにはホテルを, さらに中国には工場を所有している。

【複合の接続詞】

- 7) **nicht (nur) A, sondern (auch) B** (O₂₁, T₁₁₃) : **A (だけ) ではなく, B (も) ある** [not (only), but (also)]

Diese Folgen sind **nicht nur** psychischer, **sondern auch** physischer Natur. (O)

この結果は単に精神的のみならず, また身体的なものでもある。

- 8) **weder A noch B** (O₈₁₁, T₇₂₁) : **A でもなければ B でもない** [neither ... nor]

Er spricht **weder** Deutsch **noch** Englisch. (O)

彼はドイツ語も英語も話せない。

- 9) **sowohl A als auch B** (O₁₅₃₂, T₆₂₄) : **A も B も** [both ... and]

Sowohl Frau Ehlig **als auch** Frau Henning sind heute krank. (T, p.206)

Ehlig さんも, Henning さんも今日は病気である。

- 10) **einerseits A, ander(er)seits B** (O₂₁₀₅, T₈₄₂) : 一方では A, 他方では B
である [on the one hand, on the other]

Einerseits lebe ich gerne in der Stadt, **andererseits** fehlt mir die Natur.
(T, p. 123)

一方では私は町に住むのが好きである。他方では私には自然が足りない。

5. 2. 3. 2. 反対・対立

【並列接続詞】

- 11) **aber** (O₂₂, T₃₂) : しかし [but]

Ich war ärgerlich, **aber** ich sagte nichts. (O)

私は腹を立てていた。しかし何も言わなかった。

- 12) **sondern** (O₂₁, T₁₁₃) : ~ではなく, むしろ~ [but (on the contrary)]

Er achtet nicht auf Schnelligkeit, **sondern** auf Genauigkeit. (T, p. 206)

彼は速さではなく, むしろ精確さに留意している。

【接続詞的副詞】

- 13) **sonst** (O₂₄₃, T₂₉₁) : さもなければ [otherwise]

Ich starte sofort, **sonst** komme ich in den Stau. (O)

私はすぐに出発する。そうしないと渋滞に巻き込まれてしまう。

- 14) **allerdings** (O₃₆₀, T₂₂₂) : しかし, ただし [though]

Wir können gern noch bleiben, **allerdings** müssen wir morgen früh aufstehen. (T, p. 123)

私たちはまだ留まりたい。ただし私たちは明朝早く起きなければならない。

- 15) **jedoch** (O₁₀₀₇, T₁₉₁): **しかし, とはいえ** [but]
 Ich stimme Ihnen zu, habe **jedoch** noch eine Frage. (T, p. 124)
 私はあなたに賛成する。しかしもう一つ質問がある。
- 16) **trotzdem** (O₁₁₆₃, T₆₂₆): **それにもかかわらず** [nevertheless]
 Die Zeit war zu kurz, **trotzdem** hat es Spaß gemacht. (T, p. 124)
 時間は余りにも短かった。それにもかかわらずそれは楽しかった。
- 17) **dennoch** (O₁₁₆₅, T₇₅₂): **それにもかかわらず** [nevertheless]
 Er wusste den Termin schon lange, **dennoch** kam er zu spät. (T, p. 123)
 彼はその予定の日を既に以前から知っていた。それにもかかわらず彼は遅れてやってきた。
- 18) **nur** (O₁₀₀, -): **ただし, もっとも～ではあるが** [but]
 Er hat gesagt, dass er kommen will. **Nur** glaube ich das nicht. (O)
 彼は来たいと言いました。ただ私はそれを信じませんね。
- ☆ nur は〈～だけ〉[only]を表す副詞としてよく用いられる。(T₄₄)
 にはこの意味として採録されている。
- Die Hose hat **nur** zehn Euro gekostet, also habe ich sie gekauft. (T, p. 186)
 そのズボンはたった10ユーロだった。だから私はそれを買った。
- 19) **dagegen** (O₃₂₀, -): **それとは反対に, それに比べて** [on the contrary, however]
 China **dagegen** ist ein alter Feind. (O)
 中国はそれとは反対に以前からの敵である。

☆ 〈それに反対して〉という意味の副詞としては (T₄₃₃) にも採録されている。

Die meisten waren für den Bau der neuen Straße, nur wenige waren **dagegen**. (T, p. 202)

たいていの人たちは新しい道路の建設に賛成していた。ごくわずかな人たちがそれに反対であった。

- 20) **hingegen** (O₂₁₃₈, T₁₂₈₂) : **それとは反対に** [on the contrary, in contrast]

Den Käse mochte ich nicht, der Wein **hingegen** hat gut geschmeckt. (T, p. 199)

そのチーズを私は好まなかった。ぶどう酒はそれに反して美味だった。

【複合の接続詞】

- 21) **zwar A, aber B** (O₇₁₈, T₁₇₈) : **確かに A ではある, しかし B である**
[certainly ... but]

Zwar ist er noch jung, **aber** schon sehr erfahren. (T, p. 125)

彼は確かにまだ若い。しかしすでに経験豊かである。

5. 2. 3. 3. 選択・代替

【並列接続詞】

- 22) **oder** (O₁₄, T₃₀) : **あるいは** [or]

Lass uns ins Kino gehen **oder** einen Spaziergang machen! (T, p. 205)

一緒に映画に行こう, あるいは散歩しよう。

【複合の接続詞】

- 23)
- entweder A, oder B**
- (O
- ₁₄₁₉
- , T
- ₁₀₀₀
-) : A か, あるいは B か [either ... or ...]

Entweder du entschuldigst dich, **oder** ich spreche nicht mehr mit dir. (T, p. 205)

君が謝るか, あるいは私が君と今後一切口をきかないかのどちらかだ。

5. 2. 3. 4. 原因・理由

【並列接続詞】

- 24)
- denn**
- (O
- ₅₉
- , T
- ₈₆
-) : というのは, なぜなら [for]

Am Sonntag arbeite ich nicht, **denn** es ist mein einziger freier Tag in der Woche. (T, p. 205)

日曜日には私は仕事をしない。なぜなら日曜日は一週間の中で私の唯一の休日だからである。

【従属接続詞】

- 25)
- weil**
- (O
- ₁₄₄
- , T
- ₈₄
-) : ~
- なので**
- [because]

Weil kein Geld da ist, gibt es große Probleme. (O)

お金がないので, いくつか大きな問題があります。

- 26)
- da**
- (O
- ₂₆
- , -) : ~
- だから**
- , ~
- なので**
- [since, because]

Das macht riesig Spaß, **da** ich unheimlich gern singe. (O)

それはとても楽しい。私は歌うのがものすごく好きだから。

☆ **da** は〈あそこ〉[there] を表す副詞としてもよく用いられる。(T₃₅)
にはその意味として採録されている。

Siehst du das Tier **da** auf der Wiese? Weißt du, was das ist? (T, p. 194)

草地の上のあそこにいる動物が君には見えるか。君は知っているか、あれが何であるかを。

- 27) **zumal** (O₂₅₉₇, T₁₉₅₀): **特に～だから, ～なのでなおさら** [in addition, plus]

Das Essen ist wirklich zu teuer, **zumal** es auch nicht schmeckt. (T, p. 206)
その食事はほんとうに高すぎる。おいしくもないのでなおさらだ。

★ weil・da・denn の違い

weil: [...] weil で表される理由は直接的な因果関係を表します。(清野, p. 267)

[...] weil は聞き手や読者にはまだ知られていない, 重要と思われる事柄や事実を, 原因や理由として述べる場合に用いられる。新しい情報として述べられるその因由的な意味は, 直接的あるいは論理的であり, 主文で言い表される結果的内容との因果関係は, da を用いる場合よりも, 緊密に示される。(村上, p. 82)

Ich kann nicht zur Fete kommen, **weil** ich kein Geld habe.

私はお金がないので, パーティーには行けません。

(関口, 1994, pp. 201-202 をもとに筆者が合成)

da: [...] weil は相手が知らないことを理由に挙げるのに対し, da は相手の知っていることを根拠にしている傾向があります。(清野, p. 267)

da は, 話しの中でとりたてて重要とは思われない事柄や事実を, 原因や理由として, 付随的に述べる場合に用いられる。その内容は聞き手や読者にとっても既知のことであったり, 自明である場合が多い。(村

上, p.82)

Da ich kein Geld habe, kann ich nicht zur Fete kommen.

君も知ってのとおり, ぼくはお金がないだろう, だからぼくはパーティーには行けないよ。

(関口, 1994, pp.201-202 をもとに筆者が合成)

denn: [...] denn は「なぜ私がそういうことを言うかと言えば」という推論の根拠を挙げる。(清野, p.267)

denn の場合は, まずその先行する文の陳述内容を述べる送り手の判断が介在してくることを指摘しなければならない。つまり客観的な因果関係ではなく, 話者の立場から述べられた陳述内容の根拠を言い表す場合に用いられるのである。(村上, p.84)

Beende erst einmal dein Studium, **denn** dann findest du leichter eine Arbeit.

まず大学を卒業しなさい。そのほうが職を見つけやすいからね。

(ミツヒエル (他), p.183)

5. 2. 3. 5. 結果・帰結

【従属接続詞】

28) **dass** (O₃₃, T₂₂): **その結果** [that]

Die Kinder lärmten, **dass** die Fenster klirrten. (村上, p.96)

子どもたちが騒ぎまわったので, 窓がガタガタきしんだ。

☆ dass が結果・帰結を表す場合, 主文に相関詞 so を伴う場合が多い。

Es war **so** eng, **dass** wir uns nicht bewegen konnten. (O)

そこはとても狭かった。その結果私たちは身動きできなかった。

29) **so dass** (-, T₇₆₁) : **その結果** [so that]

Er aß zu viel Eis, **so dass** er Schmerzen im Bauch bekam. (T, p. 205)

彼はアイスクリームを食べすぎた。その結果彼は腹痛を起こした。

【接続詞的副詞】

30) **dann** (O₅₈, -) : **その場合には, そうすれば** [and (then)]

Faste, **dann** bist du schlank. (独和大辞典, p. 457)

飲食を絶て。そうすれば君はすらりとした体形になる。

☆ dann は〈それから〉, 〈それに続いて〉 [then] という意味でも用いられる。この意味としては (T₃₃) に採録されている。

Erst habe ich die Küche sauber gemacht und **dann** das Bad geputzt. (T, p. 200)

最初に私は台所をきれいにした。そしてそれから浴室を磨き上げた。

31) **also** (O₁₇₈, T₄₀) : **だから, したがって** [so]

Ich bezahle, **also** kann ich eine Gegenleistung erwarten. (O)

私は金を払う。したがってその見返りを期待できる。

32) **deshalb** (O₂₆₄, T₂₆₆) : **それゆえ** [therefore]

Ich habe den Text nicht gelesen und **deshalb** kann ich nichts dazu sagen. (T, p. 123)

私はそのテキストを読まなかった。それゆえ私はそれに対して何も言うこ

とができない。

33) **darum** (O₁₄₁₇, T₅₈₇) : **だから** [therefore]

Ich habe jetzt das Buch gelesen und **darum** eine andere Meinung zu diesem Thema. (T, p. 202)

私は今その本を読んだ。だから私はこの主題について異なる意見を持っている。

34) **daher** (O₁₄₅₁, T₃₃₂) : **だから** [therefore]

Er geht immer spät schlafen, **daher** kann er morgens nie früh aufstehen. (村上, p. 52)

彼はいつも夜更しをする。だから彼は朝早く起きられたためしがない。

35) **deswegen** (O₁₄₉₈, T₈₃₅) : **それゆえ** [therefore, that's why]

Alle haben eine andere Meinung. **Deswegen** ist es noch zu keiner Eini-
gung gekommen. (T, p. 123)

全員が異なる意見を持っている。それゆえそれは合意に至っていない。

36) **dadurch** (O₁₇₇₅, T₃₇₁) : **それによって, それを通じて** [through it]

Er hat seine Meinung begründet und **dadurch** die anderen überzeugt. (T, p. 202)

彼は自分の意見を根拠づけた。そしてそれによって他の人たちを納得させた。

37) **somit** (O₂₈₃₃, T₉₀₈) : **それゆえに, したがって** [therefore]

Er war dabei, **somit** weiß er Bescheid. (T, p. 124)

彼はその場にいた。それゆえに彼は事情を知っている。

5. 2. 3. 6. 条件

【従属接続詞】

- 38) **wenn** (O₁₂₁, T₄₃) : ~する場合 [if, when]

Wenn du körperlich krank bist, gehst du zum Arzt. (O)

君は身体が病気になるったら、医者へ行く。

- ☆ **wenn ~ dann ~** という形で用いられることもある。

Wenn ich komme, **dann** sicher mit der Bahn. (O)

私が来るときには、(そのときには) きっと鉄道で来ます。

- 39) **falls** (O₁₁₃₅, T₁₃₅₇) : ~の場合には, ~ならば [if]

Ich plane gerade eine Wanderung, **falls** das Wetter mitspielt. (O)

私は今ハイキングを計画しています。天気がよければの話ですが。

- ☆ **falls** は **wenn** に比べて、条件の可能性が比較的低い場合に用いられる。(Großwörterbuch DaF, p. 335)

Falls du ihn noch treffen solltest, sagst du ihm bitte, dass ich mich bald melde. (Großwörterbuch DaF, p. 335)

もし万一彼に会うようなことがあれば、彼に伝えてくれ。近いうちに連絡すると。

- 40) **(in)soweit** (O₂₈₃₅, T₁₀₂₉) : ~の場合には, その限りでは [as far as]

Soweit sich nichts ändert, können Sie am Kurs teilnehmen. (T, p. 184)

何も変更がない限り、あなたはこの講座に参加することができます。

☆ (in)soweit は接続副詞としても用いられる。

Die Angeklagte hat für das Kind gesorgt, **insoweit** ist ihr kein Vorwurf zu machen. (Klappenbach Bd. 3., p. 1961)

被告は子供のために気づかいをした。その限りにおいて彼女を非難することとはできない。

41) **solange** (O₂₁₇₃, T₁₃₂₇) : ~の限りは [as long as]

Er kann bei uns wohnen, **solange** er Miete bezahlt. (T, p. 206)

彼は私たちのところに住むことができる。彼が家賃を払う限りは。

42) **(in)sofern** (O₃₃₅₃, T₁₉₈₅) : ~の場合には, その限りでは [provided that, if]

Ich würde gern an der Veranstaltung teilnehmen, **sofern** Sie nichts dagegen haben. (T, p. 205)

私はその催しに参加したいのだが。もしあなたに異議がない場合には。

☆ (in)sofern は接続副詞としても用いられる。

Jetzt ist es erst zehn Uhr, **insofern** können wir noch länger bleiben. (T, p. 124)

今やっと十時である。その限りではわれわれはもっと長く滞在できる。

5. 2. 3. 7. 譲歩・認容

【従属接続詞】

- 43)
- obwohl**
- (O
- ₄₆₃
- , T
- ₃₃₆
-): ~にもかかわらず [although]

Viele Menschen sind nicht glücklich, **obwohl** sie viel Geld haben. (T, p. 205)

多くの人々は幸せではない。彼らにはたくさんお金があるにもかかわらず。

- 44)
- selbst wenn**
- (O
- ₁₁₄
- , -): 仮に~ではあっても (仮定の認容) [even if]

Wir fahren heute nach Düsseldorf, **selbst wenn** wir fünf Stunden brauchen. (O)

私たちは今日デュッセルドルフに行く。たとえ5時間かかるとしても。

- 45)
- auch wenn**
- (O
- ₁₂₁
- , -): 仮に~ではあっても (仮定の認容) [even if]

Auch wenn man mal aneinander vorbei redet. (O)

たとえ互いの話がかみ合わないようなことがあるとしても。

5. 2. 3. 8. 目的

【従属接続詞】

- 46)
- damit**
- (O
- ₃₄₁
- , -): ~するために [so that]

Er räumt auf, **damit** neue Gäste Platz nehmen können. (O)

彼は片付ける。新しく来たお客さんが座れるように。

☆ **um zu + 不定形: ~するために** [in order to] は接続詞ではないが、目的の表現として非常によく用いられる。

Und er fuhr nach Albanien, **um es zu** verstehen. (O)

そして彼はアルバニアに行った。それを理解するために。

5. 2. 3. 9. 陳述内容

【従属接続詞】

- 47) **ob** (O₂₄, T₁₂₈) : ~かどうか [whether, if]

Ich weiß gar nicht, **ob** ich es euch schon erzählt habe. (O)

私は全く覚えていない、それをすでに君たちに話したかどうかを。

- 48) **dass** (O₃₃, T₂₂) : ~こと [that]

Es ist schön, **dass** es dich gibt. (T, p. 205)

君が存在することはすばらしい。

☆ これらのほかに、疑問詞 (wer, was, wann, wo, wie, warum 等) も従属接続詞に準じて用いられる。これについては「戦略と戦術 (2)」203-204 頁に述べた。

5. 2. 3. 10. 様態

5. 2. 3. 10. 1. 手段

【従属接続詞】

- 49) **indem** (O₁₇₆₅, T₇₇₂) : ~することによって [by -ing]

Du kannst deinem Körper helfen, **indem** du Sport treibst. (O)

君は自分の体を助けることができる。スポーツをすることによって。

5. 2. 3. 10. 2. 比較・比例

【従属接続詞】

50) **als** (O₉, -) : ~に比べて [than]

Der gebrochene Arm ist schneller geheilt, **als** sie es sich vorgestellt hat.

(村上, pp.110-111)

負傷した腕は、彼女が思っていたよりもはやく治った。

51) **wie** (O₁₁₁, T₂₈) : ~のように [as]

Aber es läuft ja wohl alles so, **wie** du es willst. (O)

しかしどうやら全てがそのように進んでいるようである、君がそれを望むように。

52) **je + 比較級, desto (umso) + 比較級** (O₂₆₄₉, T₁₉₆₂) : ~すればするほど~
[the 比較級, the 比較級]

Je mehr ich lese, **desto** mehr weiß ich. (T, p.205)

私は読めば読むほど、それだけより多く私は知る。

53) **als ob (wenn) + 接続法Ⅱ式** (O₉, -) : あたかも~であるかのよう [as if]

Es klingt nicht so, **als ob** sie darunter wahnsinnig leiden würde. (O)

それはそのようには聞こえない、あたかも彼女がそのことでとても辛い思いをしているようには。

54) **wie wenn + 接続法Ⅱ式** (O₁₂₁, -) : あたかも~のように [as if]

Das fühlt sich an, **wie wenn** es Metall wäre. (O)

それは感じられる、あたかもそれは金属であるかのようには。

- 55) **je nachdem** (O₁₄₅₀, -) : ~に応じて [according to, depending on]

Je nachdem das Wetter sein wird, werden wir kürzer oder länger bleiben. (独和大辞典, p. 1509)

天気がどうであるかに応じて、私たちの滞在期間は短くも長くもなるだろう。

5. 2. 3. 11. 時間

5. 2. 3. 11. 1. 前時性

前時性とは〈副文の内容が主文の内容より時間的に前の場合〉を指す。(村上, p. 120)

【従属接続詞】

- 56) **als** (-, -) : ~した後で, ~してしまってから [after]

Als die Sonne aufgegangen war, begannen sie mit dem Bergaufstieg. (村上, p. 121)

太陽が昇ってしまってから、彼らは山登りを始めた。

- 57) **wenn** (O₁₂₁, -) : ~した後で, ~してしまってから [after, as soon as]

Wir fangen einfach an, **wenn** du fertig bist. (O)

私たちはさっさと始める。君が終わったら。

- 58) **seit(dem)** (O₃₁₅₃, T₁₈₆₆) : ~した時から [since, since the time when]

Seitdem er den Unfall hatte, fährt er nicht mehr Auto. (村上, p. 123)

彼は事故を起こしてから、もはや車を運転しない。

☆ **seitdem** は副詞として用いられることもある。

Ich bin ihm vor Jahren einmal in Amsterdam begegnet, aber ich habe ihn **seitdem** nicht mehr gesehen. (T, p. 184)

私は彼に何年前に一度アムステルダムで出会った。しかし私はそれ以来彼ともはや会っていない。

- 59) **nachdem** (O₁₄₅₀, T₅₂₇): ~した後に, ~してしまってから [after]
Erst **nachdem** die Prüfung vorbei war, konnte ich etwas essen. (T, p. 205)
試験が終わった後ようやく, 私は何かを食べることができた。

- 60) **sobald** (O₂₅₄₆, T₁₆₀₉): ~するやいなや, ~するとすぐに [as soon as]
Bitte ruf mich an, **sobald** er kommt! (T, p. 205)
私に電話してください。彼が来たらすぐに。

5. 2. 3. 11. 2. 同時性

同時性とは〈副文と主文の内容が同時的である場合〉を指す。(村上, p. 120)

【従属接続詞】

- 61) **als** (O₉, T₂₅): ~した時 (過去における一回限りの出来事) [as, when]
Es war Sonntag Abend, **als** alles anfing. (O)
それは日曜日の夜のことだった。全てが始まったのは。

- 62) **wenn** (-, -): ~する時 (一回性を表す) [when]
Wenn du erst einmal dort bist, wird es dir bestimmt gefallen. (村上, p. 130)
一度行ってみれば, 君はきっとそこが気に入るよ。

☆ wenn は反復を表すこともある。

Wenn es regnete, spielten wir Schach. (ミツヒエル (他), p.177)

雨が降った時は、私たちはいつもチェスをした。

63) **während** (O₄₆₁, -) : ~している間 [while]

Man kann also Musik hören, **während** man E-Mails schreibt. (O)

人々はしながらって音楽を聴くことができる。メールを書く間に。

☆ während は対立を表すこともある。

Immer mehr Menschen werden immer älter, **während** zugleich immer weniger Kinder geboren werden. (O)

ますます多くの人々がますます高齢化する一方で、同時にますます少しの子供しか生まれない。

★ wenn と als の違い

wenn: まず wenn には基本的に2つの大きな意味があります。ひとつは現在や未来のことについて「もし……ならば」という意味で, [...]。もうひとつ wenn には〈過去〉と共に用いられて, 「……した時にはいつでも」の意味もあります。この〈いつでも〉の部分にご注意ください。wenn は英語の *when* と形が似ているので, つい「……した時には」だと思い込んでしまいがちですが, 実際には *whenever* にあたる接続詞なのです。(関口, 1994, p.202)

Wenn er zu mir kam, haben wir immer Schach gespielt.

彼が私のところに来た時には、私たちはいつもチェスをしました。

(関口, 1994, p.202)

als: 一方 als の方は、過去についての〈1 回かぎり〉のことについて「…
…した時には」、英語で言う *when* の意味で用いられます。(関口、
1994, p.202)

Als er gestern zu mir kam, haben wir Schach gespielt.

彼が昨日私のところに来た時に、私たちはチェスをしました。

(関口, 1994, p.202)

5. 2. 3. 11. 3. 後時性

後時性とは〈副文の内容が主文の内容より時間的に後の場合〉を指す。(村
上, p.120)

【従属接続詞】

64) **bevor** (O₁₇₀₉, T₅₄₃): ~する前に [before]

Bevor mein Praktikum losgeht, habe ich eine Woche Ferien. (O)

実習が始まる前に、私は一週間休暇がある。

65) **bis** (O₂₂₄, -): ~するまで [till, until]

Er hat geduldig gewartet, **bis** alle anderen fertig sind. (O)

彼は我慢強く待った。他の全員が準備できるまで。

6. 内容語

内容語は数が多く、習得の対象は広範に及ぶ。そこで学術的テキストを読む
にあたっては、専門用語を知っているだけでは不十分であり、それ以上に問題

となるのが一般の内容語であるという研究結果 (Cohen et al., p. 560) ももつともである。そこで本稿では、内容語の中でも重要度が高いと同時に、特徴が比較的明確で狙いを定めやすい分野固有語彙と準分野固有語彙をまず取り上げ、習得すべき一般内容語の縮減を図ることとする。

6. 1. 分野固有語彙

次のような語や表現が頻出するテキストは、何について書かれたものだろうか。

- ① Durchschnittsalter (平均年齢), Lebenserwartung (平均余命), Geburtenrate (出生率), prognostizieren (予測する), Sterbefälle (死亡件数), Altersstruktur (年齢構成), Zensus (国勢調査), Kinderzahl (子供の数).

これは手許にある人口問題の中でも、日本やドイツ、そして世界のマクロ的な人口動態に関するいくつかのテキストに次々と出てくる語彙である。それでは次のような語彙が多用されるのは人口問題の中でも特にどのような領域であろうか。

- ② Staatsangehörigkeit (国籍), Zuwanderung (人口の流入), Abwanderung (人口の流出), Einbürgerung (帰化, 国籍取得), Herkunftsländer (出身国).

これは „Ausländerzahl in Deutschland 2013 auf Rekordniveau“ (「2013年のドイツの外国人数がこれまでの最高を記録」) (Statistisches Bundesamt: Pressemitteilung Nr. 081 vom 07.03.2014, https://www.destatis.de/DE/PresseService/Presse/Pressemitteilungen/2014/03/PD14_081_12521.html) (2017年2

月12日採録)という表題のもとに、ドイツにおける外国人人口について解説したテキストに出てくる語彙である。外国人人口の推移は、自然的増減よりも社会的増減によるところが大きいことから、このような語彙と遭遇することが多い。しかしここに①のような語彙が出現し、②に①のような語彙が使用される場合もある。あるいは社会学や社会政策、政治学、国際関係論などに関するテキストでも①あるいは②の語彙が出現することは十分に考えられる。したがって、各分野・主題の範囲や分野固有語彙との関係は必ずしも絶対的ではなく、流動的かつ相対的である。しかしこれらの語彙が美術史や認知心理学、物流、園芸などに関するテキストに使用されることは考えにくい。

上で見た〈基本語彙〉とは、分野の枠を超えて〈広く一般的に頻用される〉語彙である。その代表は機能語である。これに対して分野固有語彙は、いわば〈特定分野における基本語彙〉ともいえるものである。これらの語は内容と深く結びついていることからテキスト理解に不可欠の語彙であり、当該分野での出現頻度が高く、習得にあたっては対象を絞りやすい。Nationは「このような専門用語は、通常はテキストの総語数の約5%を占める」(吉田・三根, p.12)としている。5%という数値はともかくとしても、比較的小数の分野固有語彙を優先的、積極的に習得することによって、カバー率は上昇し、内容面からもテキストは理解しやすくなる。またそれに伴う内容的知識の蓄積もテキストの理解を下支えする。これらの相乗効果によって読解の速度と量が増加し、マッシュ効果にもよい影響を及ぼす。

6.2. 準分野固有語彙

準分野固有語彙の代表的一例について Nation は次のように述べている。

英語でアカデミックな勉学を志す第2言語学習者のための非常に重要な特殊化語彙がある。これは *Academic Word List* (Coxhead, 1998) である。

それは、最も頻度数の高い2,000語の英単語の中にはないが、非常に広範囲のアカデミックなテキストで、かなり高い頻度で生じる570語のワード・ファミリーからなる；リストは特定学問領域に限定されない。それは人文科学、法学、自然科学あるいは商学を学ぶ学習者に役立つ単語であることを意味する。アカデミック語彙は、専門用語というよりは、むしろフォーマルな語彙を含んでいるので、時々サブ専門語彙と呼ばれてきた。(吉田・三根, p.18)

具体的には「異なる科目のテキストにも共通する *policy* (政策, 方針), *phase* (曲面, 段階, 相), *adjusted* (調整された, 適応した), *sustained* (持続した, 一様の) など」(吉田・三根, p.12, 訳語筆者), あるいは「*analyse* (分析する), *assess* (査定する, 評価する), *concept* (概念, 考え), *definition* (定義), *establish* (設立する, 確証する), *categories* (部類, 範疇), *seek* (探求する, 探す)」(吉田・三根, p.19, 訳語筆者) といった「書き手がアカデミックな方法でデータを用いて作業するために使用できる」(吉田・三根, p.19) ことばなどである。

その効用として Nation は、学習者が基本語彙 2000 語を習得した後に、それに続く 1000 語を身につけてもカバー率は 4.3% しか上がらないのに対して、*Academic Word List* の語彙を加えると 10% 近く向上することを挙げている (吉田・三根, p.19)。こうしたことから Nation and Hwang は、基本語彙 2000 を習得した後には、これ以下の出現頻度の語彙をさらに続けて学ぶよりも、準分野固有語彙の習得を推奨している (Nation and Hwang, p.40)。

ドイツ語においてもこのようなアカデミック語彙一覧が作成されているかどうかは、筆者が調べた限りでは不明である。しかし語彙力と読解力の向上についてこの考え方自体はきわめて有益である。筆者の経験では、新聞記事などを

読んでみると、情報の出所を挙げるに際して laut ~ (～によれば), nach Angaben ~ (～の述べるところによると), wie ~ mitteilt (～が報ずるように) といった語や表現にしばしば出会う。また人口問題に関するテキストには, durchschnittlich (平均して), im Schnitt (平均して), im Vergleich zum Vorjahr ~ Prozent zunehmen/abnehmen (対前年比 ~ %増加する/減少する), Anteil (割合, 部分), Zahl (数), rückläufig (減退的) といった統計に関係する語彙や表現が頻出する。そして注目すべきは, これらは内容的な必然性から, 人口問題に限らず食糧問題などのテキストでもよく使われることである。こうした点から上の laut, nach Angaben ~, wie ~ mitteilt, あるいは統計関係の語彙や表現なども, 特定分野を超えてある程度広く用いられるという点で準分野固有語彙の一例であるといえよう。

そこで分野固有語彙のみならず, 準分野固有語彙についても, これはと思う語は 6.4. に述べるような形で書き留めるなどして, 自前の語彙集を作り, 積極的に習得する必要がある。その効用は, 準分野固有語彙は分野固有語彙よりも汎用性があり, より広い領域に対応することから, あらたな分野への移行に際しても流用でき, そこでの語彙的負担を減らせることである。

6.3. 特定領域集中型読解法

上に挙げたような特殊化語彙の効用に鑑み, 語彙がまだ乏しい学習者に対する筆者の提案は〈特定領域集中型読解法〉である。これについては「戦略と戦術 (1)」の 259-265 頁で述べたが, 改めて説明する。

上に見たように, 各分野にはそれぞれに固有の重要語がある。また語彙を身に付けるにあたって, 同じ語が何度も繰り返して現れれば習得し易いであろうことは想像に難くない。望月 (他) は先行研究に基づき, 「繰り返すには効果があり, 約 6 回以上テキストの中で使われていれば, 自然に学習できる可能性がある」(望月 (他), p.96) としている。しかし同じ内容語に 6 回以上出会う

ためには相当の分量を読まなくてはならない。また間隔が開くことによって繰り返しの効果も低減する。そこで「[...] 繰り返し効果が期待できない場合、つまりその単語が繰り返し出てこない場合は、何らかの工夫をして学習者が繰り返し接する機会を保障することが必要」(望月(他), p.96)ということになる。

これらのことを考え合わせるならば、読解力と語彙力向上のために考えられる一つの方策は、あれこれの分野を少しずつ〈つまみ食い〉するのではなく、料理、サッカー、鉄道、美術、人口問題、食糧問題など自分が内容的によく知っている、あるいは関心が強い分野を対象を絞り、これに関するテキストを一定期間集中的、連続的に読むことである。その利点は次のとおりである。

- 1) テキスト内容についての関心や知識の増大が内容理解を支援する。これによってことばにかかる負荷が軽減され、未知語推測の助けとなる。その結果〈(内容的)知識〉の活用によって自力で〈ことば〉を獲得する可能性が拡大する。
- 2) 特定分野に関するテキストを集中して読むことによって分野固有語彙をはじめとする同一語の出現可能性が高まる。その結果、語彙が記憶に残りやすく習得が進む。
- 3) 1)と2)により、辞書への依存度が下がる。これによって読む速度が上がり、一定時間内により多く読むことが可能となる。そしてこのことによる内容的知識の拡大が1)と2)をさらに促進する。
- 4) 1)と2)そして3)を通じて特殊化語彙の習得が進むことによって、テキスト内の既知語の割合が高まり、これを手がかりに、一般内容語の意味内容も

推測しやすくなる。

- 5) 4)はまた3)を促進し、語彙の拡大と読解力の向上を促進する。

自分が読もうとする分野についての専門辞書や語彙集のようなものがある場合には、必要と思われる語彙を事前に身に付けてから読むのも一法である。これによってカバー率が向上し、読みやすくなる。しかしそのような辞書類が存在しない場合には、分野固有語彙は基本的に自ら収集、蓄積する必要がある。こうしてテキストから自力で獲得した語彙を順次投入しながら新たなテキストを読み進めることによって、読解作業は内容と語彙の両面から容易化する。その結果として徐々に読解力が形成されるとともに、語彙も拡大・強化される。Hwang and Nation は、同じ新聞記事でも、内容的に連続する複数の記事と、互いに無関係な複数の記事を読んだ場合では、前者の方が語彙の習得に有利であることを実証している (Hwang and Nation, pp. 326-333)。

こうしてある領域について読み慣れたら、内容的な関係性と特殊化語彙をはじめとする言語的な重なりを利用しつつ、読む領域を少しずつずらしてゆく。これによって、特定領域に限定されない語彙力・読解力が徐々に形成される。こうした点からも、語彙力の向上はテキストを読むことを通じた〈自力更生〉路線で行うことが有益である。なぜならば、自分が読むテキストでよく使われる語は、上に見た〈基本語彙集〉などへの採録の有無を問わず重要語であることは確かであり、習得が不可欠だからである。

6. 4. 特殊化語彙の整理と習得

テキストから収集した語彙は、各語の頭文字別に A から Z まで〈単語帳〉に整理してゆくという方法がよく行われる。しかしこれは、きれいに整った単語帳を作ることが往々にして自己目的化しがちであることに加えて、各語の使

用分野や相互の関連性などが分断されるなどの点で問題が多い。〈3.9. 造語法活用にあたっての注意〉のところで、各語を語源や造語面から語親族の中で互いに関連付けて理解し記憶すべき旨を述べた。これと同様に、内容や使用という面においても関連する語はまとめて習得することが語彙の習得と使用の理に適っており、鉄則である。そこでとりわけ特殊化語彙などについて有益なのは、一例として次のような方法である。

以下は、私が留学時代に実践した表現ノートの作り方の例である。新聞や雑誌を読む際、私はいつも何本かの色の異なるマーカーを用意していた。そして、知らない単語や面白い表現を見つけると、ジャンル別にチェックしていった。たとえば、サッカー記事であれば、サッカーに関する用語は緑、サッカーだけでなく、スポーツ一般で用いられる「三対二で勝つ」などの表現は青、選手をほめたり、けなしたりする表現は赤、日常会話でも使えそうな便利な表現は茶色、といった具合に、記事のテーマと内容により、マーカーの色を使い分けてゆくのである。終わると、A4サイズのルーズリーフノートに、それぞれ項目別に単語帳を作ってゆくのである。

横書きのノートは左上から始まって右に進み、だんだん下に下がって、最後は右下で終わる、と思い込んでいる人は線的思考の左脳人間である。右脳は空間認知の世界で、ノートなどどこから書き始めたってかまわない。私は真ん中にまず大きな丸を書き、その中に「サッカー表現」と太く書く。最初に昨日の試合でのゴールキーパーの活躍が紹介されていると、たとえば右上あたりに「ゴールキーパー」と書いて、それを丸でかこみ、その周囲に、キーパーがするいろいろなことのドイツ語表現を、記事から抜き出してリストアップしてゆく。マーカーの入った単語が攻撃側の表現になれば、今度は別のあいた場所に同じようなコーナーを作る。一回でサッカーに必要なすべての表現がリストアップできるわけもないが、とり

あえずはサッカーというファイルを作っただけでよい。次からサッカー記事を読むときには、いつでもこのファイルを手元においておけば辞書を引く手間も省けるし、新しい表現を見つけたら、追加すればよい。

こうしたファイルを作る作業は、ただ試験用に単語帳に記入するのと違って楽しいとりあえずは自分が興味のあるテーマについてのテキストを読み、こうしたファイルを作ってみるとよい。集めた表現がノートの一ページを埋め尽くす頃には、この紙さえあれば、そのテーマについて話をしたり、書いたり、聞き取ったりということが格段に楽にできるようになる。そのうちに、別のファイルも作ってみたくなる。いつもは退屈に思っていた学校の英語の教科書だって、というより、教科書だからこそ、こうした表現の宝庫だということが理解できてくる。日本人の先生方が作った今の英語の教科書はよく出来ている。基礎単語の選択もきちんとなされていて、母国語話者が書いたスポーツ新聞記事では、同じホームランでも、「叩き込む、放り込む、あびせる」などさまざまな表現を使いこなし、またそれがよきジャーナリストの使命でもあるのだが、教科書ではホームランはまず「打つ (hit)」であり、基本的にはそれだけで十分なのである。(関口, 2000, pp.166-167)

もとよりこれをこのとおりに行う必要はない。どのような学習のしかたが合うかは個人によって異なるので、各自で自分にあった方法を工夫する必要がある。

書いたり話したりする場合には、語彙は自分が主導権をとって選択することができる。そこで関口の述べるように〈ホームランはまず「打つ (hit)」であり、基本的にはそれだけで十分なのである〉で済むであろう。しかし読む場合には、語彙や表現は書き手まかせである上に、関口も指摘するように、書き手は同語の繰り返しを回避したり、文体やレトリックに工夫を凝らしたりなどもする。

そこでこれらに対応するためには、類義語や言い換え表現なども順次習得してゆかなければならない。しかしまさにそうであればこそ、関口の推奨する方法は有効であろう。なぜならば、「打つ (hit)」を中心として、「叩き込む、放り込む、あびせる」などさまざまな表現をその周囲に採録し、まとめて互いに関連付けて習得することによって語彙・表現の幅と厚みが増すからである。

6. 5. 特殊化語彙の一般的語彙への還元

〈Haushalt (世帯)〉は Okamura et al. には採録されていない一方、Tschirner の基本語彙集では出現順位 1047 位として収載されている。しかしこれは人口問題、とりわけ家族形態などに関するテキストではよく見かける語であり、分野固有語彙であるともいえる。このように分野固有語彙と基本語彙あるいは一般内容語は互いに重なることもある。しかし分野固有語彙は比較的狭い領域でしか使用されないことから、128 頁の①、②に挙げた人口問題関係の語彙は Okamura et al. と Tschirner の基本語彙集にはそれぞれ自体の形ではいずれも採録されていない。しかし合成語や派生語の場合、これを構成する各部分の語は日常的に用いられる内容語、それも基本語彙であることが少なくない。そこで特殊化語彙の習得に際しては、ただ丸暗記するのではなく、これを分解し、基本語彙や一般内容語に還元し、あるいは英語の対応語と関連付けて理解、記憶することを勧める。こうした努力を通じて両者の間につながりを生むことは、基本語彙や一般的内容語の拡充にも役立つ。

Durchschnittsalter (平均年齢) は、Durchschnitt (平均) + Alter (年齢) でできている。Durchschnitt は Tschirner のうわのせ語彙にしか採録されていない一方、Alter は岡村 (他) と Tschirner の基本語彙に収載されている。Lebenserwartung は Leben (生命) + Erwartung ← erwarten (待ち受ける) であり、いずれも両語彙集に採録されている。Geburtenrate は Geburt (出生) + Rate (率, 割合) である。Rate はいずれにも掲載されていないが、Geburt

は採録されている。それよりも Geburtstag (誕生日) を知っているならば、その Geburt であることに気づく必要がある。prognostizieren (予測する) は名詞の Prognose が Tschirner のうわのせ語彙に採録されているだけである。しかしこの両語は知らずとも、英語の prognosticate、あるいは名詞の prognosis、形容詞の prognostic なら知っているという場合も少なくないであろう。語形と前後関係などから英語との関係に気付けば、未知語を一つ減らし、辞書を引く時間と労力を節減することができる。Sterbefälle (死亡, 死亡件数) は sterben (死ぬ) と Fall (場合, 事例) であり、いずれも両者に掲載されている。Altersstruktur (年齢構成) の Alter は先ほどの Durchschnittsalter の Alter であり、Struktur は英語の structure、カタカナ語のストラクチャーである。いずれも両語彙集に採録されている。そして僅かにこれだけの中でも Alter が繰り返し出現するように、一つの語が他の語の一部として反復出現するのも珍しいことではない。

準分野固有語彙についても同じである。先ほどの統計関係の rückläufig も rück + laufen + ig である。rück は〈元へ, 後方へ〉などを意味する接頭語であり、Rückgang (後退), Rückkehr (帰還) などといった形でよく用いられる。laufen は〈走る, 歩く, 進展する〉を意味する動詞、-ig は形容詞を作るときによく用いられる接尾辞で〈~のような〉を表し、全体として〈後ろに進む的な〉といった内容を表す。rückläufig は岡村 (他) と Tschirner のいずれにも掲載されていない一方、laufen はともに採録されている。

こうして語の汎用性と稼働率を向上させることは、少ない手持ちの語彙で何かテキストを理解するために必須の条件である。

6.6. 一般内容語

一般内容語の最大の特徴は、分野固有語彙のようなとらえどころがなく、何が出て来るか予想がつきにくいのに反して量が膨大であることである。英語の

テキスト理解に必要なカバー率と語数について Nation が Brown Corpus を例として挙げている Table 1.5 (85 頁) を見ると、僅かに 2000 語でカバー率は 79.7% に達する。しかし 6000 語のカバー率は 89.9% に過ぎない。すなわち、基本の 2000 語にさらに 4000 語を追加しても、カバー率はわずかに 10% ほどしか上がらず、その間の伸び率も次第に鈍化する。Nation は「未知語からの妨害をほとんど受けずに読むためには、言語使用者はおそらく 15,000~20,000 語の語彙が必要である」(吉田・三根, p. 22) としている。この意見に従うならば、6000 語から 15000 語の水準に到達するためには、出現頻度が逡減する中でさらに約 9000 語を習得しなければならない。

これについては、8. の (2) で述べるように、正確には英語との造語法の違いなどの要素も考慮しなければならない。しかし基本的事情はドイツ語も同じである。Jones が Herder/BYU-Korpus 中の 4 万語を使って調査した結果を示す Table 3 (92 頁) の中で、本稿が読む対象として想定する人口問題などのテキストに近いと思われる Newspaper と Academic について計算してみると、最初の 1000 語から 2000 語までの伸び率は平均して 7.15% であるのに対して、2000 語から 3000 語までは 4.4% と急激に低下する。そして 3000 語段階での平均カバー率は 76.25% であり、約 25% の未知語が残る。これを 20% 引き上げて約 95% のカバー率にするためには、1000 語ごとに 4.4% ずつカバー率が上昇するとしても、約 4000 語が追加的に必要である。しかし実際にはカバー率の上昇が逡減することを考えるならば、さらに多くの語彙を習得しなければならない。

Nation, Nation and Hwang などが、出現頻度の高い 2000 語程度をまず習得した後には一般語彙よりも特殊化語彙の優先的習得を勧める理由は上に述べたような事情である。しかしこの 2000 語程度の基本語彙に採録されている語の顔ぶれは、出現頻度調査に使用したコーパスの違いなどによって異なる。とりわけこの 2000 語と、出現頻度がこれ以下の一般内容語との境界線前後では

互いの語が入れ替わることは十分にありうる。したがって、基本語彙とそれに続く一般内容語の間に明確な一線を引くことは困難である。そこで Jones が大学での標準的な勉強に必要な閾値とする約 3000 語 (Jones 2006, p. 120) ないしは Jones and Tschirner の〈うわのせ語彙〉程度まで (約 4000 語) を広義の基本語彙と考えれば、比較的重要な一般内容語はこれでかなり捕捉できよう。

しかし出現頻度がこれ以下の語彙については、上に見たように、習得の〈費用対効果〉が低下する。このことを考えるならば、これらの語は次に述べる〈低頻度語〉に含めて対処すべきであろう。むしろ必要なのは、基本語彙 2000 や特殊化語彙の優先的習得と造語法や英語語彙の活用などによって未知語を包囲し、道を切り開く技能を磨くことである。

6.7. 低頻度語

基本語彙と一般内容語の区別が流動的であるように、一般内容語と低頻度語の境界も明確ではない。しかし低頻度語は稀にしか出現しないことを考えると、これに積極的に対処しても労多くして実りは少ないであろう。Liu and Nation は、低頻度でしか用いられない語は、それ自体を学ぶことに時間を費やすには値せず、コンテキストから得られる手掛かりによってその意味内容を推測する方が得策であるとしている (Liu and Nation, p. 33)。筆者も同意見である。無視しても差し支えないものは無視し、意味内容が推測できるものは推測し、これらで対処できず、なおかつテキスト内容の理解に不可欠な場合は堂々と辞書を引けばよいであろう。辞書はこうした語のためのものである。

7. 実例

最後に、Okamura et al. の基礎語彙と、Tschirner の基本語彙、うわのせ語彙を実際のテキストと対照してみたい。しかしこれは、語親族に基づくなどし

てカバー率を厳密に計算することを企図してのものではない。ここで目標とするのは第一に、単純に延べ語数 (token) で見て、それぞれどの程度の語彙が捕捉されるかのおおよそを知ることである。そして第二に、これによって捕捉される語とされない語の実際を知り、語彙学習に際して配慮すべき点を探ることである。使用したテキストは次のとおりである。

- (1) 2015 年度秋期 独検 (ドイツ語技能検定試験) 3 級の長文読解問題
- (2) 2015 年度秋期 独検 2 級の長文読解問題
- (3) 2016 年度秋学期 早稲田大学商学部「ドイツ語Ⅱ総合」の統一教材テキストの一つ
- (4) 2016 年度春学期 早稲田大学商学部「ドイツ語Ⅱ選択 (上級) ドイツ語読解法」の教材テキストの一つ

ドイツ語の語彙は、動詞から過去分詞が形成され、それが形容詞ないしは副詞として用いられ、さらに名詞化されるなど様々に変化することが多い。そして Okamura et al. と Tschirner では基本語彙選定に際しての Lemma 化の方式や、変化した語の記載法なども異なると考えられる。ここでは作業にあたり次のような基準を用いた。

- (1) 地名 (Hamburg) およびそれに由来する形容詞 (Hamburger) はそれぞれの形での採録の有無を調べた。
- (2) 形容詞・副詞の比較級・最上級は、規則変化については原級の採録を、不規則変化の場合は当該の形 (mehr, lieber, besser 等) での採録の有無を調べた。
- (3) 現在分詞, 過去分詞は, その元となる不定形が採録されているかを調べた。
- (4) 形容詞, 現在分詞, 過去分詞の名詞化は当該の形で (Deutsche, Reisende

等) 採録されているかを調べた。

- (5) 統語的転換によって動詞から形成される名詞 (reisen → Reisen) は別語とした。
- (6) 延べ語数は「Word」の「文字カウント」に基づく。ただし分離動詞と人名の姓 + 名, 〈10 000〉のような数字表記は一語と見なして捕捉率計算上の語数を算出した。

それぞれのテキストについて、まず Okamura et al. の基礎語彙への採録の有無を調べた。採録されていない語には通し番号を振り (1 norddeutsche) のように表示した。次に Tschirner の基本語彙とうわのせ語彙への採録を調べた。Okamura et al. の基礎語彙と数を合わせるために、出現頻度の1位~2084位の語を基本語彙とし、2085位から4034位までをうわのせ語彙とした。これに際して、Okamura et al. に採録されていない一方、Tschirner の基本語彙に採録されている語は**太字**とし、うわのせ語彙として採録されている場合は**斜体太字**で表示した。Okamura et al. に収載されているのに対して、Tschirner ではうわのせ語彙とされている語や、Okamura et al. には採録されていない一方、Tschirner では基本語彙に収載されている語も存在する。しかしこれらについては煩雑を避けるため、その旨の表示は行わなかった。

7. 1. 独検3級・〈ハンブルク〉

独検3級の概要と前提とする語彙数、ヨーロッパ言語共通参照枠とのおおよその対応について必要と思われる箇所を以下に抜粋する。なお独検では読むことのみならず、〈書く〉要素を含んだ出題も行われるため、語彙数は受容的語彙のみならず、発表語彙も含むと考えられる。

3級 (Grundstufe) A2

ドイツ語の初級文法全般にわたる知識を前提に、簡単な会話や文章が理解できる。

基本的なドイツ語を理解し、ほとんどの身近な場面に対応できる。

簡単な内容のコラムや記事などの文章を読むことができる。

対象は、ドイツ語の授業を約 120 時間（90 分授業 80 回）以上受講しているか、これと同じ程度の学習経験のある人。 **語彙 2000 語**

（公益財団法人ドイツ語学文学振興会、各級のレベルと内容、太字筆者）

なお Tschirner では、約 2000 語の基本語彙は A1 - B1 に対応し、うわのせ語彙をさらに約 2000 語加えて B2 に対応するとされている（Tschirner, 裏表紙）。

7. 1. 1. Okamura et al. による場合

Die (1 norddeutsche) Stadt (2 Hamburg) ist mit (3 ca.) 1,7 Millionen Einwohnern eine der größten Städte Deutschlands und hat viele (4 Sehenswürdigkeiten), die bei (5 Touristen) aus aller Welt beliebt sind. Berühmt sind (6 z.B.) der (7 Alstersee), der (8 Fischmarkt), die (9 Speicherstadt) und die Kirche (10 St. Michaelis). Das besondere (11 Kennzeichen) dieser Stadt ist aber der (12 Hafen), der am Fluss (13 Elbe) liegt. Der größte (14 Hafen) Europas ist der (15 Hafen) in (16 Rotterdam). Der (17 Hamburger) (18 Hafen) belegt Platz (19 zwei). Mehr als 10 000 (20 Containerschiffe) pro Jahr (21-1 kommen) in der (22 norddeutschen) (23 Großstadt) (21-2 an), außerdem noch viele (24 Passagierschiffe).

Schon seit dem 9. Jahrhundert gibt es einen (25 Hafen) in (26 Hamburg). Die Geschichte des (27 Hamburger) (28 Hafens) ist also schon sehr lang. Bis zum 7. Mai 1189 mussten aber die Schiffe Geld bezahlen, um Waren auf der (29 Elbe)

zu transportieren. Danach gab es für die (30 Schiffahrt) auf der (31 Elbe) einen großen (32 Boom), (33 sodass) die (34 Hamburger) dieses Datum als die (35 Geburtsstunde) des (36 Hafens) betrachten. Heute feiern sie jedes Jahr am Wochenende um den 7. Mai (37 Hafengeburtstag). [延べ語数 161/計算上は 159] (公益財団法人ドイツ語学文学振興会, 〈5級・4級・3級〉, p. 163)

計算上の語数 159 に対して非採録語は 37 であることから捕捉率は約 77% である。このテキストの内容は港湾都市ハンブルクの紹介である。したがって短いテキスト中に Hamburg, Elbe, Alstersee, Fischmarkt, Speicherstadt, St. Michaelis あるいは Rotterdam などといった固有名詞が多い。

合成語の捕捉が少ない一方、これを構成し、あるいは関連する次の語は採録されており、そこから語意味の推測が可能な場合も少なくない。番号は初出についてのみを挙げる。

- (1) norddeutsch (北ドイツの) : Norden (北) + deutsch (ドイツの)
- (20) Containerschiff (コンテナ船) : Schiff (船)
- (23) Großstadt (大都市) : groß (大きい) + Stadt (都市)
- (24) Passagierschif (客船) : Schiff (船)
- (30) Schiffahrt (船舶航行) : Schiff (船) + Fahrt ((乗り物での) 旅行)
- (35) Geburtsstunde (誕生の時) : Geburt (誕生) + Stunde (時間)
- (37) Hafengeburtstag (港の誕生日) : Geburtstag (誕生日 ← Geburt + Tag)

Container と Boom は英語/カタカナ語であり、推測は容易であろう。これに対して (4) の Sehenswürdigkeiten と (11) の Kennzeichen は sehen|s|würdig|keit|en, Kenn ← kennen|zeichen と分解できても、そこから意味内容を類推することは容易ではないであろう。

7. 1. 2. Okamura et al. と Tschirner による場合

Die (1 norddeutsche) Stadt (2 Hamburg) ist mit (3 ea) 1,7 Millionen Einwohnern eine der größten Städte Deutschlands und hat viele (4 Sehenswürdigkeiten), die bei **Touristen** aus aller Welt beliebt sind. Berühmt sind (5 z.B.) der (6 Alstersee), der (7 Fischmarkt), die (8 Speicherstadt) und die Kirche (9 St. Michaelis). Das besondere (10 Kennzeichen) dieser Stadt ist aber der **Hafen**, der am Fluss (11 Elbe) liegt. Der größte **Hafen** Europas ist der **Hafen** in (12 Rotterdam). Der **Hamburger Hafen** belegt Platz **zwei**. Mehr als 10 000 (13 Containerseiffe) pro Jahr **kommen** in der (14 norddeutschen) **Großstadt an**, außerdem noch viele (15 Passagierschiffe).

Schon seit dem 9. Jahrhundert gibt es einen **Hafen** in (16 Hamburg). Die Geschichte des **Hamburger Hafens** ist also schon sehr lang. Bis zum 7. Mai 1189 mussten aber die Schiffe Geld bezahlen, um Waren auf der (17 Elbe) zu transportieren. Danach gab es für die (18 Schifffahrt) auf der (19 Elbe) einen großen (20 Boom), sodass die **Hamburger** dieses Datum als die (21 Geburtsstunde) des **Hafens** betrachten. Heute feiern sie jedes Jahr am Wochenende um den 7. Mai (22 Hafengeburtstag). [延べ語数 161 / 計算上は 159] (公益財団法人ドイツ語学文学振興会, 〈5 級・4 級・3 級〉, p. 163)

Okamura et al. によっては捕捉されない 37 語中 4 が Tschirner の基本語彙によって, 11 がうわのせ語彙によって捕捉される。本文中に 7 回も反復出現する Hafen がうわのせ語彙によって補足されることもあり, 捕捉率は両者合わせて約 86% に向上する。

内容：

北ドイツの街ハンブルクは, 約 170 万の人口を有するドイツの最も大きな街

のうちのひとつで、世界中の観光客に人気のある名所がたくさんある。有名なのはたとえば、アルスター湖、魚市場、シュバイヒャーシュタット（倉庫街）、そして聖ミヒャエル教会である。だが、この街をとりわけ特徴づけているのは、エルベ川沿いに位置する港だ。ヨーロッパ最大の港はロッテルダム港である。ハンブルク港は第2位の座を占めている。年間1万隻を超えるコンテナ船がこの北ドイツの大都市にやってくる。それに加えて多くの客船も。

すでに9世紀からハンブルクには港がある。だから、ハンブルク港の歴史はとても長い。しかし、1189年5月7日までは、エルベ川で物資を輸送するためには、船はお金を払わなければならなかった。その後、エルベ川を航行する船が非常に増え、ハンブルクの人たちは、この日にちを、ハンブルク港が誕生した日と見なすようになった。今日のハンブルクでは、毎年5月7日前後の週末に港の誕生日を祝う。(公益財団法人ドイツ語学文学振興会、〈5級・4級・3級〉, pp.180-181)

7.2. 独検2級・〈ドイツ人と旅行〉

独検2級の概要と前提とする語彙数、ヨーロッパ言語共通参照枠とのおおよその対応は次のとおりである。本稿にとって必要と思われる箇所を抜粋する。

2級 (Mittelstufe) B1

ドイツ語の文法や語彙についての十分な知識を前提に、日常生活に必要な会話や社会生活で出会う文章が理解できる。

やや長めの文章の主旨を理解し、内容についての質問に答えることができる。

対象は、ドイツ語の授業を約180時間(90分授業で120回)以上受講しているか、これと同じ程度の学習経験のある人。語彙3000語

(公益財団法人ドイツ語学文学振興会、各級のレベルと内容、太字筆者)

7. 2. 1. Okamura et al. による場合

Die Deutschen reisen sehr gern; je weiter, (1 desto) (2 lieber). Insgesamt (3-1 gaben) (4 Reisende) aus Deutschland im Jahr 2012 knapp 64 Milliarden Euro im Ausland (3-2 aus), das wäre ein Jahr zuvor noch (5 Weltrekord) gewesen. Das (6 Gegenstück) zu diesem (7 Ferntourismus) ist eine (8 ausgeprägte) deutsche (9 Wanderlust). „Der Zweck des (10 Reisens) ist, zum Ziel zu kommen, der Sinn des (11 Wanderns) ist, unterwegs zu sein“, hat der erste (12 Bundespräsident) (13 Theodor Heuss) einmal gesagt, und auch dieses (14 Unterwegssein) liegt vielen Deutschen offenbar im Blut. Rund die Hälfte aller erwachsenen (15 Bundesbürger), so die „Gesellschaft für (16 Freizeit)“, wandern mehr oder weniger regelmäßig. Laut Institut der deutschen Wirtschaft (17-1 lassen) sogar (18 zwei) (19 Drittel) aller Deutschen über 18 bei ihren (20 Welterkundungen) gerne einmal das Auto (17-2 stehen). Am wichtigsten sind den (21 Wanderern) dabei eine schöne (22 Landschaft) und eine weite Aussicht. An (23 dritter) Stelle folgen (24 verlässliche) (25 Wegweiser).

Die typisch deutsche (26 Reise-) und (27 Wanderlust) (28 kontrastiert) auf den ersten Blick ganz seltsam mit einer ebenso typisch deutschen (29 Heimatverbundenheit). Ein Amerikaner (30-1 zieht) in seinem Leben durchschnittlich (31 vierzehnmal) (30-2 um), ein Engländer (32 achtmal), ein (33 Japaner) (34 fünfmal), ein Deutscher (35 dreimal). Und nur, wenn es nicht zu vermeiden ist. Das (36 ZDF) (37 kommentiert), über die Hälfte aller Deutschen glaubt, das Thema „Heimat“ werde in den (38 nächsten) Jahren an Bedeutung weiter wachsen.

Vor allem ausländischen (39 Besuchern) (40-1 fällt) diese (41 Heimatverbundenheit) der Deutschen (40-2 auf). Der russische (42 Schriftsteller) (43 Vladimir Kaminer) (44-1 fasst) seine Eindrücke wie folgt (44-2 zusammen) (die

er mit dem (45 Vorurteil) begonnen hatte, dass auch in Deutschland, wie in seiner eigenen Heimat Russland, alle nur das eine wollten: weg aus ihrem Dorf). „Inzwischen weiß ich, dass die Menschen in Deutschland ihren (46 Wohnsitz), wo immer er auch sei, über alles lieben und sich ein glückliches Leben (47 woanders) gar nicht vorstellen können.“

Genau dieser Umstand, dass sich viele Deutsche „ein glückliches Leben (48 woanders) gar nicht vorstellen können“, erklärt vielleicht dann auch die typisch deutsche (49 Reiselust). „Erst die (50 Fremde) lehrt uns, was wir an der Heimat besitzen“, schrieb schon (51 Theodor Fontane). Wem es (52 gleichgültig) ist, wo er lebt, hat auch keine Lust, im Urlaub (53 wegzufahren); die typisch deutsche (54 Heimatverbundenheit) ist also (55 geradezu) ein (56 Antrieb), zur (57 Abwechslung) auch einmal andere Regionen dieser Erde (58 aufzusuchen). [延べ語数 344 / 計算上は 336] (公益財団法人ドイツ語学文学振興会, 〈2 級, 準 1 級, 1 級〉, p. 42)

- * 第一段落の下から二行目の〈Aussicht〉は、問題文では設問のために空所であるが、ここではこれを補った。また設問用に三ヶ所に施されている下線は削除した。

延べ語数 344 に対し、人名と分離動詞を一語と見なすことにより、計算上の延べ語数は 336 語である。一方非捕捉語の延べ数は 58 であることから捕捉率は約 83% である。一読して 3 級の〈ハンブルク〉よりも明らかに難度が高いのに対して、7.1.1. と比較して捕捉率はこちらのほうが高いのは意外でもある。その理由の一つとして考えられるのは、〈ハンブルク〉では地名などの固有名詞が多く含まれているうえに、基礎語彙では捕捉されない Hafen が反復出現することである。しかし同テキストがハンブルクの地理と歴史についての概略

的紹介であり、各文が短く単純であるのに対して、こちらはドイツ人の遠方への旅行好きと故郷志向の強さという相反する性癖についての考察であることから、内容は抽象的、思弁的であり、一文が長く、込み入っていることが難度に影響していると考えられる。非採録語中の合成語と分離動詞に関連するものとしては次の語が採録されている。

- (5) Weltrekord (世界記録) : Welt (世界)
- (6) Gegenstück (対をなすもの) : gegen (〜に逆らって) + Stück (一部分)
- (7) Ferntourismus (遠くへの旅行) : fern (遠い)
- (9) Wanderlust (徒歩旅行への欲求) : wandern (歩き回る) + Lust (欲求)
- (11) Wanderns (徒歩旅行) : wandern (歩き回る)
- (12) Bundespräsident (連邦大統領) : Bund (連邦) + Präsident (大統領)
- (15) Bundesbürger (連邦市民) : Bund (連邦) + Bürger (市民)
- (16) Freizeit (自由時間) : frei (自由な) + Zeit (時間)
- (20) Welterkundungen (世界探索) : Welt (世界)
- (21) Wanderern (徒歩旅行者) : wandern (歩き回る)
- (25) Wegweiser (ガイドブック) : Weg (道) + weisen (指し示す)
- (26) Reiselust (旅行への欲求) : Reise (旅行) + Lust (欲求)
- (31) vierzehnmal (十四回) : mal (回, 度)
- (32) achtmal (八回) : mal (回, 度)
- (33) Japaner (日本人) : Japan (日本)
- (34) fünfmal (五回) : mal (回, 度)
- (35) Besuchern (来訪者) : besuchen (訪れる)
- (44) zusammenfassen (まとめる) : zusammen (一緒に)
- (45) Vorurteil (先入観) : vor (〜の前に) + Urteil (判断)
- (46) Wohnsitz (居住地) : wohnen (住む) + Sitz (所在地)

- (53) wegzufahren (よそへ行く) : weg (～から離れて) + fahren (乗り物で行く)

これに加えて (4) Welt|rekord の Rekord と (6) Fern|tourismus の Tourismus は英語／カタカナ語から理解が可能であろう。一方ここで注意が必要なのは (13) Unterweg|s|sein (旅の途次にあること) という合接と (27) Heimat|verbunden|heit (故郷と〔精神的に〕結ばれていること) という共成による造語である。前者は第一段落六行目の unterwegs zu sein との関係に気が付けば理解可能であろう。しかし後者は、このテキストには出現しない verbinden に思い至らなければ理解は困難であろう。ちなみに verbinden は基礎語彙に採録されている。両語は「**即席造語 Augenblicksbildung / Ad-hoc-bildung**」(野入・太城, p.92) と呼ばれるものである。これは「あるテキスト内で新出した事物や事態を端的に表現する必要性から形成された、その場限りの語」(野入・太城, p.92) であり、辞書には通常収載されていない。そこでその理解には造語についての知識と感覚が不可欠である。

7. 2. 2. Okamura et al. と Tschirner による場合

Die Deutschen reisen sehr gern; je weiter, **desto lieber**. Insgesamt **gaben** (1 Reisende) **aus** Deutschland im Jahr 2012 knapp 64 Milliarden Euro im Ausland aus, das wäre ein Jahr zuvor noch (2 **Weltrekord**) gewesen. Das (3 Gegenstück) zu diesem (4 **Ferntourismus**) ist eine **ausgeprägte** deutsche (5 **Wanderlust**). „Der Zweck des (6 **Reisens**) ist, zum Ziel zu kommen, der Sinn des (7 **Wanderns**) ist, unterwegs zu sein“, hat der erste (8 **Bundespräsident**) (9 **Theodor Heuss**) einmal gesagt, und auch dieses (10 **Unterwegssein**) liegt vielen Deutschen offenbar im Blut. Rund die Hälfte aller erwachsenen (11 **Bundesbürger**), so die „Gesellschaft für **Freizeit**“, wandern mehr oder weni-

ger regelmäßig. Laut Institut der deutschen Wirtschaft (12-1 lassen) sogar **zwei Drittel** aller Deutschen über 18 bei ihren (13 Welterkundungen) gerne einmal das Auto (12-2 stehen). Am wichtigsten sind den (14 Wanderern) dabei eine schöne **Landschaft** und eine weite Aussicht. An (15 dritter) Stelle folgen (16 verlässliche) (17 Wegweiser).

Die typisch deutsche (18 Reise-) und (19 Wanderlust) (20 kontrastiert) auf den ersten Blick ganz seltsam mit einer ebenso typisch deutschen (21 Heimatverbundenheit). Ein Amerikaner (22-1 zieht) in seinem Leben durchschnittlich (23 vierzehnmal) (22-2 um), ein Engländer (24 achtmal), ein (25 Japaner) (26 fünfmal), ein Deutscher **dreimal**. Und nur, wenn es nicht zu vermeiden ist. Das (27 ZDF) **kommentiert**, über die Hälfte aller Deutschen glaubt, das Thema „Heimat“ werde in den **nächsten** Jahren an Bedeutung weiter wachsen.

Vor allem ausländischen **Besuchern fällt** diese (28 Heimatverbundenheit) der Deutschen **auf**. Der russische **Schriftsteller** (29 Vladimir Kaminer) **fasst** seine Eindrücke wie folgt **zusammen** (die er mit dem (30 Vorurteil) begonnen hatte, dass auch in Deutschland, wie in seiner eigenen Heimat Russland, alle nur das eine wollten: weg aus ihrem Dorf). „Inzwischen weiß ich, dass die Menschen in Deutschland ihren (31 Wohnsitz), wo immer er auch sei, über alles lieben und sich ein glückliches Leben (32 woanders) gar nicht vorstellen können.“

Genau dieser Umstand, dass sich viele Deutsche „ein glückliches Leben (33 woanders) gar nicht vorstellen können“, erklärt vielleicht dann auch die typisch deutsche (34 Reiselust). „Erst die (35 Fremde) lehrt uns, was wir an der Heimat besitzen“, schrieb schon (36 Theodor Fontane). Wem es (37 gleichgültig) ist, wo er lebt, hat auch keine Lust, im Urlaub (38 wegzufahren); die

typisch deutsche (39 Heimatverbundenheit) ist also **geradezu** ein (40 Antrieb), zur (41 Abwechslung) auch einmal andere Regionen dieser Erde **aufzusuchen**. [延べ語数 344 / 計算上は 336] (公益財団法人ドイツ語学文学振興会, <2 級, 準 1 級, 1 級>, p.42)

Tschirner の基本語彙 12 とうわのせ語彙 5 が加わることによって、非捕捉語は 41 に減少する。その結果、捕捉率は約 88% に向上する。

(1) Reisende (旅する人), (6) Reisens (旅すること), (7) Wanderns (歩き回ること), (14) Wanderern (歩き回る人たち) はうわのせ語彙にも採録されていない。しかし (1) と (6) の元になっているのは *reisen*, (7) と (14) は *wandern* という動詞であり、いずれも基礎語彙に採録されている。そこで (1) が *reisen* の現在分詞 *reisend* (旅しつつある) の名詞形, (6) と (7) は動詞の不定形をそのままの形で名詞化する〈統語的転換〉であり, (14) は〈～する人〉を表す *-ig* による派生語であることが見抜ければこれらの四語も基礎語彙で捕捉が可能である。

内容：

ドイツ人は旅行をするのがとても好きだ。旅先が遠い場所であればあるほど、いっそう好まれる。ドイツからの旅行者が 2012 年に外国で使ったお金は、全体で 640 億ユーロに達するところだったが、1 年前だったらこれは世界記録だったかもしれない。この長距離旅行と対をなすものに、ドイツ人の極端な徒歩旅行好きがある。「旅行の目標は目的地につくこと、徒歩旅行の意味は歩きまわること」と初代ドイツ連邦共和国大統領テオドール・ホイスが言ったことがあるが、ドイツ人が根っから「歩き回る」のが好きであるのは明らかだ。Gesellschaft für Freizeit によれば成人した全ドイツ国民のおよそ半数が、多かれ少なかれ定期的に徒歩旅行を行っている。Institut der deutschen

Wirtschaftによると、それどころか18歳以上のドイツ人の3分の2が、旅行の際に車を使いたがらない。その際、徒歩旅行者にとって一番重要なのは、美しい風景と広々とした見晴らしだ。それに続いて3番目に重要なのが信頼のおけるガイドブックだ。

ドイツ人に特徴的な旅行好き、徒歩旅行好きは、一見すると同じくドイツ人に特徴的な故郷愛とまったく奇妙な対照をなしているように見える。アメリカ人は一生のうちで平均14回、イギリス人は8回、日本人は5回引越すが、ドイツ人は3回だ。それも、どうしてもそうしなければならない場合に限られる。「故郷」というテーマは今後さらにその重要性を増すだろうとドイツ人の半分以上が考えている、とZDFは解説している。

外国人旅行者にとって、このドイツ人の故郷愛は奇異に感じられる。ロシアの作家ウラジーミル・カミーナーは彼が抱いた印象を次のようにまとめている（この印象は自身の故郷ロシア同様、ドイツでもみんなが故郷の村からの脱出だけを求めているという先入観から始まっていた）。「そうこうするうちにわかったことは、ドイツ人が自分の居場所を、それがどこであれ、何よりも愛していて、他の場所での幸せな生活をまったく想像できないということだ」。

多くのドイツ人が「他の場所での幸せな生活をまったく想像できない」というこの状況がまさに、ドイツ人に特徴的な旅行好きの理由を説明している。「よその土地に行って初めて、我々は故郷とは何かを知る」とテオドール・フォンターネがすでに書いている。どこで生活しようとどうでもよい人は、休暇に旅に出たいとも思わない。ドイツ人に特徴的な故郷愛とはつまり、時には気分転換にこの地上の別の土地を訪れてみたいという衝動なのだ。（公益財団法人ドイツ語学文学振興会、〈2級、準1級、1級〉、pp.59-60）

7.3. 「ドイツ語Ⅱ総合」統一教材・〈ドイツ人の食生活〉

早稲田大学商学部では二次生の「ドイツ語Ⅱ総合」の秋学期に、専任教員

が六つ程度のテキストからなる統一教材を毎年編纂し、すべての組で使用している。ここに挙げるのは 2016 年度の一例である。

7. 3. 1. Okamura et al. による場合

Die Deutschen und ihre Ernährung

Fleisch, (1 ~~Kartoffeln~~) und Bier – was ist (2 ~~dran~~) an den (3 ~~Klischees~~) über deutsche (4 ~~Ess-~~) und (5 ~~Trinkgewohnheit~~)?



© dpa/Sven Hoppe – consumption

Wie es häufig ist bei (6 ~~Klischees~~): Ein (7 ~~Körnehen~~) Wahrheit mag darin enthalten sein, aber letztlich bleiben sie (8 ~~Klischees~~) – über Jahre (9 ~~eingübt~~) und bestätigt durch (10 ~~wirkungsmächtige~~) Bilder wie etwa vom (11 ~~Münchener~~) (12 ~~Oktoberfest~~). Doch (13 ~~Schweinshaxen~~) und (14 ~~Literkrüge~~) voll Bier gehören in Deutschland nicht auf den alltäglichen (15 ~~Speiseplan~~).

Beim (16 ~~Fleischkonsum~~) findet sich Deutschland weltweit noch nicht einmal in den (17 ~~Top-ten~~). Dieses (18 ~~Ranking~~) (19-1 ~~führen~~) die USA mit 120 (20 ~~Kilogramm~~) pro Kopf im Jahr (19-2 ~~an~~). Deutschland kommt auf 88 (21 ~~Kilogramm~~). (22 ~~Tendenz~~) sinkend. Im Jahr 2013 (23-1 ~~ging~~) der (24 ~~Pro-Kopf-Verbrauch~~) um (25 ~~zwei~~) (26 ~~Kilo~~) (23-2 ~~zurück~~). Immer mehr Menschen achten auf die Qualität des Fleisches, zahlen im Zweifel (27 ~~lieber~~) mehr und (28 ~~konsumieren~~) weniger. Zugleich wächst die Gruppe jener, die ganz auf Fleisch verzichten und sich (29 ~~vegetarisch~~) oder (30 ~~vegan~~) (31 ~~ernähren~~) Ein

höheres Bewusstsein für (32 Zuchtbedingungen) und (33 Produktionsweg) (34-1 geht) (34-2 einher) mit dem Wunsch nach einer gesunden (35 Lebensführung).

Wasser statt Bier

Auch die Sache mit dem Bier ist zu (36 korrigieren): Die Deutschen sind hier nicht (37 Weltmeister), noch nicht einmal (38 Europameister). Das sind die (39 Tschechen). 144 (40 Liter) trinkt im (41 Durchschnitt) jeder von ihnen im Jahr. Da wirken die Deutschen mit ihrem jährlichen (42 Pro-Kopf-Konsum) von 107 (43 Litern) fast (44 abgeschlagen). Der (45 Verbrauch) sinkt, um etwa (46 zwei) (47 Liter) pro Kopf und Jahr. Statt dessen greifen die Deutschen immer öfter zu (48 Mineralwasser): Jedes Jahr trinken sie fast 150 (49 Liter). Selbst das Bild der deutschen „(50 Kartoffelkönige)“ lässt sich nicht (51 aufrechterhalten): Etwa 60 (52 Kilogramm) isst der Deutsche im Jahr. Kein Vergleich zu Russland (250 (53 Kilogramm)) oder der (54 Ukraine) (200 (55 Kilogramm)). (56 Schlusslicht) im (57 Verbrauch) ist übrigens (58 Südamerika), wo die (59 Kartoffel) ursprünglich (60 herkam). [延べ語数 272 (写真と出典は除く) / 計算上は 269] (Quelle: Text nach einem Onlineartikel im Portal „deutschland.de“ <https://www.deutschland.de/de/topic/leben/lifestyle-kulinarik/die-deutschen-und-ihre-ernaehrung>)

* 表題は原文では太字であるが、ここでは非太字に改めた。

この場合、延べ語数 272 に対して、分離動詞の一語化により計算上の総語数は 269 である。これに対して非採録語は 60 であり、補捉率は約 78% である。しかし Liter, Kilogramm, Kilo については、日本語から理解が可能と思われる。

そこでこの3語の合計10語を基礎語彙に含めるならば、捕捉率は約81%に向上する。

一方それ自体としては基礎語彙に採録されていない語の中で、その構成要素の一部ないしは全部が採録されているものは下記のとおりである。

- (4) Essgewohnheiten: (食習慣) : essen (食べる)
- (5) Trinkgewohnheiten (飲むことについての習慣) : trinken (飲む)
- (9) eingeübt (教え込まれた) : üben (行う)
- (10) wirkungsmächtige (強力な効果のある) : Wirkung (効果, 作用) + Macht (力)
- (12) Oktoberfest (オクトーバーフェスト) : Oktober (十月) + Fest (お祭り)
- (13) Schweinshaxen (豚のすね肉を用いた料理名) : Schwein (豚)
- (15) Speiseplan (食事の予定) : Plan (計画)
- (16) Fleischkonsum (食肉消費) : Fleisch (肉)
- (24) Pro-Kopf-Verbrauch (一人当たりの消費) : Pro (~につき) + Kopf (頭数, 人数)
- (32) Zuchtbedingungen (飼育条件) : Bedingung (条件, 環境)
- (33) Produktionswege (生産過程) : Produktion (生産) + Weg (道, 方法)
- (35) Lebensführung (人生を送ること) : Leben (人生, 生活) + Führung (導き)
- (37) Weltmeister (世界チャンピオン) : Welt (世界)
- (38) Europameister (ヨーロッパチャンピオン) : Europa (ヨーロッパ)
- (41) Durchschnitt (平均) : durchschnittlich (平均の, 標準の)
- (42) Pro-Kopf-Konsum (一人当たり消費) : Pro-Kopf については (24) と同じ
- (48) Mineralwasser (ミネラルウォーター) : Wasser (水)
- (50) Kartoffelkönige (馬鈴薯の王者) : König (王, 王者)

- (51) aufrechterhalten (保持する) : erhalten (受け取る, 保持する)
 (56) Schlusslicht (最下位) : Schluss (終わり, 終了) + Licht (光)
 (58) Südamerika (南アメリカ) : Süden (南, 南部) + Amerika (アメリカ)
 (60) herkam (こちらへやって来た) : her (こちらへ) + kommen (来る)

これらのうち、構成要素のすべてが採録されている(10), (12), (33), (35), (56), (58), (60)と派生語尾の除去形である(41)は基礎語彙に含まれていると仮定するならば、非採録語は52となり、総語数の約81%は基礎語彙で捕捉が可能である。またこれに Liter, Kilogramm, Kiloを加えると、捕捉率は約84%に上昇する。

さらに(11) Münchner, (17) Top-ten, (18) Ranking, (37) Weltmeister, (38) Europameister, (48) Mineralwasser が英語ないしは日本語からミュンヘン, トップテン, ランキング, ~マイスター, ヨーロッパ~, ミネラルウォーターなどと分かり, また(16) Fleischkonsum の Konsum, (28) konsumieren, (29) vegetarisch がそれぞれ英語の consumption, consume, vegetable と関係し, (31) ernähren は表題の Ernährung の動詞形であることなどに気付けば, さらに未知語は減少し, 約88%が既知語となる。食糧や料理などについて読み慣れていれば(1)の Kartoffeln (馬鈴薯)も理解できるであろう。実際にはこのように理想的にことは運ばないにせよ, 造語法の利用や日本語, 英語語彙の戦力化などによって, 対応できる語も少なくない。

7. 3. 2. Okamura et al. と Tschirner による場合

Die Deutschen und ihre Ernährung

Fleisch, **Kartoffeln** und Bier – was ist (1 dran) an den (2 Klischees) über deutsche (3 Ess-) und (4 Trinkgewohnheiten)?

Wie es häufig ist bei (5 Klischees): Ein (6 Körnchen) Wahrheit mag darin enthalten sein, aber letztlich bleiben sie (7 Klischees) – über Jahre (8 eingeübt) und bestätigt durch (9 wirkungsmächtige) Bilder wie etwa vom **Münchner** (10 Oktoberfest). Doch (11 Schweinshaxen) und (12 Literkrüge) voll Bier gehören in Deutschland nicht auf den alltäglichen (13 Speiseplan).

Beim (14 Fleischkonsum) findet sich Deutschland weltweit noch nicht einmal in den (15 Top-ten). Dieses (16 Ranking) **führen** die USA mit 120 **Kilogramm** pro Kopf im Jahr **an**. Deutschland kommt auf 88 **Kilogramm**. **Tendenz** sinkend. Im Jahr 2013 **ging** der (17 Pro-Kopf-Verbrauch) um **zwei** (18 Kilo) **zurück**. Immer mehr Menschen achten auf die Qualität des Fleisches, zahlen im Zweifel **lieber** mehr und (19 konsumieren) weniger. Zugleich wächst die Gruppe jener, die ganz auf Fleisch verzichten und sich (20 vegetarisch) oder (21 vegan) (22 ernähren). Ein höheres Bewusstsein für (23 Zuchtbedingungen) und (24 Produktionsweg) (25-1 geht) (25-2 einher) mit dem Wunsch nach einer gesunden (26 Lebensführung).

Wasser statt Bier

Auch die Sache mit dem Bier ist zu **korrigieren**. Die Deutschen sind hier nicht **Weltmeister**, noch nicht einmal (27 Europameister). Das sind die (28 Tschechen). 144 **Liter** trinkt im **Durchschnitt** jeder von ihnen im Jahr. Da wirken die Deutschen mit ihrem jährlichen (29 Pro-Kopf-Konsum) von 107 **Litern** fast (30 abgeschlagen). Der (31 Verbrauch) sinkt, um etwa **zwei Liter** pro Kopf und Jahr. Statt dessen greifen die Deutschen immer öfter zu (32 Mineralwasser): Jedes Jahr trinken sie fast 150 **Liter**. Selbst das Bild der deutschen „(33 Kartoffelkönige)“ lässt sich nicht (34 aufrechterhalten): Etwa 60 **Kilogramm** isst der Deutsche im Jahr. Kein Vergleich zu Russland (250

Kilogramm) oder der (35 Ukraine) (200 **Kilogramm**). (36 Schlusslicht) im (37 Verbrauch) ist übrigens (38 Südamerika), wo die **Kartoffel** ursprünglich **herkam**. [延べ語数 272/計算上は 269]

* 原文では表題は太字であるが、これを非太字に改めた。写真と出典は削除した。

ここで Tschirner の基本語彙によってあらたに捕捉される 9 語を加えると、捕捉率は約 81%に向上する。一方うわのせ語彙は 13 語であり、これを加えた捕捉率は約 86%である。その中で Liter が 4 を占める。これを差し引くならば、うわのせ語彙によって捕捉されるのは 8 語にとどまる。

このテキストには数値に関する説明が多い。そこで pro Kopf im Jahr (年間一人当たり),あるいは ~ geht um ~ zurück (~が~減少する), im Durchschnitt (平均して) といった統計関係の準分野固有語彙や表現が含まれている。これらの語は同様に数値説明を含む他分野のテキストにも汎用性があり、有用である。

内容：

ドイツ人と食物

肉とビール, ドイツ人の飲食習慣についてのステレオタイプにはどのようなことがこびりついているのだろうか。

ステレオタイプについてよくあるように, 一片の真実がその中に含まれているかもしれないとしても, しかしそれはステレオタイプでしかない — 例えばミュンヒエンのオクトーバーフェストのような強力な効果を発揮する光景によって長年にわたって刷り込まれ, そして追認されてはいても, しかし豚のす

ね肉料理や一リットル入りジョッキになみなみと注がれたビールがドイツで日常的な献立であるわけではない。

食肉消費においてドイツは世界の中で上から10位にすら入らない。この順位表の首位をゆくのは年間一人当たり120kgを消費するアメリカである。ドイツが消費するのは88kgである。これは減少傾向にあり、2013年に一人当たりの消費は2キロ減少した。ますます多くの人々が肉質に留意し、迷った時には高いものを買って量を減らすようにしている。同時に肉を全く食べず、菜食主義ないしは絶対菜食主義(乳製品や卵も食べない)の食生活を送る人たちの集団も増えている。飼育条件や生産経路に対する意識の高まりは、健康な人生を送ることにに対する願望と軌を一にしている

ビールの代りに水

ビールの件についても訂正が必要である。ドイツ人はここで世界チャンピオンなのではなく、ヨーロッパチャンピオンですらない。それはチェコ人である。チェコ人は一年に一人当たり平均して144リットルのビールを飲む。そこでは年間一人当たりの消費量が107リットルのドイツ人は、ほとんど足元にもおよばない印象を与える。ビールの消費量は年間一人当たり2リットル低下している。これに代わってドイツ人はミネラルウォーターに手を伸ばすことがますます頻繁になっている。毎年彼らはほぼ150リットルを飲む。ドイツ人は「馬鈴薯大王」であるというイメージさえ保持できなくなっている。約60kgの馬鈴薯をドイツ人は一年に食べる。これはロシア(250kg)あるいはウクライナ(200kg)とは比較にならない。その消費の最下位はちなみに馬鈴薯が起源を発する南アメリカである。(筆者作成)

7.4. 「ドイツ語読解法」教材・〈人口問題〉

筆者が担当するこの授業では、春学期に人口問題、秋学期に食糧問題に關係

するテキストを集中的、連続的に読んでいる。この科目は制度的には二次の秋学期から登録が可能であるが、実際の履修者の大多数は三・四年次生である。

7. 4. 1. Okamura et al. による場合

80,5 Millionen Einwohner am (1 Jahresende) 2012 - (2 Bevölkerungszunahme) durch hohe (3 Zuwanderung)

Bevölkerungsentwicklung in Tausend



© Statistisches Bundesamt, Wiesbaden 2013

(4 WIESBADEN) - Im Jahr 2012 (5-1 nahm) nach (6 Ergebnissen) des (7 Statistischen Bundesamtes) ((8 Destatis)) die (9 Bevölkerungszahl) Deutschlands im Vergleich zum (10 Vorjahr) um 196 000 Personen (+ 0,2 %) (5-2 zu) und lag am (11 Jahresende) bei 80,5 Millionen Einwohnern. Einen ähnlich hohen (12 Zuwachs) hatte es (13 zuletzt) 1996 mit + 195 000 Personen gegeben. 2011 lag der (14 Anstieg) bei 92 000 Personen.

In den (15 vorliegenden) (16 Bevölkerungszahlen) sind die (17 Ergebnisse) des

(18 Zensus) 2011 (19 berücksichtigt). Mit der (20 Veröffentlichung) der (21 Zensusergebnisse) im Mai 2013 wurde die (22 Berechnung) der (23 Bevölkerungszahl) auf eine neue Grundlage gestellt. Die mit dem (24 Zensus) (25 festgestellte) (26 Einwohnerzahl) lag rund 1,5 Millionen unter den (27 Ergebnissen) der laufenden (28 Berechnung) der (29 Bevölkerungszahl) auf Basis der (30 Volkszählung) 1987 (31 beziehungsweise) der (32 Auswertung) des zentralen (33 Melderegisters) der DDR zum 3. Oktober 1990.

Die Entwicklung der Bevölkerung ergibt sich zum einen aus den Geburten und (34 Sterbefällen) und zum anderen aus den (35 Zu-) und (36 Fortzügen). Zudem (37-1 fließt) eine kleine Zahl von (38 Korrekturen) in die (39 Berechnung) (37-2 ein). Die Zahl der Geburten lag wie in den (40 Vorjahren) deutlich unter der Zahl der (41 Sterbefälle). (42 Hauptursache) für den (43 Anstieg) der (44 Bevölkerungszahl) war (45 somit) wie auch schon im vergangenen Jahr die stark gestiegene (46 Zuwanderung).

Die (47 Bevölkerungszahlen) entwickelten sich 2012 (48 regional) sehr unterschiedlich. In neun Bundesländern stiegen die (49 Bevölkerungszahlen): (50 Bayern) (+ 76 000), (51 Baden-Württemberg) (+ 57 000), (52 Berlin) (+ 49 000), (53 Hessen) (+ 23 000), (54 Hamburg) (+ 16 000), (55 Nordrhein-Westfalen) (+ 9 000), (56 Niedersachsen) (+ 5 000), (57 Schleswig-Holstein) (+ 4 000) und (58 Bremen) (+ 3 000). In (59 Rheinland-Pfalz) blieb die (60 Bevölkerungszahl) (61 nahezu) gleich (+ 200). In den neuen Bundesländern sowie im (62 Saarland) war die (63 Einwohnerzahl) dagegen (64 rückläufig). Besonders hoch (65-1 fiel) der (66 Bevölkerungsrückgang) in (67 Sachsen-Anhalt) (- 17 000) sowie in (68 Thüringen) (- 11 000) und (69 Mecklenburg-Vorpommern) (- 7 000) (65-2 aus).

[延べ語数 289 (グラフと出典は除く) / 計算上は 271] (Statistisches Bundesamt, Pressemitteilung Nr. 283 vom 27.08.2013) https://www.destatis.de/DE/PresseService/Presse/Pressemitteilungen/2013/08/PD13_283_12411.html (2017年2月12日採録)

* 州別の人口一覧表は削除した。

二つの分離動詞と数字の一語化により、計算上の延べ語数は 271 である。これに対して非捕捉語は 69 であり、捕捉率は約 75% である。最後の段落にはドイツの州の名称が 14 列挙されている。これを含めて計算すると約 80% である。

これはドイツ連邦統計局による人口問題に関するテキストであることから、Bevölkerungszahl (人口), Zuwanderung (移住), Zensus (国勢調査) といった人口問題に関する分野固有語彙や統計に関する準分野固有語彙が多い。これらは 7.4.2. に見るように、うわのせ語彙をもってしても必ずしも捕捉が可能であるわけではない。しかしこれらを分解すると、その多くは一般的な内容語に還元が可能な場合も少なくない。構成要素の一部ないしは全部が Okamura et al. に採録されている語は下記のとおりである。

- (1) Jahresende (年末) : Jahr (年) + Ende (終わり)
- (2) Bevölkerungszunahme : Bevölkerung (人口)
- (3) Zuwanderung (移住) : zu (~へ) + wandern (移る)
- (9) Bevölkerungszahl (人口) : Bevölkerung (住民, 人口) + Zahl (数)
- (10) Vorjahr (前年) : vor (以前に) + Jahr (年)
- (20) Veröffentlichung (公開) : veröffentlichen (公開する)
- (22) Berechnung (計算) : rechnen (計算する, 算出する)
- (26) Einwohnerzahl (人口) : Einwohner (住民) + Zahl (数)

- (30) Volkszählung (国勢調査) : Volk (国民) + zählen (数える)
- (32) Auswertung (評価, 利用) : auswerten (評価する, 見なす)
- (33) Melderegisters (住民登録記録) : melden (申し出る)
- (34) Sterbefällen (死亡) : sterben (死ぬ) + Fall (場合, 事例)
- (35) Zuzügen ([人口の] 流入) : zu (~へ) + ziehen (移住する)
- (36) Fortzügen ([人口の] 流出) : ziehen (移住する)
- (37) einfließt (流入する) : fließen (流れる)
- (42) Hauptursache (主な原因) : Ursache (原因)
- (48) regional (地域的な) : Region (地域)

本テキストは7.3.のドイツ人の食生活に関するテキストと同様に統計的数値の説明を含んでいる。しかし内容的に前者が〈減少〉に関してであるのに対して、こちらは〈増加〉についてであることもあって、直接重なる語彙は Vergleich zu ~ (〜と比較して) くらいである。しかし主題や内容の点で共通するテキストをさらに読み進める中で、それぞれの統計関係の語彙が反復して出現することは十分に考えられる。

7. 4. 2. Okamura et al. と Tschirner による場合

80,5 Millionen Einwohner am (1 Jahresende) 2012 – (2 Bevölkerungszunahme) durch hohe (3 Zuwanderung)

(4 WIESBADEN) – Im Jahr 2012 **nahm** nach **Ergebnissen** des (5 Statistischen Bundesamtes) ((6 Destatis)) die (7 Bevölkerungszahl) Deutschlands im Vergleich zum **Vorjahr** um 196 000 Personen (+ 0,2 %) **zu** und lag am (8 Jahresende) bei 80,5 Millionen Einwohnern. Einen ähnlich hohen **Zuwachs** hatte es **zuletzt** 1996 mit + 195 000 Personen gegeben. 2011 lag der **Anstieg**

bei 92 000 Personen.

In den **vorliegenden** (9 Bevölkerungszahlen) sind die **Ergebnisse** des (10 Zensus) 2011 **berücksichtigt**. Mit der **Veröffentlichung** der (11 Zensusergebnisse) im Mai 2013 wurde die **Berechnung** der (12 Bevölkerungszahl) auf eine neue Grundlage gestellt. Die mit dem (13 Zensus) **festgestellte** (14 Einwohnerzahl) lag rund 1,5 Millionen unter den **Ergebnissen** der laufenden **Berechnung** der (15 Bevölkerungszahl) auf Basis der (16 Volkszählung) 1987 **beziehungsweise** der **Auswertung** des zentralen (17 Melderegisters) der DDR zum 3. Oktober 1990.

Die Entwicklung der Bevölkerung ergibt sich zum einen aus den Geburten und (18 Sterbefällen) und zum anderen aus den (19 Zu-) und (20 Fortzügen). Zudem (21-1 fließt) eine kleine Zahl von (22 Korrekturen) in die **Berechnung** (21-2 ein). Die Zahl der Geburten lag wie in den **Vorjahren** deutlich unter der Zahl der (23 Sterbefälle). (24 Hauptursache) für den **Anstieg** der (25 Bevölkerungszahl) war **somit** wie auch schon im vergangenen Jahr die stark gestiegene (26 Zuwanderung).

Die (27 Bevölkerungszahlen) entwickelten sich 2012 **regional** sehr unterschiedlich. In neun Bundesländern stiegen die (28 Bevölkerungszahlen): (29 Bayern) (+ 76 000), (30 Baden-Württemberg) (+ 57 000), (31 Berlin) (+ 49 000), (32 Hessen) (+ 23 000), (33 Hamburg) (+ 16 000), (34 Nordrhein-Westfalen) (+ 9 000), (35 Niedersachsen) (+ 5 000), (36 Schleswig-Holstein) (+ 4 000) und (37 Bremen) (+ 3 000). In (38 Rheinland-Pfalz) blieb die (39 Bevölkerungszahl) **nahezu** gleich (+ 200). In den neuen Bundesländern sowie im (40 Saarland) war

die (41 Einwohnerzahl) dagegen (42 rückläufig). Besonders hoch **fiel** der (43 Bevölkerungsrückgang) in (44 Sachsen-Anhalt) (- 17 000) sowie in (45 Thüringen) (- 11 000) und (46 Mecklenburg-Vorpommern) (- 7 000) **aus**. [延べ語数 289/計算上は 271]

* グラフと出典は削除した。

Tschirnerによってあらたに捕捉できた 23 語のうち、基本語彙は 12、うわのせ語彙は 11 語であり、全体の捕捉率は約 83%である。14 の州名も加えると約 89%に上昇する。

内容：

2012 年末に人口 8050 万人 — 多数の移民による人口増加

ヴィーズバーデン—連邦統計局の調査結果によると 2012 年にドイツの人口は対前年比で 196000 人 (+0,2%増) 増加し、年末に約 8050 万人となった。これと類似した高水準の増加が見られたのは、最近では 195000 人増加した 1996 年であった。

現在の人口は 2011 年の国勢調査の結果である。2013 年 5 月に調査結果が発表されたことにより、人口の算定は新たな基盤に基づいて行われた。国勢調査によって確認された人口は、1987 年の国勢調査と 1990 年 10 月 3 日のドイツ民主共和国における住民登録記録集の利用に基づいた現在の人口算定結果を約 150 万人下回っていた。

人口の伸びは、一つには出生と死亡によって、もう一つには人口の流入と流出によって生じる。これにさらに少数の修正値が算定に加わる。出生数は過去数年と同様に死亡件数を下回っていた。人口増加の主な要因はしたがって昨年

も移民の著しい増加であった。

人口の増減は、2012年には地域的に著しい違いがあった。九つの諸州においては人口が増加した：バイエルン（+76000）、バーデン-ヴュルテンベルク（+57000）、ベルリン（+49000）、ヘッセン（+23000）、ハンブルク（+16000）、ノルトライン-ヴェストファーレン（+9000）、ニーダーザクセン（+5000）、シュレスヴィッヒ-ホルシュタイン（+4000）、ブレーメン（+3000）。ラインラント-プファルツ（+200）では人口はほぼ同じにとどまった。旧東ドイツ諸州とザールラントでは人口は逆に減少した。特に人口減が大きかったのはザクセン-アンハルト（-17000）及びテューリングゲン（-11000）、メクレンブルク-フォアポンメルン（-4000）であった。（筆者作成）

7.5. 捕捉率のまとめ

Okamura et al. の基礎語彙による捕捉率と Tschirner の基本／うわのせ語彙によってあらたに捕捉される語数、そしてこれらを加えたそれぞれの捕捉率は以下のとおりである。

	Okamura et al. (非捕捉語／計算上の延べ語数)	Tschirner
ハンブルク	77% (37 / 159)	基本語彙 4 語を加算 ⇒ 79% うわのせ語彙 11 語も加算 ⇒ 86%
ドイツ人と旅行	83% (58 / 336)	基本語彙 12 語を加算 ⇒ 86% うわのせ語彙 5 語も加算 ⇒ 88%
ドイツ人の食生活	78% (60 / 269)	基本語彙 9 語を加算 ⇒ 81% うわのせ語彙 13 語も加算 ⇒ 86%
人口問題	75% (69 / 271)	基本語彙 12 語を加算 ⇒ 79% うわのせ語彙 11 語も加算 ⇒ 83%

(小数点以下四捨五入)

8. 語彙習得に際しての注意点と提案

事例からの教訓も合わせて、語彙の習得に際しての注意点と提案は次のとおりである。

(1) 基本語彙とうわのせ語彙

上に見た〈ハンブルク〉ではうわのせ語彙に採録されている Hafen が7回も使われ、〈人口問題〉では州名が列挙されている。また〈ドイツの食生活〉では Liter, Kilogramm, Kilo が基礎語彙には採録されていない。これらによる捕捉率の若干の低下を考慮すると、通常は Okamura et al. の基礎語彙のみで80%程度の語は捕捉される。そして Tschirner によってあらたに捕捉される語彙の半分程度も基本語彙である。このことを考えると、まず重要なのは基本語彙であり、うわのせ語彙2000の捕捉率向上への貢献度はそれほど高いとはいえない。

Scharloth によれば Okamura et al. と Tschirner における語彙の重なり率は約71%であり、語彙素の表示法の違いを考慮すると実際にはもう少し高いと見積もられるとのことである(筆者宛私信)。これらのことを考えるならば、第一に目標とすべきなのは、両者に共通する実数にして1500語程度の習得である。それに加えて Okamura et al. と Tschirner の基本語彙に固有のそれぞれ約30%の語彙、実数にして合計1200語程度、上の1500語と合わせて3000語ほどを習得することによって、テキスト中の約80%を上回る語彙が既知語となる可能性が高い。

Okamura et al. によるドイツ語の各使用域での出現頻度などに関する研究結果を考慮すれば、あらゆる使用域に有効な閾値を画定するためには、これが可能かどうかも含めて、さらなる研究の積み重ねが必要であろう。しかし Okamura et al. や Tschirner による基本語彙集は、ドイツ語語彙の習得に際して

参考にすべき貴重な手がかりであることもまた確かであり、その積極的な利用を推奨する。

(2) カバー率と造語法

英語とドイツ語は異なる言語である。したがって読解に必要な語数やカバー率などについての英語教育の研究成果は、一つの参考とはなり得ても、これをそのままドイツ語に適用することには問題が多い。その理由の一例は造語法をめぐる次のような事情である。

英語にも合成名詞は存在するものの、ドイツ語はそれをはるかに好む。ここにいくつか例を挙げてみよう。[…]

Türschloss (扉の錠) : door locker, door latch

Eingangstür (入口の扉) : entrance door

Holztür (木の扉) : wooden door

Weinkellertür (ぶどう酒貯蔵室の扉) : wine cellar door

基本語彙にとってこれは何を意味するのだろうか。合成名詞を構成する各部分は合成語自身よりもはるかに高頻度で出現する。英語には分析的傾向が強い。このことは単一語を「順位表の中で上へ」押し上げる。ドイツ語には統合的な傾向が強い。その結果が出現頻度の低い多くの複合語であり、単一語に基づくテキストカバー率は悪化する。(Willi Lange, 筆者宛私信)

Lange の挙げる上の四語は Okamura et al. とうわのせ語彙も含めた Tschirner のいずれにも採録されていない。しかし Tür, Eingang, Wein, Keller は

Okamura et al. に, Schloss と Holz は Tschirner の基本語彙に採録されている。このようにドイツ語には合成語が多いにもかかわらず, これが Okamura et al. と Tschirner の基本語彙あるいはわのせ語彙によって捕捉されることは少ない。しかし上の 7. の実例に見たように, これら合成語を構成ないしはこれに関連する語の多くは基礎語彙に採録されており, その活用によって捕捉率は向上する。こうした点からもドイツ語の読解においては, まず基本語彙と造語法の組み合わせによってより多くの語彙に柔軟かつ創造的に対処することが可能かつ不可欠である。

(3) テキスト内容と語彙

上の実例では人口問題に関するテキストは一つを例示するにとどめた。しかし Bevölkerungszahl (人口), Sterbefälle (死亡 (件数)), Zuwanderung (移住) といった分野固有語彙は人口問題に関する他のテキストにも頻出する。これらの語は基本語彙にはまず含まれていないことから, 最初は一般内容語に還元して考えるなど対処に時間と労力をとられる。しかし二つ目, 三つ目のテキストでは同一語あるいは類似の語が反復出現することによって負担は急速に減少する。こうした点で分野固有語彙は比較的対処しやすいうえに有用性が高い。また本例のようにグラフや数値などを多く含むテキストは往々にしてその説明が中心であり, 文構造なども比較的単純で, またグラフや数値などの助けもあって一般に読みやすい。

ドイツ人の食生活に関するテキストもまた, 食糧問題や料理についてのテキストを読み慣れている読者には語彙面での負担は比較的少ないであろう。そしてこのテキストは pro Kopf im Jahr, あるいは ~ geht um ~ zurück といった統計関係の〈準分野固有語彙〉や表現を含むことから, 同じく統計関係の語彙や表現を多く含む人口問題のテキストともこうした面で親和性があり, 相互の移行は比較的容易であろう。

それとは逆に対処が一般的に困難なのは、独検2級の問題に見られるような抽象的、思弁的な内容で、一般内容語を多く含むテキストである。これに対しては基本語彙、特殊化語彙、接続語、造語法、英語語彙の参照など持てる力のすべてを挙げて包囲攻略を図る必要がある。

(4) 数詞と略語、固有名詞

数詞の重要性に鑑み、基本語彙への採録の有無以前に、基数詞と序数詞はぜひとも身に付けておく必要がある。ドイツ語の基数詞は1から12までとhundert (百), tausend (千), Million (百万), Milliarde (十億)を覚えれば、残りに対してはほとんど規則的に対応が可能である。序数詞についても同様である。同時に-mal (-回/-倍), -fach (-倍), 分数の表現なども習得しておくことによって、読解への効果はさらに拡大する。

またca. (circa 約), z. B. (zum Beispiel 例えば), bzw. (beziehungsweise ないしは)など頻繁に目にする略語も基本語彙に含めて習得しておくべき対象である。

テキストには固有名詞がよく出現する。ドイツ語圏関連の主要な地名や人名、機関名だけでもかなりの数に及ぶことから、これらすべてを語彙、とりわけ基本語彙が引き受けることは不可能である。そこでこれらについてはドイツ語語彙というよりも、むしろ地理や歴史などをはじめとする一般常識、ないしは背景的知識と考えて対処する必要がある。したがって求められるのは狭義の外国語についての言語能力にとどまらず、知的総合力である。そのためには日頃からの幅広い領域に対する関心や勉学の心掛けが必要である。こうした分野に関しては、日本語の新聞や書籍、テレビ番組、DVD、インターネットなども有益であろう。

以上の諸点を勘案し、語彙への対処として次のような方策を提案する：

語彙力の拡大・強化はテキストを読みながら、そこから語彙を獲得しつつ行うことを基本とする。その際に出現する未知語については、〈無視する〉、〈意味内容を推測する〉などに努める。辞書を引くのは重要語に絞り、意識的になるべく少く引くよう努力する。読解力と語彙力の向上を目標として読むに際しての基本方針は、〈既存の内容的知識を利用してことばを獲得する〉、すなわち〈知識からことばへ〉とする。そこで読む対象分野は次々に変えるのではなく、基本的に自分が内容的によく知っている、あるいは関心のある分野に絞り、関連するテキストを一定期間集中的、連続的に読む。これによって内容面からのテキスト理解が促進されると同時に、特殊化語彙などの反復出現を通じて語彙面での負担が軽減され、一般内容語の習得も促進される。

こうしてテキストを読み進める中から自分に必要な語彙を収集・習得し、これを新たなテキストの読解に投入しつつ前進することによって長期的観点から読解速度／読解量の向上と語彙力の全般的拡充を図る。具体的には、テキストを読むに際して Okamura et al. の基礎語彙ないしは Tschirner の基本語彙のいずれかを参照し、これで捕捉できない語はもう一方で補いつつ、基本的な 2000～3000 語程度をまず第一段階の目標として習得する。その一方で、造語法の活用や英語語彙の戦力化を積極的に行うことによって、手持ちの語彙資源の発展的な利用拡大を図る。また特殊化語彙は一般的語彙とも関連させつつ習得を進め、手持ち語彙全体の総合的效果の中で〈マッシュ効果〉を追求する。一般内容語の不足分や低頻度語については辞書も活用しつつ、さらにテキストを読み進める中でうわのせ語彙約 2000 の習得を第二段階の目標とする。

9. おわりに

風邪をひくと一般に熱が出て、頭痛がし、体がだるくなったりなどする。それならば、何らかの方法で発熱させ、頭痛を起こさせ、だるくさせればその人

は風邪をひいたということになるのであろうか（佐伯, pp. 96-97）。この問題について佐伯は次のように述べている。

つまり「風邪菌」（そういう名のバイキンが世にあるかは別として）に犯されているという、身体システムの状態がまず存在し、そこからごく自然に、やむにやまれず、外に「あふれ出て来た」のが熱であり、頭痛であり、「だるさ」なのだ。気を付けていただきたいのは、この場合「熱」とか「頭痛」とか「だるさ」が、バラバラに、なにかのカタマリみたいに身体のあちこちにヒョイヒョイと置かれていて、「とり外し」たり、「注入」したり、他の人の身体の中に「うつしかえ」たり、というようなことのできないシロモノである、という点である。（佐伯, p. 97）

読解力もこれと同じである。良い読み手は語彙や文法、内容的知識などを備えている。それではこれらの要素を集中的に学習者に注入すれば、読解力は向上するであろうか。筆者は懐疑的である。重要不規則動詞の意味内容や過去形、過去分詞についての試験を行えば満点近い得点を挙げる学習者が、実際にテキスト中の *fiel*（落ちた）や *zugenommen*（増加した）などにそれと気付かず、うまく読めないことはよくあることである。しかしこれは単に学習者が悪いとか怠慢だということではない。〈得点と偏差値のための勉学〉という学習者の料簡の問題性は別として、人間の認知や行動とはそうしたものだからである。単に構成要素を注入し、あるいはその量を増やしても効果は少ない。必要なのは構成要素同士の関連であり、読解力という〈身体システムの状態〉をあくまでも中心に置き、その中で語彙や内容的知識などに問題があればそれぞれに手当てしつつ相互の関連を図るという図式で対応することである。そのためには基本的に読みながらこれらの問題点に対処する必要がある。

筆者は昔剣道を少しかじったことがある。最初に行ったのは木刀の素振りであ

あった。師範が木刀の握り方と力入れ方、足の運びなどについて簡単に説明してくれ、模範を見せてくれた。その後はこれを真似して道場の隅でひたすら木刀を振ったものの、うまくゆかないまま何週間か過ぎた。しかし不思議なことに、そのうちにヘンな力が抜け、それなりに滑らかに振れるようになった。〈収まるところに収まった〉という感じがしたことを覚えている。頭ではなく、体が習得したのである。しかし剣道というわざ（技）の全体性からするとこれは方向が逆であろう。先にあるのは体とその一部である竹刀が適切に動かせるという〈わざ〉であり、〈そこからごく自然に、やむにやまれず、外に「あふれ出て来た」〉のが握り方であり、力入れ方などの注意点なのである。しかし筆者が体験したように、こうした個別的项目だけでは竹刀は振れない。必要なのはこれらの項目間に身体的な網の目状の関係（〈ネットワーク〉）を作り出すことである。そのためには素振りを繰り返すことによって〈振り慣れる〉ことが不可欠であり、その中からわざが身に付く。

外国語の運用能力というわざの習得も、これと同様に知識の問題というよりも身体性のあるところが大いである。話すことはまさに口や舌、喉などの筋肉運動や呼吸の問題であり、読むに際しては文字や語などの認知に伴う神経回路の働きや眼球運動がかかわっている。語彙や文法など構成要素の個別的な量や質の改善ばかり図ってもそのままでは読解力の向上には結びつかない。読むというわざについて必要なのは何よりも読み慣れることであり、その過程の中で語彙や文法が必要であり、また互いの関連の中でそれぞれの役を果たすのである。筆者の好きなことばで言えば、「話はみんなつながっている」である。剣道の話に戻るならば、木刀の握り方などの要素的知識を与えられることなく、いきなり木刀を振らされたとしても、時とともにいずれはそれなりに振れるようになったであろう。しかし師範が最初に与えてくれた〈知識〉が学習過程を支援し、短縮したことも確かだと思う。

本稿で長々と書いたことは、筆者が師範から与えられた要素的知識項目のよ

うなものである。しかしそれはどんなに詳細をきわめて言語化しても限界と制約があり、それを読解力あるいは語彙力というわざに仕立てるには各個人による〈稽古〉が不可欠である。わざは電腦間で記憶媒体を抜き差しするような形でそれをそのまま他者に与えることはできない。教示はあくまでも示唆を超えるものではない。わざの継承とはそうしたものであり、各自は自分でわざを作り上げなければならない。このことは業務遂行という皮相的・功利的次元では不便である。しかしより深い次元において、これはまさに人間が個人として存在する理由のよって立つ源である。読解のわざが不要になるときは、われわれも存在する必要がなくなる時である。

本稿は下記の科学研究費補助金による研究成果の一部である。

研究代表者：岡村三郎

研究分担者：原口厚

研究協力者：Joachim Scharloth, Willi Lange, Noah Bubenhofer

2015-2017 年度基盤研究 (C), 課題番号：15K02734

研究課題名：「語彙習得と言語使用：ドイツ語基本語彙の認知的習得モデルの実証的な基盤研究」

10. 註

(1) 後に述べるように、語数は数え方によって大きく変わる。ここで挙げられている語数はどのような数え方に基づくのかがはっきりしない。しかし記述の趣旨と内容からして、〈見出し語 (lemma) 換算〉(81 頁参照) であるかと思われる。

英語の場合、望月 (他) は母語話者の大学生の語彙数は、固有名詞、複合語、派生語、短縮形などを除き、基本形のみを数えた場合、14,000 語から 17,000 語であるという研究結果を紹介している (望月 (他), p. 26)。しかし彼らが「実際の会話で使っている語彙は、80%以上を 500 語程度でまかなっているということになります。普段話している語彙の約 94%は 2,000 語程度の範囲内にあることになります」(望月 (他), p. 26) ともされている。

(2) 学校課題とは次のようなものである。

それをうまく解いたとしても本来何の意味もない課題、学習者にとって内発的に興味をひくものでもないし、それを解いたことが他の人々に役に立つ、といった社会的な意義をもつもの

でもない、しかし序列化の基盤として使われるために取り組むことが「強制」される、といった意味である。(波多野・稲垣, p. 138)

- (3) この譬はマタイ伝福音書第25章29節の「すべて有てる人は、與へられて愈々豊かならん。然れど有たぬ者は、その有てるものも取らるべし」(新約聖書, p. 55)に由来する。
- (4) AWL (Academic Word List) とは Coxhead が作成したアカデミック用語集 (Coxhead, 1998) である。
- (5) 閾値 (threshold) とは、「〔刺激が反応を起こす限界点〕: (一般に) (それを越えるとある事が起こる) 限界, レベル」(ルミナス英和辞典, p. 1843) であり、本稿の場合、テキスト理解に最低限必要とされる語彙についての値のことである。
- (6) UWL とはそれまでにあった四つのアカデミック用語集を Xue と Nation が一つにまとめたもの (Nation and Whang, p. 36) である。
- (7) 同所では〈基礎語彙〉という名称が使用されている。
- (8) 均衡コーパスとは次のようなものである。

そのコーパスに含まれるテキストを選択する際に、テキストの種類やジャンルが偏らないよう、あらかじめ一定の科学的な選択基準に基づいて様々な分野のテキストを一定量ずつバランスよく集めて作成されたコーパスのことを言う。(岩崎, p. 48)。

しかしこれは英語圏の「数億語レベルのBNC (筆者註 British National Corpus)」等と比べると比較的小さいとされている。(岩崎, p. 48)

- (9) Jones and Tschirner, あるいは Tschirner と同様に Okamura et al. でも Grundwortschatz という用語が用いられている。しかしこのサイトの日本語版では「基礎語彙」ということばが使われている。そこで Okamura et al. の作成した語彙集の Grundwortschatz は日本語では「基礎語彙」とし、Jones and Tschirner, Tschirner の Grundwortschatz, あるいは Okamura et al. の基礎語彙も含めて広く〈基本的な語彙〉を指す場合は「基本語彙」という用語を以下では使用する。したがって両者は本質的に異なるものではない。
- (10) 語彙素とは次のような語彙単位である。

具体的な実現形態としての語形の基礎になっている抽象的な語彙単位で、例えば、Haus - Häuses - Häuser - Häusern は語形の異なる五つの語であるが、一つの語彙の意味を共通にもつという点では一つの語彙素 {Haus} が状況に応じてさまざまな形に実現したものと見える。辞書の見出し語とはそうした語彙素を便宜的に表したものである。(ドイツ言語学辞典, p. 544)

- (11) 5.2.2. の3) に述べるように、接続詞と副詞の厳密な区別は難しい。そこで本稿では接続詞と接続詞的に用いられる副詞を一括して〈接続語〉とする。

11. 文献一覧

11.1. 引用文献

- Bohn, R., (1999). *Probleme der Wortschatzarbeit*. (Fernstudieneinheit 22). Langenscheidt.
- Cohen, A., Glasman, H., Rosenbaum-Cohen, P. R., Ferrara, J., Fine, J., (1979). Reading English for specialized purposes: Discourse analysis and the use of student informants. *TESOL QUARTERLY*, Vol. 13, No. 4. pp. 551-564.
- 浜崎長寿・乙政潤・野入逸彦 (2000) 『ドイツ語文法研究概論』(ドイツ語文法シリーズ1) 大学書林
- 橋本文夫 (1977) 『詳解ドイツ大文法』三修社
- 波多野諠余夫・稲垣佳世子 (1984) 『知力と学力 一学校で何を学ぶか—』岩波新書
- 原口 厚 (2012) 「ドイツ語読解の戦略と戦術 (1) 一読解過程/読解の戦略と読解学習の戦略/理解の第一歩としての概要把握—」『文化論集』第39・40合併号 早稲田商学同攻会

- 原口 厚 (2013) 「ドイツ語読解の戦略と戦術 (2) —文法的戦術 (1) 動詞の位置と枠構造／複合文の分割／文成分への分解—」『文化論集』第41・42合併号 早稲田商学同攻会
- 原口 厚 (2014) 「ドイツ語読解の戦略と戦術 (3) —文法的戦術 (2) 精読時の文法的諸問題—」『文化論集』第43・44合併号 早稲田商学同攻会
- Hirsh, D. and Nation, P., (1992). What vocabulary size is needed to read unsimplified texts for pleasure? *Reading in a Foreign Language*, 8 (2). pp. 689-696.
- Hu, M. and Nation, I. S. P., (2000). Unknown vocabulary density and reading comprehension. *Reading in a Foreign Language*, 13 (1). pp. 403-430.
- Hwang, K. and Nation, P., (1989). Reducing the vocabulary load and encouraging vocabulary learning through reading newspapers. *Reading in a Foreign Language*, 6 (1). pp. 323-335.
- 岩崎克己 (2012) 「日本の DaF におけるドイツ語基礎語彙へのアプローチ」In: 岡村三郎, ヴィリー・ラング, ヨアヒム・シャルロート編『ドイツ語基本語彙 —辞書学的, 外国語教授法の観点から—』(日本独文学会研究叢書 088号) 日本独文学会 pp. 45-66.
- Jones, R. L., (2006). An analysis of lexical text coverage in contemporary German. In: Wilson, A., Rayson, P. and Archer, D. (Eds.), *Corpus Linguistics around the World*. Amsterdam: Rodopi. pp. 115-120.
- Jones, R. L. and Tschirner, E., (2006). *A frequency dictionary of German Core vocabulary for learners*. Routledge.
- 公益財団法人ドイツ語学文学振興会編 (2016) 独検過去問題集 2016年版 <5級・4級・3級> 郁文堂
- 公益財団法人ドイツ語学文学振興会編 (2016) 独検過去問題集 2016年版 <2級・準1級・1級> 郁文堂
- 公益財団法人ドイツ語学文学振興会 各級のレベルと内容 <http://www.dokken.or.jp/about/level.html> (2016年12月15日採録)
- Krashen S. D. (1981). The case for narrow reading. *TESOL NEWSLETTER*. Vol. XV, No. 6. p. 23.
- Lange, W., Okamura, S., Scharloth, J., (2015). Grundwortschatz Deutsch als Fremdsprache: Ein datengeleiteter Ansatz. In: Kilian, J. und Eckhoff, J. (Hrsg.): *Deutscher Wortschatz – beschreiben, lernen, lehren*. Beiträge zur Wortschatzarbeit in Wissenschaft, Sprachunterricht, Gesellschaft. Peter Lang. pp. 203-219.
- Laufer, B., (1989). What percentage of text-lexis is essential for comprehension? In: Lauren, C. and Nordman, M. (Eds.), *From Humans Thinking to Thinking Machines*. Clevedon, UK: Multilingual Matters. pp. 316-323.
- Laufer, B., (1992). How much lexis is necessary for reading comprehension? In: Arnaud, P. J. L. and Béjoint H. (Eds.), *Vocabulary and applied Linguistics*. Reprinted and bound 1995 by Antony Rowe. pp. 126-132.
- Laufer, B. and Sim, D., (1985). Measuring and explaining the reading threshold needed for English for academic purposes texts. *Foreign Language Annals*, 18, No. 5. pp. 405-411.
- Liu, N. and Nation, I. S. P., (1985). Factors affecting guessing vocabulary in context. *RELJ JOURNAL*, Vol. 16, No. 1. pp. 33-42.
- ミッヒェル (Michel, Wolfgang)・樋口忠治・新保弼彬・小坂光一・吉中幸平 (1980) 『これからのドイツ語』 郁文堂
- 三好助三郎 (1993) 『新独英比較文法』 郁文堂
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 (2003) 『英語語彙の指導マニュアル』(英語教育 21世紀叢書) 大修館書店
- 村上重子 (2003) 『接続詞』(ドイツ語文法シリーズ 6) 大学書林

- Nation, I. S. P., (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press. (⇒ 吉田・三根 (2005) 参照)
- Nation, P. and Hwang, K., (1995). Where would general service vocabulary stop and special purposes vocabulary begin? *System*, Vol. 23, No. 1, pp. 35-41.
- 野入逸彦・太城桂子 (2002) 『語彙・造語』(ドイツ語文法シリーズ7) 大学書林
- Okamura, S., Lange, W., Scharloth, J. (2012). Methoden der Bestimmung des Kernwortschatzes Deutsch. In: 岡村三郎, ヴィリール・ランゲ, ヨアヒム・シャルロート編『ドイツ語基本語彙—辞書学的, 外国語教授法的観点から—』(日本独文学会研究叢書 088号) pp. 29-44 日本独文学会 pp. 29-44.
- 岡村三郎 (研究代表者)・Willi Lange (研究分担者)・Joachim Scharloth・Noah Bubenhofer (研究協力者) (2015) 『科研費研究成果報告書』 研究課題名: 「コーパス駆動型研究に基づく学習用ドイツ語語彙」2011-2014 年度基盤研究 (B) 課題番号: 23320120.
- Okamura, S., Lange, W., Scharloth, J., Bubenhofer, N., *Datengeleiteter Kernwortschatz Deutsch*. <http://japanisch.basic-german.com/> (2017年2月12日採録)
- Röhr, G., (1993). *Erschließen aus dem Kontext*. Langenscheidt.
- 佐伯 胖 (1975) 『「学び」の構造』東洋館出版社
- 相良守峯 (1965) 『ドイツ語学概論』博友社
- 佐々木庸一 (1989) 『新英語から入るドイツ語』郁文堂
- Scharloth J., Okamura, S., Lange, W. (2016). Gibt es einen Kernwortschatz? Datengeleitete Perspektiven auf die Erstellung von Grundwortschatzen für Deutsch als Fremdsprache. In: Brunetti, S. et al (Hrsg.): *Versprachlichung von Welt. Il mondo in parole. Festschrift zum 60. Geburtstag von Maria Lieber*. Tübingen: Stauffenburg. pp. 273-284.
- Schumacher, H., (1978). Grundwortschatzsammlungen des Deutschen Zu Hilfsmitteln der Didaktik des Deutsch als Fremdsprache. *Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache*. pp. 41-55.
- 清野智昭 (2008) 『中級ドイツ語のしくみ』白水社
- 関口一郎 (1994) 『マイスター ドイツ語コース① 文法』大修館書店
- 関口一郎 (2000) 『「学ぶ」から「使う」外国語へ—慶応義塾藤沢キャンパスの実践』集英社新書
- 新約聖書 (1979) 『旧新約聖書』日本聖書協会
- Stanovich, K. E., (1986). Matthew effects in reading: Some consequences of individual differences in the acquisition of literacy. *Reading Research Quarterly*, Vol. XXI/No. 4, pp. 360-407.
- 手嶋竹司 (2006) 『英語を通して学ぶドイツ語』文芸社
- Tschirner, E., (2010). *Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch als Fremdsprache nach Themen*. Cornelsen.
- 常木 実 (1970) 『標準ドイツ語〔新訂版〕』郁文堂
- 卯城祐司編著 (2009) 『英語リーディングの科学—「読めたつもり」の謎を解く』研究社
- 吉田晴世・三根浩訳 (2005) 『英語教師のためのボキャブラリー・ラーニング』松柏社 (原著は Nation, I. S. P., (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press.)

11. 2. 辞書類

- Brough, S., (1992). *Langenscheidts Handwörterbuch Deutsch-Englisch*. Neubearbeitung 1991. Langenscheidt.
- Forst, G. und Crellin, M., (1995). *Thematischer Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch-Englisch*. Klett Edition Deutsch.
- Götz, D., Haensch, G., Wellmann, H. (Hrsg.): (2003). *Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Lan-

genscheidt.

James, C. L. and James, C. J., (1991). *Basic German vocabulary*. Langenscheidt.

川島淳夫（他）編（1994）『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店

Klappenbach, R. und Steinitz, W. (Hrsg.): (1978). *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache*, 3. Band. Akademie.

国松孝二（他）編（1985）『独和大辞典』小学館

竹林滋（他）編（2001）『ルミナス英和辞典』研究社

11. 3. 本稿で言及した文献

Coxhead, A. (1998). *A academic word list*, Occasional Publication Number 18, LALS, Victoria University of Wellington, New Zealand. (⇒ Coxhead, A. (2000). *A new academic word list*. *TESOL QUARTERLY*, vol. 34, No. 2, pp. 213-238.)

福田幸夫（1994）『英語から覚えるドイツ語単語』創拓社

Grabe, W., (2009). *Reading in a second language: Moving from theory to practice*. New York: Cambridge University Press.

石川光庸・サスキア石川＝フランケ（2009）『効率よく覚える ドイツ重要単語 2200』白水社

勝又永朗（1977）『英語の歴史』大学書林語学文庫

中島文雄（1979）『英語発達史 改訂版』岩波全書

三瓶慎一（1995）「文章の構成パターンを見抜く — 論理を支える不変化詞—」『基礎ドイツ語 Nr. 9』三修社 pp. 30-33.

関口存男（1979）『趣味のドイツ語』三修社

Statistisches Bundesamt; Pressemitteilungen. <https://www.destatis.de/DE/PresseService/Presse/Pressemitteilungen/Pressemitteilungen.html> (2017年3月5日採録)

寺澤盾（2008）『英語の歴史 過去から未来への物語』中公新書

寺澤芳雄訳（1982）『英語発達小史』岩波文庫（原著は Bradley, H. (1904). *The Making of English*. Revised by Potter, S., 1968.）

Tschirner, E., (2008). *Grundwortschatz Deutsch als Fremdsprache nach Themen – Übungsbuch*. Cornelsen.

West, M., (1953). *A general service list of English words*. Longmann, Green and Co.

Xue, G. and Nation, I. S. P., (1984). A university word list. *Language Learning and Communication*, 3, pp. 215-229.